

博士論文

竹内好の向きあった中国と文学

—戦中戦後の日記から読む—

(China and Literary Studies Yoshimi Takeuchi Faced
—An Interpretation of Takeuchi's Diaries during and
after World War II—)

2019年9月

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

YU Yiyan

立命館大学審査博士論文

竹内好の向きあった中国と文学

—戦中戦後の日記から読む—

(China and Literary Studies Yoshimi Takeuchi

Faced

—An Interpretation of Takeuchi's Diaries during
and after World War II—)

2019年9月

September 2019

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

Doctoral Program: Major in Humanities

Graduate School of Letters

Ritsumeikan University

ヨ イエン

YU Yiyan

研究指導教員：上野 隆三 教授

Supervisor: Professor UENO Ryuzo

竹内好の向きあった中国と文学

—戦中戦後の日記から読む—

目次

序章

第一章：竹内好の文学観の形成

—北京留学を契機として—

はじめに

第一節：留学前の文学観

第二節：絶望

第三節：恋愛の体験

第四節：「中国」への復帰

第五節：『魯迅』とその後

おわりに

第二章：竹内好による「文学者」魯迅像の生成

—小田嶽夫の「愛国者」魯迅像への懷疑—

はじめに

第一節：『魯迅伝』と『魯迅』の関連について

第二節：「愛国者」と文学者について

第一項：小田の文学観から竹内好の文学観へ

第二項：小田の「愛」から竹内好の「愛」へ—「幻燈事件」をめぐる論争—

第三項：小田の指導者意識から竹内好の罪の意識へ

第三節：日本に対する批判

おわりに

第三章：日本の戦争システム下の文学者の交流

—竹内好の魯迅像と武田泰淳の司馬遷像を例として—

はじめに

第一節：武田泰淳と竹内好の付き合い

第二節：竹内好の魯迅像

第三節：武田泰淳の司馬遷像

第四節：乱世における悲哀

おわりに

第四章：竹内好の浦和時代における日本文学の再発見

はじめに

第一節：天皇制下の「日本国民」の文学についての思考

第二節：米軍の統治下の孤独

第三節：人民の文学についての思考

第四節：中野重治からもたらされた着想

第一項：中野重治をさらに読む

第二項：新しい魯迅論を書く

第三項：『国民文学論』における中野重治に対する理解

第五節：国民文学論争における竹内好の姿勢についての試論

おわりに

終章

第一節：日本文学と中国の間

第二節：国民文学論争のその後

初出一覧

附録

参考文献一覧

凡例

- 原文が中国語の文章の日本語訳は、特に断わりのないものについては筆者自身の訳である。
- 本論文で引用の内容は、原則として旧字は新字に改め、ルビ等は適宜省略した。
- 注については、各章ごとに番号をつけている。

序章

竹内好（1910—1977）は長野県南佐久郡臼田町に生まれ、67歳で逝去した。生涯において、竹内は日本文学と中国文学に関する学問的業績を多く残した。竹内は中国へ行き身を以て当地を体験し、また日本で日本文学の作家と交流を重ねた。竹内の学問は書物から学んだことのみならず、同時代の日本と中国とで経験した彼自身の生活と深く関わっているのである。

竹内好は1920年、わずか10歳の時に、当時通っていた富士見小学校の野田先生によって文才を認められ、作文集を作った¹。1923年に竹内は富士見小学校を卒業し、東京府立第一中学校に入学し、7月に作文「花の都」を『府立一中学友会雑誌』第88号に発表した²。

作文を書く経験を経て、1924年に14歳の竹内好は山本有三の戯曲「生命の冠」と出会い、文学の道に歩んだ。その点に関して、後の竹内の回想録で次のように述べられている。

もう一つ、この出土品の中に、私の人生コースを後に決定した本があった。それはプラトン社(?)から出ていた文芸雑誌『人間』の一冊である。もっとも、影響を受けたのは中学にはいってから、よみ返したときのことであるが、その雑誌にのっていた山本有三の戯曲「生命の冠」が、私を文学へ開眼させたのである。私は小学校のころは、生来の人間ざらいから自然科学者を志望していた。中学にはいった途端、一つの人生問題にぶつかった。人は何故に善をなさねばならぬか、という問題である。善行にはかならず報いがあるという修身科の教えが虚偽であることは、体験からわかっていて、それでは善の根拠がどこにあるかが私にはナゾであった。私はほとんど自分が行きづまったことを感じた。打開の力が自分になくことがわかっていたので、暗い気持であった。そのドン底のとき「生命の冠」が私に光を与えてくれたのである。まぶしいような光であった。私は厳粛感に打たれ、心で祈った。そのときから文学が私にとって価値あるものになった³。

その後、竹内好は「文科甲類」の学生として大阪高等学校に入学し、在学中に日本文学に関心を寄せながら、小説を書いた。『竹内好全集』第17巻に収録された「感情」や「男たち」などの文章は当時、竹内が執筆し、「小早川素夫」の筆名で『校友会雑誌』（大阪高等学校学芸部刊）に発表したものである⁴。

1931年4月、竹内好は東京帝国大学文学部支那文学科に入学し、中国文学に対する研究

¹ 竹内好「忘れえぬ教師」『竹内好全集』第13巻、筑摩書房、1981年、5—13頁（初出は「精神の飢えを満たしてくれた先生」と題して、国分一太郎、中野重治編『忘れえぬ教師』、明治図書出版、1957年9月）。

² 竹内好「解題」『竹内好全集』第17巻、筑摩書房、1982年、170頁。

³ 竹内好「無名作家たちの恩寵」『竹内好全集』第13巻、筑摩書房、1981年、15頁（初出は『日本読書新聞』、1953年6月1日）。

⁴ 竹内好「解題」『竹内好全集』第17巻、筑摩書房、1982年、170頁。

を始めた。その後、竹内は同期に入学した武田泰淳と知り合った⁵。1934年に、竹内と武田らは共に中国文学研究会を作り、1935年に雑誌『中国文学月報』を発行し、後に『中国文学月報』の名を『中国文学』に変えた。竹内と武田は『中国文学月報』と『中国文学』の経験を経て、次第に盟友の関係になった。

東京大学に在学中、竹内好は日本文学と中国文学に関する本を数多く読んだ。中でも、1931年に竹内好は魯迅の『阿Q正伝』を読み、「ユモレスクなるに感心」という感想を述べている⁶。

1932年に竹内好は、外務省対支文化事業部の半額補助による学生主体の団体旅行で朝鮮各地を経て中国（当時は満州国）の長春と大連まで行った。そして、そのまま帰国せず、竹内は北京に私費で留学した⁷。最初の北京留学に対して、竹内は後の回想録で「私の中国との結びつきは、このときにはじまる」⁸と書いている。

1933年に竹内好は卒業論文「郁達夫研究」を提出した。郁達夫は日本文学の私小説から影響を受けた中国の文学者である。竹内好は日本文学の私小説に倣った郁達夫の姿勢を高く評価し、研究に取り組んだ。その点に関しては、第一章で詳しく述べる。

1937年10月から、1939年10月にかけて竹内好は国費留学生として北京に留学した。この第二回の北京留学は、竹内の思考にとって大きな変化の契機であった。帰国後、竹内は戦後の日本に強い影響力を持つことになる『魯迅』を1943年に完成し、1944年に出版した。その点に関しても、第一章で詳しく検討する。

戦後、竹内好は日本文学と中国文学の双方に関心をもち続けた。彼の多くの戦後の文章は日本文学と中国文学の区別を述べつつも、日本文学と中国文学の両方について同時に言及することが多い。『竹内好著作ノート』を調べると、例えば「中国文学と日本文学」（1947年）、「魯迅と日本文学」（1948年）、「魯迅と二葉亭」（1948年）、「指導者意識について—魯迅と日本文学の中」（1948年）、「中国の近代と日本の近代—魯迅を手がかりとして」（1948年）などの文章があることが分かる⁹。

戦後の竹内好に関する研究の多くが特に注目するのは、魯迅作品の翻訳、中国文学評論集の『魯迅雑記』（1949年）、『現代中国論』（1951年）、日本文学の国民文学論争における竹内の評論を集めた評論集『国民文学論』（1954年）などである。つまり、竹内は中国と日本双方の問題について批評し続け、多くの読者に影響を与えたのである。

文学に従事する竹内好は、生涯を通して常に、日本と中国の間に存在してきた。日本文学と中国文学の間を往来する竹内の軌跡を研究し、竹内の成長過程を発見することが本論文の目的の一つである。

竹内好に関するこれまでの研究については、岡山麻子はその要点を考察している。本論文は岡山の考察を踏まえて、先行研究を紹介する。まず、岡山は竹内好を論じた論文につ

⁵ 竹内好「年譜」（前掲）、289頁。

⁶ 竹内好「年譜」（前掲）、289頁。

⁷ 竹内好「年譜」（前掲）、290頁。この北京滞在については「留学」、「旅行」という表現が混在する。

⁸ 竹内好「孫文観の問題点」『竹内好全集』第5巻、筑摩書房、1981年、25—42頁。

⁹ 立間祥介『竹内好著作ノート』、図書新聞社、1965年、44—52頁。

いて、次のように分析している。

竹内好を論じた論文は、特に一九六〇年代以降、数多く積み重ねられてきた。その中には、竹内の魯迅論の中に「思想を身につける態度」への覚醒を捉えた高橋和巳や、「大東亜戦争」への決意から六〇年安保までの竹内の軌跡を、日本近代への独自の抵抗の持続と捉えた桶谷秀昭の成果も含まれている。しかしその大半が、竹内の魯迅論や中国論等の特定の仕事を限定的に取り上げ、評論的に論じたものである。それ故に、竹内の本質を押さえた上で、その仕事を統一的に把握するには至っていない¹⁰。

さらに、戦前から戦後を通して、竹内好の仕事の全体を捉えようとした本格的な竹内好研究に関して、岡山は四人の著者による書籍を挙げている。それらは、松本健一の『竹内好論 革命と沈黙』（第三文明社、1975年）、菅孝行の『竹内好論 亜細亜への反歌』（三一書房、1976年）、中川幾郎の『竹内好の文学と思想』（オリジン出版センター、1985年）と鶴見俊輔の『竹内好 ある方法の伝記』（リポポート、1995年）である。岡山はこれらの研究書について、次のように述べている。

まず、一九七六年に初めてまとまった竹内論を出した松本健一は、中国文学研究会設立時から六〇年安保後までの竹内を論じることによって、「思想としての竹内好」を抽出し、不断の自己否定を重ねていく竹内の思想過程に注目して、体系的完成を目指す思想と区別している。また、自らのアジア論、天皇制論の展開の一環として竹内研究に取り組んだ菅孝行は、竹内の方法の一貫した基軸として、近代中国民族の自己形成史を指標とした、民族的契機への固執があることを明らかにして、「日本のナショナリティにこだわり切ってゆく」竹内像を描いた。更に、中川幾郎は、「みずからの肉体的存在」に支えられた思想を求める立場から、戦時下の『魯迅』を「『生活者』である魯迅をひろいあげた」書と位置づけ、そこにおいて竹内が生活意識の欠如した状態から、「実生活の領域を発想の基盤とする」生活者として成立したと考えている。そして、九〇年代に入って出された鶴見俊輔の竹内論においては、エッセイや回想として書かれた文章も多く用いながら、竹内の時代の歩み方が叙述されている。そこでは、竹内の思想の特質が、「その時の具体的な状況の中でのものがき」であることが指摘され、状況判断に基づいた予測と、後にその予測を省みたときの錯誤の認識、すなわち「予見と錯誤」に満ちたものとなった竹内の「思想の姿」を支える時代との関わり方が評価されている¹¹。

これらの先行研究を踏まえて、岡山はこれまでの研究ではあまり着目されていなかった竹内好の「北京日記」を考察し、戦前戦後の竹内の作品を分析し、竹内の「根源的な価値と対峙して価値転倒を現出させようとする発想」が重要であると指摘した。その点に関して、岡山は次のように述べている。

¹⁰ 岡山麻子『竹内好の文学精神』、論創社、2002年、5—6頁。

¹¹ 岡山麻子『竹内好の文学精神』（前掲）、6—7頁。

結論を先に言えば、主著『魯迅』から戦後の仕事までを貫く竹内の核心とは、冒頭に述べたような「文学者の自覚」として示された、根源的な価値と対峙して価値転倒を現出させようとする発想と行為である。（中略）しかし、最も根源的な次元において竹内を捉えるためには、そうしたナショナリティや生活への依拠が、いかなる要求に基づいて成り立っていたかが考えられなければならない。ナショナリティへの固執や、生活者としての成立の底に流れている竹内の思想のダイナミズムは、自らを外的に規定する秩序から自由になることを求めて、既存の価値秩序を無化し、新たな価値の創出の場を獲得しようとするところにこそあるのである。本書は、そうした竹内の思想的核心が持つダイナミズムを、彼の文章の論理に徹底して内在する方法によって、掘み出そうとするものである。竹内がその生涯において取り組んだ課題は、魯迅を中心とした中国文学、毛沢東に至る中国論、日本近代論等と、時代を追って変わってゆくが、表層に現れるテーマの変化にも拘らず彼の思想的軌跡に貫かれている一つの核心を明らかにするためには、その核心が露わになる場所まで竹内の論理の中に深く入っていくことが必要なのである¹²。

岡山の後、戦前から戦後を通しての竹内好の仕事の全体を捉えようとした研究書は孫歌の『竹内好という問い』（岩波書店、2005年）、渡辺一民の『武田泰淳と竹内好 近代日本にとっての中国』（みすず書房、2010年）丸川哲史の『竹内好 アジアとの出会い』（河出ブックス、2010年）、及び黒川みどりと山田智編の『竹内好とその時代：歴史学からの対話』（有志舎、2018年）である。

孫歌は戦前の竹内好における魯迅との出会いを研究するとともに、戦後に近代と民族の問題や、戦争と歴史の問題、さらには安保運動や「近代の超克」座談会の問題を提起する竹内の活動を考察した¹³。孫歌は竹内との思想的格闘を通して、竹内にアプローチしようとした。

渡辺は中国と関わる竹内好と武田泰淳の作品を分析することによって、竹内と武田の生涯に亘る交友を分析した。渡辺の研究の重点は中国に置かれている。巻末には「中国が思想の問題として日本に深くかかわったひとつの時代は、こうして武田泰淳と竹内好というふたりの偉大な先駆者の死とともに終わるのである」¹⁴と記されている。

丸川は1945年の前後20年ほどの竹内好の文章を分析し、「魯迅との出会い」、「周作人との出会い」、「武田泰淳との出会い」、「京都学派との出会い」、「毛沢東との出会い」と「岸信介との出会い」という順序で竹内の活動を捉えていった。中でも丸川は、「アジア主義」を重視しながら、思想家としての竹内を描いた。丸川は次のように述べている。

本書は、竹内が彼なりのものとして作り直そうとした「アジア主義」というコンセプトのその先を目指そうとする、私個人の主観としては「恐れ多い」試みである。一

¹² 岡山麻子『竹内好の文学精神』（前掲）、7—8頁。

¹³ 孫歌『竹内好という問い』、岩波書店、2005年。

¹⁴ 渡辺一民『武田泰淳と竹内好 近代日本にとっての中国』、みすず書房、2010年、319頁。

つの発想として、竹内の思想家としての路程において関わりの深かった人物、思想グループとの「出会い」を叙述するという形式を通じて、私なりの「アジア主義」を描いてみようとしている¹⁵。

『竹内好とその時代：歴史学からの対話』は竹内好の思想の生成の問題についての、6人の歴史家による共著である。黒川みどりは戦前と戦後の竹内好の魯迅論を分析し、竹内の魯迅論の変遷を検討した。他の執筆者は竹内と第三次『思想の科学』の問題や、明治維新に対する竹内の分析、朝鮮をめぐる竹内の観点などを考察した¹⁶。

ここに挙げた岡山以外の書籍は、全て竹内好が刊行した書籍や、雑誌等に公表した文章を研究の材料として分析しているということが分かる。岡山以外に、竹内好の生活面の材料を真っ正面から分析したものは見られないようだ。ここでは岡山に倣って書籍のみを取り上げたが、研究論文については各章において詳述する¹⁷。その岡山も、竹内の「北京日記」を分析したが、竹内のほかの日記、例えば「復員日記」や「浦和日記」などは検討していない。

本論文は、先行研究で欠落している竹内好の生活面を伝える材料をより重視し、岡山の研究を踏まえつつ「北京日記」を再考察した上で、さらに「復員日記」や「浦和日記」なども分析する。その際、分析の重点を、日本文学と中国文学の間を往来する竹内の姿に置くこととする。同時に、本論文は竹内好と同時代の日本文学の作家である竹内の友人との交流を重視する。つまり、竹内の生活面の材料に対する考察と、竹内が当時の友人たちとの交流を経て発表した文章に対する考察とを結びつけるのである。

第一章では、「北京日記」を考察し、北京留学中の竹内好を分析する。日本文学における私小説を高く評価する文学観を持って竹内が中国に赴いた状況を考察する。第二章では、日本の作家小田嶽夫の『魯迅伝』と竹内好の『魯迅』を比較する。小田との交流を通して、『魯迅』における竹内好の文学観が形成された経緯を考察する。第三章では、武田泰淳と竹内好の交流を考察する。1940年代の二人の交流、及び彼らの最初の著書『司馬遷』と『魯迅』の関わりに重点を置き、検討をしていく。第四章では、「復員日記」や「浦和日記」などを分析して、浦和時代における竹内好の日本文学の再発見を考察する。最後に終章において、日本文学と中国文学の間を往来する竹内好の軌跡を鮮明にし、竹内好が日本文学に対して抱いた根源的な期待とその意義を考察する¹⁸。

¹⁵ 丸川哲史『竹内好 アジアとの出会い』、河出ブックス、2010年、13頁。

¹⁶ 黒川みどり、山田智編『竹内好とその時代 歴史学からの対話』、有志舎、2018年。

¹⁷ 岡山が触れていない、中国で発行された関連のある研究論文については、筆者の修士論文「竹内好から見た魯迅のイメージ『藤野先生』の訳文を介して」（2015年）で論じた。本論の一部内容は雑誌『学術月刊』に掲載されたが、中国における先行研究の評価については修士論文のみに記載してある。そのため、修士論文の該当部分は本論文の最後に附録として、つけることとする。

¹⁸ 本論文では日記を重要な材料として用いるが、もちろん日記の内容が全て真実であるわけではなかろうし、日記に作者の気持ちの全てが吐露されているわけではなかろう。しかし、本論文では少なくとも虚偽の内容は無いものとして論考をすすめることとする。

第一章：竹内好の文学観の形成 —北京留学を契機として—

はじめに

1937年10月から1939年10月までの二年間、竹内好は日本の外務省文化事業部の第三種補助金を受けて、留学生として北京に滞在していた。北京留学の二年間の体験と、その延長線上にある帰国後の思考の営為は、竹内の文学観における転換点といえる。例えば、丸山真男は次のように述べている。

そうね、戦後派の人たちがこれを読んで拍子抜けというか、好さんの「志」はどうなっちゃったんだ、という感じを抱いたとしても無理はないですね。好さん本人もどこかで、三二年のときの中国旅行は新鮮だったけれども、三七年からの二年間の北京生活はブラブラ無為の日を送った、と自己嫌悪の念で回想しているくらいですから…。しかしそこがさっき言った同時代体験というものなのか、ぼくなんかはこの北京日記を舐めるようにして読みました。もうこれからの竹内好論はこの北京日記をぬきにしては意味がないと言いきってもいい。それくらい重要なものです。当時の北京をめぐる客観的状况と、好さん個人の内面的な心理の屈折が重なり合ってこの日記になっている。(中略)

ここで竹内好はデカダンスとニヒリズムをくぐり、自分のすべてを坩堝にたたきこんで生れ変わるんじゃないですか。北京生活の混沌のなかに身を置いて、ちょうど阿Q的な中国が鉄火の洗礼を受けて変貌してゆくのとパラレルに、竹内好も自己凝視を通じて昨日までの自分と変ってゆく。そこから引返す途はもうない、という極限のところには帰国直前の好さんは立っていたように見えるんです。(中略)

もちろん、好さんの意識のうえでは八・一五の敗戦がやはり個人体験としても大きなエポックになっていることは、「屈辱の事件」(全集、第十三巻所収)の一文だけでも明らかですし、戦後も期待と失望を繰り返している。けれども、もっと奥底の精神的回心ということになると、ぼくの推測は北京時代に遡るんです¹。

丸山は、竹内好の北京留学時に「精神的回心」があったと推測している。「精神的回心」という言い方は、竹内の思想が根本的に変化したこと、あるいは個人的思想が新たに形成した可能性がある。丸山は、竹内の留学前後の詳細を記す資料である「北京日記」について、「もうこれからの竹内好論はこの北京日記をぬきにしては意味がないと言いきってもいい。それくらい重要なものです」²と語っている。しかし、丸山の発言は単なるインタビューに対する答えであるため、留学前後の竹内に対する具体的な分析がない。

¹ 丸山真男「竹内日記を読む」『丸山真男集』第12巻、岩波書店、1996年、28頁、32頁。(初出は「丸山真男氏に聞く聞き手編集部」『ちくま』第138号、1982年9月)。

² 丸山真男「竹内日記を読む」(前掲)、28頁。

これまでの研究では、竹内好の北京留学に触れた例は多いが、竹内の文学思想の核心を全面的に論じたものは少ない³。とりわけ、竹内の北京体験を考察すると同時に、「北京日記」をも取り上げながら、竹内の文学精神を解読しようとした先行研究は、岡山麻子の考察のみだと思われる。岡山は次のように述べている。

丸山による、こうした「北京日記」の重要性の指摘にも関わらず、これまでの竹内好研究において、「北京日記」は本格的な研究の対象とされてこなかった。竹内好に関する先行研究の多くは、彼の中国論や日本近代批判、また安保反対運動といった個別の仕事についての研究であり、それらの多様な仕事を根底において規定する竹内の思想的核心を掴もうとする視点が欠落している⁴。

続けて、岡山は、岡本かの子の小説に傾倒していた時期の竹内好を考察しつつ、竹内と北京で出会った女性である峯子の恋愛体験を分析し、さらに、かの子文学と恋愛体験によって文学者竹内好が精神の画期を実現できた可能性がある⁵と結論づけている。

しかし、文学と社会、または文学と政治について深く考え続けていた竹内好がこの時期、北京での経験を踏まえ、どのように態度を変化させていったのかという問題が残されている。竹内は1934年に東京帝国大学文学部を卒業した。そして、竹内は北京留学中に「文学があきらめられるものかどうか⁶」と書き、一度は文学を断念しようと苦悩する。結局、北京留学が終わって間もなく、竹内は文学の場に戻った。このような竹内好の変化を解読するために、文学と政治の構図の中での彼の文学観を分析することは必要不可欠だと思われる。本論文では、「北京日記」と留学前後の文章を検討することで、竹内好の特異な体験と留学前後の彼の文学に対する認識を明らかにしたい。

第一節：留学前の文学観

留学前の竹内好の文学観は、日本文学の私小説に由来する。その点は彼の卒業論文「郁達夫研究」（1934年）と留学の直前に改稿された「郁達夫覚書」（1937年1月）の中から読み取ることができる。竹内好は次のように述べている。

³ たとえば、松本健一『竹内好論 革命と沈黙』、第三文明社、1975年。鶴見俊輔『竹内好 ある方法の伝記』、リプロポート、1995年。木山英雄『周作人「対日協力」の顛末』、岩波書店、2004年。孫歌『竹内好という問い』、岩波書店、2005年。丸川哲史『竹内好 アジアとの出会い』、河出書房新社、2010年。黒川みどり・山田智編集『竹内好とその時代 歴史学からの対話』、有志舎、2018年などである。これらは、歴史学からの考察が多い。王俊文「一九三八年の北京に於ける竹内好と「鬼」の発見—ある「惨」として歡を尽くさず」の集まりを中心として、『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第10号、2007年11月は竹内好の文学思想を論じたが、重要な「北京日記」を分析していない。

⁴ 岡山麻子「竹内好の「北京日記」—文学の解体と再生」『社会文化史学』第44号、2003年1月、2頁。

⁵ 岡山麻子「竹内好の「北京日記」—文学の解体と再生」（前掲）、14頁。

⁶ 竹内好「北京日記」1938年11月15日の項『竹内好全集』第15巻、筑摩書房、1981年、249頁。

元来彼の文学観は如何なるものであるかといえ、文学は自我の実現であるということ、従って個性の尊重と、文学は経験以外に出ることは出来ないということ、・・・
(中略)

只ここで注目すべきは、右に述べた三個の作品や「春風沈酔的晚上」等の、小説家としての彼の出発点をなす作品がすべて一人称を以て、即ち自己を通じて対象を現実的に描き出そうとしている点である。之は彼の文学観との関連に於て、客観描写への彼の発展の経路を辿る上に重要な事実である。

文学理論の上では混乱を示しながらも、作品に於ては彼は以上の如く新しい堅実な作風を開拓したのである。かくの如く時代的な苦悶は彼をして理論と創作とに二元的な分裂を与えたのであるが、それだけではなく、彼は自己の生活上にも去就に迷っていた。(中略)

彼はこの二元性克服のために何れか一方の路を選ばなければならなかった。革命文学に趨くか、時代に逆抗しても自己の道を守るかであった。而して彼は後者を選んだのである⁷。

彼の作品はすべて自己の生活、感情の告白を出でない。新文学中ただ一人の正しい私小説(むしろ日本的な)作家である。彼を動かしたのは、文学は自我の実現であるという信念、また、文学は経験を超越得ぬという信念である。ルソオ及びスチルネルに流をくむ一種の天才思想をもつ⁸。

初期の郁達夫の時代に遡ると、中国の社会は革命の時代であった。特に1924年から1927年まで、中国国民党と中国共産党によって引き起こされた「国民革命」、及び1927年の「南昌蜂起」の後、中国共産党が惹起した革命である。文学はそうした政治情勢に従いながら革命文学となり、社会に強く影響された文学としてあった⁹。ところが、竹内好の考えでは、郁達夫は革命文学の方へ進むかどうかを迷いながらも、時代の潮流に逆らい、旧政治の悪弊を批判せず、「自己の道を守り」、「自我の実現」を重んじ、革命文学と一線を画することを選んだ。竹内の目から見た郁達夫は社会から離れた作家の個人的経験を描写してい

⁷ 竹内好「郁達夫研究」『竹内好全集』第17巻、筑摩書房、1982年、153—154頁、156—157頁、157頁。竹内好の卒業論文を提出した日は1933年12月28日である。

⁸ 竹内好「郁達夫覚書」『竹内好全集』第14巻、筑摩書房、1981年、59頁。(初出は『中国文学月報』第22号、1937年1月)。

⁹ 1920年代の中国の革命と革命文学の発生は1921年に遡ることができる。1921年4月7日に「中華民国政府組織大綱」が定められた。10日に孫文は選挙を通して非常大統領になった。同年5月5日に孫文は中華民国非常大統領に就任した。同年7月23日に中国共産党が成立した。革命の状況に応じて、1921年に中国で革命文学が盛り上がった。たとえば、鄭振鐸「文学於革命」、費覺天「從文学革命於社会革命上所見的革命的文学」、翟世英「文学於革命的討論」、周長憲「感情的生活於革命的文学」などである。その後、1928年を境にして、前期の革命文学と後期の革命文学に分けられている(王燁「文学研究会於初期革命文学的倡導」『厦門大学学报』2006年第3期、2006年5月、122—128頁)。

た。竹内が以上のように自分の郁達夫像を構想したという事実に基づいて、高橋和巳はさらに次のように説明している。

魯迅論以前の竹内好の文学観は、むしろはなはだ古風なものだった。彼の卒業論文である「郁達夫研究」は、いま見るを得ないが（それを改稿したものと思われる「郁達夫覚書」が『中国文学月報』第二十二号に掲載されていて）、この破滅型作家への接近の理由が、「文学は経験を超え得ない」と確信する郁達夫の文学の私小説性と、一種悲しげなそのローマン的文体にあったのだろうことは容易に推察できる。（中略）文学理解とは、なによりもまず人間との対面であるとする態度と相関的に、より直接的に人間と対面しうる文学形式として私小説を評価する〈古風〉さをともなったことが解るのである¹⁰。

作家として出発した時期の郁達夫の文学は日本文学の私小説からの影響を強く受けていると言われており¹¹、竹内好もその特徴を捉えている。竹内がなぜ私小説の特徴を高く評価する文学観を持っていたのかということについては、未だ定説がない。ただし、竹内と同時代の宇野浩二や小林秀雄の見解などを踏まえ、1935年前後から第二次大戦中までの私小説をめぐる議論に対する谷沢永一の研究をも参照すれば、竹内が1937年の段階で私小説から影響を受けていたのは不思議なことではないと考えられる。

具体的には、宇野は「将来は知らず、少くとも明治末期から今日までの日本の小説（これを純文学といふか？）は『私小説』が主流をなしてゐるやうに思はれる」¹²と述べており、これを受けて、小林は「『私小説』がわが近代文学の主流であったといふ意見は間違つてはゐないと思ふが、今日重要な問題は、『よく考へてみると不思議な現象である』といふ處だけにある」¹³と指摘している。

さらに、谷沢は、私小説が文壇の中で看過できない問題となった時期について、次のように述べている。

これらの真摯な調査の過程で明らかになった如く、その発生は大正末年である私小説という呼称が、しかし、それを使って直接日本近代文学の中核的な問題を俎上へのぼせるためのキメ手として意識されるようになったのは、昭和十年、小林秀雄が「私小説論」を書いた前後の時期以来のことである¹⁴。

¹⁰ 高橋和巳「自立の精神—竹内好における魯迅精神」『逸脱の論理』、河出文庫、1996年、81—82頁。（初出は「竹内好—その魯迅精神」『思想の科学』第4巻第29号第30号、1961年5月6月）。

¹¹ たとえば、鄭梅園、黄成湘「自我毀滅的表露—郁達夫的『沈淪』和日本私小説」『科教導刊』2014年第27号、2014年9月、56—57頁。李紅艷、宋会芳「郁達夫自叙伝小説風格形成原因探究」『梧州学院学報』2015年5期、2015年10月、89—93頁などである。

¹² 宇野浩二「「私小説」私見」『文芸首都』第1巻第9号、1933年9月、12頁。

¹³ 小林秀雄「私小説について」『新訂小林秀雄全集』第3巻、新潮社、1978年、48頁。（初出は『文学界』創刊号、1933年9月）。

¹⁴ 谷沢永一「私小説論の系譜」『近代日本文学史の構想』晶文社、1964年、175—176頁。

竹内好が北京留学へ行った 1930 年代には、私小説が近代文学の主流であった。そして、谷沢の言い方によれば、当時、私小説は直接日本近代文学の中核的な問題を解決する決め手とされていた。竹内はその影響を受け、私小説の特徴を高く評価したのではないだろうか。

私小説は日本の自然主義文学の発展を促した。1900 年代、日本の自然主義文学が現れ、何の雑作もない無技巧写実を提唱し、自分の経験を偽ることなく描くことを主張する。その延長線上で、1907 年に発表された田山花袋の「蒲団」、あるいは 1913 年の近松秋江の「疑惑」と白樺派を代表した「文壇交友録小説」は日本自然主義文学における私小説の嚆矢とされている¹⁵。

竹内好はまず日本の私小説における作家の個人的経験という特徴に基づいて、自分の郁達夫像を作り上げた。私小説の作品はしばしば一人称で描かれ、時には三人称でも書かれるが、作者が直接に経験したことがらを素材として書かれた小説である。主人公が作者その人らしく書かれているので、私小説は作家が自分を主人公として「造形」した作品であると常に理解されてきた。日比嘉高によれば、「造形」は私小説における主人公と作者が同一視されることを意味するわけではないが、作者が自分自身の「心的閱歴」や「自分の感じ」などを「告白性・直接性・暴露性」の手法で描くことを通して、「主人公と作者その人との間には殆んど距離がない」ということを指す。したがって、「事件ではなく心理を描いた事への注目」とされている。即ち作者という人間の心理や感情は作品の主人公の心理や感情を通して作品の中に直接に表現されている。その特徴は私小説のみならず、明治 40 年の後半期から終戦までの日本文学の全体に大きく影響した。それゆえに、私小説も含む、作品に作家自分を投影している、即ち自分の心理を直接に表現する作品の広範囲のグループは、先行研究で「自己表象」の文学と呼ばれている¹⁶。

次に竹内好は日本の私小説において、文学と社会が乖離する特徴を踏まえ、自分の郁達夫像を立てた。私小説に由来するその特徴は日本の「文壇」という社会的に孤立した特殊な集団から語らなければならない。その点に関して、伊藤整は次のように述べている。

秋声のような作品が成立したのは、日本の現実社会と融合し交渉し共感することを拒む思考者の狭い一群の中であつた。文壇の中においてであつた。(中略)その推定がすぐに出来、秋声の過去について、恋愛について、生活の様式について、性質についての予備知識を、同じように社会から背いた一群の特殊人と、その中に加わることを志願する次の代の一群の若者たちは、十分に持っていた。(中略)

彼等はその破倫な、無謀な生活を記録して発表した、それは社会全体には届かなかった。彼等は政治を批評せず、社会を訂正しようとせず、自分等の方にひげ目を感じて生きていた¹⁷。

¹⁵ 小林秀雄「私小説論」『新訂小林秀雄全集』第 3 巻、新潮社、1978 年、123—125 頁。(初出は『経済往来』第 10 巻第 518 号、1935 年 5—8 月)。平野謙「私小説の二律背反」『平野謙全集』第 2 巻、新潮社、1975 年、145—146 頁。

¹⁶ 日比嘉高『「自己表象」の文学史』序章と第二章、翰林書房、2002 年、9 頁から 107 頁までの内容を筆者がまとめたものである。

¹⁷ 伊藤整『小説の方法』河出書房、1948 年、57 頁、60 頁。

また、小林秀雄も次のように指摘している。

花袋がモオパッサンを発見した時、彼は全く文学の外から、自分の文学活動を否定する様に或は激励する様に強く働きかけて来る時代の思想の力を眺める事が出来なかった。文学自体に外から生き物の様に働きかける社会化され組織化された思想の力といふ様なものは当時の作家等が夢にも考へなかつたものである。(中略)

私小説が所謂心境小説に通ずる所以も其處にある。実生活に関する告白や経験談は、次第に精鍊され「私」の純化に向ふ。私小説論とは当時の文人の純粹小説論だと言つた意味もそこに由来する¹⁸。

当時の私小説の作家たちは社会と無縁であつたようだ。彼らは現実社会から独立した文壇という仕組みの中で存在しており、文壇という場でのみ一種の天才的な才能を発揮することができた。彼らの文壇の世界と現実の世界という二つの世界が調和できない場合、私小説の作家は現実の世界に対して絶望的になり、文壇の世界の中のみで文学における純粹な芸術性を求め、自分の作家としてのアイデンティティや価値を探す私小説の作家になつた。彼らは社会の付属品ではないため、社会全体を統合するとともに社会の意思決定を行う政治的統治とも無関係である。以上のような、小林が「文人の純粹小説」と称した日本の私小説における、政治的統治を批判せず、革命文学と乖離する一部の特徴は竹内好の郁達夫像と繋がっている。竹内は日本の私小説の特徴を当てはめて、郁達夫像を考えたことに引き続き、「茅盾論」と「魯迅論」を書き、文学の理解を次のように展開した。

茅盾は、この世界の機構と、そこに躍る人間のカラクリに多くの興味を有つようである。彼の描く人間は、彼によって同情されたり、愛憎の孰れをも抱かれたことがない。(中略)従つて主知的であり、構成的であり、既に解きほごされた結末を作品中に編成し直すだけである。(中略)作中人物は、作者の恣意によるほかは、断じて人間らしい行動の自由を許されず、ひたすら作者の論理の旁証をつとめる機械的、奴隸的役割に甘んじて、作者を離れては一人立ちさえ覺つかない。(中略)

小説が人間を描くものであるならば、彼はすべての作品中に徒に失敗を積重ねた¹⁹。

政治と芸術との相剋は、現代中国文学の基本的性格である。轉換期の文学は、その本来の進歩性の故に、自ら殻をつき破る冒険を敢てしなければならない。歴史上では、魏晉や明末がそうであつた。一九二五年から三〇年にかけて、所謂大革命の時代に、魯迅自身が、彼の描いた阿Qの役割を再演しなければならなかつたのは、傍人の如何ともなし難い芸術家の皮肉な運命であろう。しかも、この轉身を、彼は極めてあざやかにやつてのけた。一九三〇年、自由大同盟を経て成立した左連の椅子には、魯迅そ

¹⁸ 小林秀雄「私小説論」(前掲)、125頁。

¹⁹ 竹内好「茅盾論」『竹内好全集』第14巻、筑摩書房、1981年、34—36頁。(初出は『中国文学月報』第14号、1936年6月)。

の人が坐っていたのである。彼は、その準備のために、創造者と悪態をつき合う暇に、多くのマルクス主義文学理論を翻訳している。だから、この転身は、彼の人並ならぬ聡明さを物語るものであるが、同時に、そこに現代中国文学の脆弱性を窺うように思えてならない²⁰。

竹内好が考えた、「世界の機構」や「カラクリ」といった用語は社会の構造を表すものであり、社会全体を統合する政治的統治に引きずられていることを批判するものである。それに対立する文学は、社会環境を描くために登場人物を操るものではなく、社会と政治から遊離する「文壇」の作家個人の「愛憎」を描くものはずである。政治と文学の芸術性の「相剋」が重要であると彼は認識していたのである。また、竹内は、文学者魯迅が政治的組織である左連に参加したことが「政治と文学の相剋」に反していると考えた。竹内はそれを「弱点」と見なした。文学が政治のスローガンではなく、人間の代弁者であるべきだと考えていたのであろう。松枝茂夫は竹内の当時の感情を「少なくとも彼が卒業論文に書いた郁達夫に対するような愛着を、彼はまだ魯迅に対しては持っていなかったろうと思われる」とまとめている²¹。

第二節：絶望

竹内好は1937年10月、北京に到着した。そして、1937年7月7日、北京では、「蘆溝橋事件」が起こった。それは日中間の全面戦争の引き金であった。「蘆溝橋事件」の結果、中国側が敗北し、北京が陥落した。8月には察哈爾で、9月には河北南部で、10月には山西で、12月には山東でも戦闘があった。そのような戦争状況の下で中国の知識人は大量に北京を離れ、日本人は北京に入った。当時の日本人に知られていた中国の著名な学者で、北京に残っていたのは周作人、徐祖正、傅仲滔と銭稻孫などわずかである²²。そこで竹内は次のような期待を抱いていた。

僕が私かに期待したものは、混乱の中に生れ出る荒々しい生气であった。思想と思想の相撃つ火花であった。戦争の伴う急激な文化の相剋、交流——一瞬にして成るであろう破壊から建設へのすさまじい奔流の胸打たれる光景であった。（中略）

僕は今度の旅行で身にしみて感じたのは、文化の政治と分ち難い一事である。僕は来る途々、たとえていえば路傍の一木一草にも政治を感じた。日本のような機構の複雑化した、それだけ擬制の多いところから、事実上の軍政の地へ来てみると、この印象はまことに歴々としている。軍事と政治と文化とは、あたかも一本の触手の如く動いているのだ。何故もっと基礎的な勉強をしておかなかつたと悔まれる。複雑な現

²⁰ 竹内好「魯迅論」『竹内好全集』第14巻、筑摩書房、1981年、42—43頁。（初出は『中国文学月報』第20号、1936年11月）。

²¹ 松枝茂夫「竹内好と魯迅」『松枝茂夫文集』第2巻、研文出版、1999年、190頁。（初出は竹内好訳『魯迅文集第四巻月報』筑摩書房、1977年12月）。

²² 竹内好「北京通信（一）」『竹内好全集』第14巻、筑摩書房、1981年、110頁。（初出は『中国文学月報』第33号、1937年12月）。

象を処理するのは一の人間的な能力であろう²³。

ここで竹内好が「政治」と呼んでいるものは、日本軍による統治とその統治下にある社会を指していると思われるが、戦争が始まった後、竹内が期待していたのは、「思想と思想の相撃つ火花」によって文化と政治が分離することであろう。つまり、北京に流入した日本人たちが中国の知識人と交流し、衝突し、そして衝突によって日本占領下の日本化された社会、及び続いて発生するかもしれない日本化された政治から遊離する「文壇」の作家の個人的な視線が現れるということではないだろうか。日中衝突による知識人の絶望に由来する作家の視線の出現が文学作品の中に反映されていけば、北京の文学（文化）が日本占領という政治と軍事の現場から離れていくことが可能になるかも知れないと竹内は考えていたと思われる。そのような期待を抱えた竹内の交際の多くは、日本人との付き合いから中国人との付き合いに変わっていった。その点に関して、鶴見俊輔は次のように述べている。

留学したといっても、当時の中国の大学は閉鎖されていた。日本軍による中国人の無差別虐殺のはなしがそれも当事者によってほこらかにつたえられる。こういう状況の下で、日本人とのつきあいは竹内好にとって重苦しい²⁴。

竹内好は、希望を周作人など中国の知識人に見出そうとした。周作人は竹内好の知人であり、当時、北京の文学の代表者であった。その上、竹内の知る周作人の考えには竹内の期待に近いものが存在していたと考えられる。1935年の周作人の立場に関して、松枝茂夫は「先生は始めから孔融であると共に亦た始めから陶淵明であった。叛徒（孔融）と隠士（陶淵明）とは共に先生の中に同居する二要素であった」²⁵と分析しているからである。松枝は周作人が1927年に書いた作品『澤瀉集』を通して、周作人の考えには「隠士」の立場が存在していると指摘している。「隠士」は中国の古代に由来するものである。「隠」は現実の社会と政治など俗世間を離れ、世外の桃源に逃げるという行為であろう。「士」は中国の古代のエリート階層である。「隠士」の代表者は陶淵明である。陶淵明は役人生活の束縛を嫌って、「帰去來辞」を賦し、官職を捨て、隠居した。隠居中に陶淵明は名文「桃花源記」を書き、現実の生活と社会には存在しない桃源という理想郷を描いた。

1937年12月14日、日本占領下の北京で傀儡政権の中華民国臨時政府が成立した。これは漢奸によって構成された政権であると認識されている。その政治、経済、軍事、思想、文化を考察すると、漢奸たちが日本占領の道義を提唱していることがわかる²⁶。その後、北京では、漢奸による日本化の傾向がますます顕著になっていく。1938年2月9日に日本軍の支援を受け、大阪毎日新聞社によって北京で開催された「更生中国文化建設座談会」

²³ 竹内好「北京通信（一）」（前掲）、110頁、111頁。

²⁴ 鶴見俊輔『竹内好 ある方法の伝記』岩波書店、2010年、62頁。

²⁵ 松枝茂夫「周作人先生の立場」『松枝茂夫文集』第2巻、研文出版、1999年、6頁。（初出は『支那語学報』創刊号、1935年11月）。

²⁶ 王琳「対抗日戦争時期華北偽政権的考察」『延安大学学报』1997年第1期、総第19巻第70期、1997年2月、58—63頁。

はその代表的な例である。周作人や銭稻孫もその座談会に参加し、発言した。結局、北京では、日本占領という政治情勢から独立する文学が出てこなかった。日本人と中国人の「思想と思想の相撃つ火花」などは生まれなかったのである。相撃つこととは反対に、現れたのは日中親善や日中提携など、日本と中国、文学と政治の疑似「友好的」な状況であった。北京以外の都市で、茅盾・郁達夫・老舎・胡風・丁玲など18人の中国文学者は「給周作人的一封公開信」を發表し、周作人の行為を食い止めようとしたが、周作人は受け入れなかった。そして、抗戦陣營の重慶の知識人茅盾や老舎や郁達夫などは「中華全国文芸界抗敵協会」を作り、「更生中国文化建设座談会」に反対した²⁷。

この当時、外務省文化事業部から補助金を受けて北京に留学していた竹内好は学資のため、北京における日本大使館の官僚と接触しなければならなかった。また、竹内は内務省赤羽事務官の顧問となり、内務省の官僚とも付き合ったが、「北京日記」によると、竹内は大使館の勝又に対しても、内務省の赤羽に対しても、「印象悪し」、「愚劣なる官吏」や「好感もてず」など悪い印象を抱くのみであった²⁸。それでも、竹内は我慢して年賀などに出向き、彼らと付き合い続けていたが、結局、「終日入室」と自室に引きこもり、あるいは「不愉快」な気分になった。竹内は自分の不愉快を日本の官僚に手紙で話したが、理解されなかった²⁹。

このように、日本占領下の北京における日本の官僚に不満であった竹内好と、日本の占領に積極的に協力する周作人など対日協力者とはそれぞれ異なった態度を取っていたが、日本人の竹内は対日協力者が中国人として、平然と日本の占領を受け入れているということが理解できなかつたのである。1938年8月に入ると、胡適は周作人に手紙を送り、日本占領区以外の場所に移住するよう勧めた。周作人は手紙を書き、胡適のアドバイスを拒否し、相変わらず日本軍占領下の北京の対日協力者の陣營に残っていた³⁰。対日協力者たちのそのような姿を見て、期待が裏切られた竹内はますます絶望的な心境に陥って、9月に、松枝茂夫に向けて次のように書いた。

『周作人随筆集』ありがとう。その感想を書きます。ほかに書くことはない。三日考えてない。これと雖も書くことがあって書くのでない。悪劣な心境にあるのはあなたばかりでないが、悪劣な心境にあってこういう仕事をしていくのは羨ましい。北京に住みついて、近頃は道を歩きながらああいま自分は何も考えていないのだなと気づく瞬間がある。（中略）

つぎに言い訳ばかりになるが新注文の周作人訪問記もまだ書ける状態にない。つまり訪問してないからだ。この注文はほかにも受けてきたがさて弱る。書くことがないと同様訪問しても先生に質問することはまず何もない。諸君にしてもが僕に質問を与えぬではないか。悪劣なる心境をもって何をか言わん。何をかなさん³¹。

²⁷ 麦冬「周作人附逆與『文協』反奸」『文芸報』2016年2月29日。

²⁸ 竹内好「北京日記」（前掲）、1937年12月30日の項、192頁。

²⁹ 竹内好「北京日記」（前掲）、1938年2月1日の項、196頁。

³⁰ 張菊香、張鉄榮編著『周作人年譜（1885—1967）』天津人民出版社、2000年、543—564頁。

³¹ 竹内好「北京通信（三）」『竹内好全集』第14巻、筑摩書房、1981年、119頁、120頁。

竹内好は苦悶から脱出することが不可能になり、絶望を抱いた。「悪劣なる心境」と、彼が周作人を訪問できないことは関連している。日本側に積極的に協力する当時の周作人（日本化）に対する竹内の不満も窺えるであろう³²。

日本占領という政治情勢を受け入れる北京の対日協力者たちに直面した竹内好は10月に入り、『国語音韻論』、『英文法』、『新講国語学概論』、『国音常用字彙』³³など日本語と英語の本を集中して勉強し、それによって、文学を捨てて、語学に従事しようとした。11月15日の日記で「さて語学の本を作るとして、文学があきらめられるものかどうか」³⁴と書いている。

また、彼は、中国を愛する気持ちを失い、関心を持ってきた中国に関係するすべてのものと絶縁しようとしたのである。後に、留学を終えたばかりの竹内は次のように、この点について説明している。

ある時期の僕は真実、支那文学の縁を切ろうと思った。この時期は次に日記で示す時期である。支那、支那料理、支那人、支那文学、何もかも厭になったと放言したら、そのとき人は笑っていた。それほど思いつめたというのではなく、漠然と愛しきれぬ気がしたのだ。もっと一般的に、精神の仕事に自信が持てなくなったと云った方が当るかもしれない。これは近頃の気持である。愛さぬものを愛する如く取りつくろうのが厭だ³⁵。

とは言え、竹内好は語学の道には歩まなかった。だが、当時の彼は中国の日本人留学生としての自己を失っていた。竹内は日記で次のように述べている。

日記を廃すること十日である。泣きたくなる。毎晩酒をのんだ。四回女を買った。

（初出は『中国文学月報』第42号、1938年9月）。

³² この時期、竹内好は周作人に不満を抱き、訪問できなかった。しかし、当時の『中国文学月報』の計画に従い、周作人の文学に関する批評を書かなければならなかった。ゆえに、竹内好は敢えて、周作人の以前の作品（1934年の「論語小記」）における「鬼」について言及した。この「鬼」によって、竹内好が救われたという見方は、王俊文の前述の論文「一九三八年の北京に於ける竹内好と「鬼」の発見—ある「惨として歡を尽くさずの集まりを中心として」における考えである。一方、岡山麻子は、前述の『竹内好の文学精神』の本の中で、竹内の思想が変わった時期を後の恋愛体験の時期に設定し、王の見方と異なる見解を提示している。筆者は岡山の指摘を支持する。その理由として、1、王は「鬼」以降の竹内好が苦悶して文学をあきらめようとしたこと、そして、恋愛に向き合った事実について全く言及していない。2、王は、竹内好が周作人を訪問せず、『中国文学月報』のため、周作人の当時の作品ではなく、敢えて以前の作品の中に「鬼」を発見したという経緯に触れていない。3、「鬼」（非人間）も竹内好の期待した「人間」とは異質なものである。

³³ 竹内好「北京日記」（前掲）、1938年10月19日の項、1938年10月20日の項、1938年10月24日の項、236頁、236—237頁、237頁。

³⁴ 竹内好「北京日記」（前掲）、1938年11月15日の項、249頁。

³⁵ 竹内好「二年間—黙することの難ければ」『竹内好全集』第14巻、筑摩書房、1981年、126頁。（初出は『中国文学月報』第57号、1939年12月）。

松枝の依頼をまだ果してない。原稿も書いてない。旅行願も出してない。尤君に五十円借りた。それも殆ど使い果した。眼鏡をなくした。読んだのは『オール読物』の新年号だけである。学校もさぼった。(中略) ずい分のみ、眼鏡をなくした。三時だと云う。この日また後拐棒へ行った。以前の女であった。泊った。翌日学校があるのに行かれなかった。今日眼鏡を尋ねて歩いたが何処にもないらしい。一切のものが光と色とを失った。『オール読物』新年号で、すべてくだらぬ中に二、三見るべきものがあった。大下宇陀児と云う男えらくなつたものなり。岡成志も同じ。世の中でくだらぬは俺だけかもしれぬとも思われた。(中略) いまや我、我を失えり矣。(中略) すべて混沌としていた。この調子はまだつづくかもしれぬ。どうなることだかわからぬ。誰も何とも云ってくれず³⁶。

「世の中でくだらぬは俺だけかもしれぬ」の言葉から、竹内好の自己嫌悪が窺える。竹内は日本のエリート青年として、中国に留学していたが、今は、彼は何も勉強できず、作品を書くこともできず、何のために生活しているのかが分からなくなり、生活が乱れ、「混沌」とした毎日を送っていた。竹内は留学生の身分であったが、「学校もさぼって」、墮落していた。竹内は次第に生活費も尽きて、借金を重ねた。最後にたどり着いた「混沌」の心情の意味は、竹内の言葉によると、「いまや我、我を失えり矣」ということである。つまり、元来のエリート知識人であった竹内は、学校を離れ、墮落し、そして、劣等感を抱いた自分が本来の自分であることを認められなかったのである。今の自我を自我として信じてことができなかつた竹内自身は、大きな挫折感を味わって落ち込んだ。

第三節：恋愛の体験

自己を嫌悪し、学校から遠ざかつた竹内好を絶望から引き戻したのは、「北京日記」の中で峯子と呼ばれる女性である。竹内がなぜ恋愛感情を抱くことになったのかについては、岡山麻子の検討によれば、岡本かの子の小説への竹内の傾倒に由来するということである。竹内は、かの子の短編小説『老妓抄』、『鶴は病みき』、『河明り』、『雛妓』などを読み、「荒々しい息づかい」³⁷を感じて生命の力をもやしたというように感じた。かの子文学の課題を実生活の中に見いだすきっかけとなつたのが峯子との恋愛だと岡山は述べている³⁸。そして、本論文は新たな分析を試みながら、岡山が触れなかつた、竹内自身の覚醒を「北京日記」から読み取りたい。

まず、本論文はかの子文学への竹内好の傾倒に対する岡山の研究を踏まえて、竹内が当時読んだかの子の小説に対して再考察し、岡山が述べていない、私小説を高く評価する以前の竹内の文学観がこの時期に変化し始める気配が見られるということを示論じたい。考察の重点は岡山が触れていないかの子という作家の生涯、及び岡山が具体的に展開していない『家霊』、『老妓抄』などに置きたい。

³⁶ 竹内好「北京日記」(前掲)、1938年12月16日の項、267—269頁。

³⁷ 竹内好「北京日記」(前掲)、1939年7月26日の項、303頁。

³⁸ 岡山麻子『竹内好の文学精神』、論創社、2002年、45頁。

岡山が指摘した通り、1939年7月8日付の戦線の武田泰淳宛の竹内好の書簡を通して、かの子文学が当時の竹内にとってどのように重要な存在なのかという問題が分かる。書簡において、次のように述べられている。

しかし、いま僕の心ひかれるのは岡本かの子である。昨冬以来、かの子の作品を漁り、読み増す毎に思ひ切である。こんなに切なく小説をよんでゐるのは大学卒業以来である。こんな読者もあるから小説が売れるのかもしれない。かの子論はその中にきつと書いて君に見せる³⁹。

かの子の小説に感動して「かの子論」を書きたいというのは竹内好当時の考えであった。かの子は数多く小説を書いた。短編小説のほか、彼女の中編小説や長編小説の『生々流転』なども有名である。しかし、前述の岡山の考察によって、二年間の北京留学という時間に限られた竹内は主にかの子の短編小説『老妓抄』、『鶴は病みき』、『河明り』、『雛妓』と『家霊』などに感動したということが分かる。その一連の小説における中心は「いのち」であると岡山は述べている。「いのち」という言葉は「生活を棄てるほどに専念した仕事や芸術の成果に刻み込まれた人間の生の存在そのものの表現」を指している⁴⁰。

続けて、かの子文学におけるいくつかの短編小説に感動した竹内好は、その後、自分が読んだかの子文学に対する理解を後の恋愛体験と関連させた。その点に関しては、これまでの研究で十分に説明されていない。実際、「北京日記」で竹内は次のように述べている。

この女（引用者註：峯子）に対する今の気持は格別深いものと思われず、このままあわねば、いつか忘れ果てるような気がし、しかし、この女から受ける印象が浅いながら何か全体的なもののようにも思う。全体的とは全人格的のことである。或は全生活的のものである。肉体の一部で情熱を燃すのでなく、全身でぶつかるか引き下るか云う種類である。その点では芳子も同じような女であった。昨夜帰り、別れてから二度目の芳子の手紙を見る。くり返して詫び、ゆるしてくれと云い、自分が悪かったと云い、ためらいがちに母を怨ずる手紙であった。美しき女の純情かなと、思えば我が身の不実を悔いる気持も湧く。己の心に住む悪魔。己は何故人間の至情を捨て、悪魔の声をきかねばならぬか。その悪魔が真に美しいものをもっているかどうか、実は疑わしくないか。あわれ厳しき苦悩と美のために殉ぜんと詠える岡本かの子よ、果して君も悪魔の声をきかんがために己の肉体を滅ぼしたるか⁴¹。

当然、竹内好の恋愛体験は極めて複雑なものであり、竹内の考えも恋愛中に頻繁に変化していた。したがって、竹内の恋愛体験の全ての収穫がかの子文学の短編小説における精神に由来するとは言えないであろう。ただし、以上の恋愛中のある特別な日の言葉を引用し、竹内がなぜ恋愛感情を抱いたのかという理由は「厳しき苦悩と美のために殉」ずると

³⁹ 竹内好「武田泰淳宛書簡」1939年7月8日の項「竹内好の手紙」（上）『辺境』第3次第5号、1987年10月、14—15頁。

⁴⁰ 岡山麻子『竹内好の文学精神』（前掲）、44頁。

⁴¹ 竹内好「北京日記」（前掲）、1939年8月14日の項、314—315頁。

いかの子の短編小説から読み取られた竹内の感想とある程度で関連するのではないかと
思われる。

岡本かの子は大貫家の長女として、1889年に東京市赤坂区青山南町の大和屋別邸に生まれた。大貫家は幕府御用商の大和屋であり、神奈川県の大地主でもあった。幼いかの子は短歌と詩が好きで、跡見女学校に在学していた16歳から自分の短歌と詩を『文章世界』や『女子文壇』や『読売新聞』などに投稿しはじめた。17歳のときに、彼女の短歌は文学雑誌『明星』にも発表された。21歳の時、かの子は漫画家岡本一平と結婚した。その後、かの子は女性の社会的解放と女流文学の育成を目的とした「青鞥社」に参加した。しかし、一平の放蕩や芸術家同士の個性の衝突や兄晶川の逝去などによって、かの子は衝撃を受けた。そのとき、かの子の家計も苦しくなった。かの子は文通をしたことがあった早稲田大学英文科の学生堀切茂雄と恋愛した。堀切はかの子を崇拜し、かの子の夫一平の了解を得て、かの子夫婦と同居した。1916年に堀切は肺結核のため死去した。その後、かの子はキリスト教に帰依しようとするが、救われなかったため、最後に仏教研究に打ち込んだ。かの子が小説に専心したのは1936年6月から、1939年2月までの僅か三年である。1936年6月に、かの子の小説『鶴は病みき』は『文学界』に発表され、彼女の文壇へのデビュー作となった。その後、かの子は小説『母子叙情』や『老妓抄』や『河明り』や『生々流転』などを書いた。1939年2月に僅か50歳のかの子は東京において病気で亡くなった⁴²。

『家霊』は1939年1月に雑誌『新潮』に載せた作品である。『家霊』における主な人物はどじょう屋「いのち」の女主人くめ子と徳永という彫金老職人である。どじょう屋の名前「いのち」は強い生命力を持っているのを指しているのであろう。『家霊』において、次のように述べられている。

どじょう、鯰、鰻、河豚、夏はさらし鯨——この種の食品は身体の精分になるということから、昔この店の創始者が素晴らしい思い付きのつもりで店名を「いのち」とつけた⁴³。

どじょう屋の女主人くめ子はそのような料理屋を経営しつつ、どじょう屋の仕事に飽きて「三年の間、蝶々のように華やかな職場の上を閃いて飛んだり、男の友だちと蟻の挨拶のように触角を触れ合ったり」⁴⁴するのを思い浮かべた。その後、くめ子は仕事に没頭する彫金老職人徳永に会った。そして、くめ子の母親は次のようにくめ子に話した。

妙だね、この家は、おかみさんになるものは代々亭主に放蕩されるんだがね。あたしのお母さんも、それからお祖母さんもさ。恥かきっちゃないよ。だが、そこをじつと辛抱してお帳場に嘔りついていると、どうにか暖簾もかけ続けて行けるし、それとまた妙なもので、誰か、いのちを籠めて慰めてくれるものが出来るんだね。お母さんにもそれがあつたし、お祖母さんにもそれがあつた⁴⁵。

⁴² 岡本かの子「年譜」『岡本かの子』筑摩書房、2009年、466頁。

⁴³ 岡本かの子「家霊」『岡本かの子』筑摩書房、2009年、185頁。

⁴⁴ 岡本かの子「家霊」（前掲）、189頁。

⁴⁵ 岡本かの子「家霊」（前掲）、204頁。

その後、くめ子は宿命に忍従する勇気を得た。また、くめ子は救いを信じる気持ちも得た。その「救い」は実は「慰めてくれるもの」である。くめ子は店に戻り、引き続きどじょう屋の仕事をする。

『家霊』では、作者かの子の考えや感情が込められたのは当然である。しかし、作家かの子は自分自身を、あるいはその分身を小説の中に直接は登場させない。文壇作家としてのかの子が『家霊』において、描いたのは社会におけるどじょう屋の女主人と彫金老職人である。そして、どじょう屋の女主人と彫金老職人は仕事のために、努力していた。心が動揺したとき、努力を諦めずに、「慰めてくれるもの」が出てくるのを信じている姿である。そのような描写は前述のかの子自身の身の事柄と直接には関連していない。また、社会の共通する考え方から離れていない。つまり、『家霊』は文壇作家としての作者かの子が直接に経験したことがらを素材として書かれた小説ではない。したがって、この時期、『家霊』に感動した竹内好は北京留学前に持っていた、日本の私小説を評価する文学観を既に変化させていた可能性がある。

『老妓抄』は1938年11月に雑誌『中央公論』に載せた作品であり、芥川賞候補となった短編小説である。『老妓抄』における主な人物は平出園子という老妓と電気器具商の青年である。老妓は永年苦勞して財産を築いた。したがって、実際、のんびりと隠居生活をして問題なかった。しかし、老妓は休んでいなかった。彼女は強い生命力に溢れていて、母屋を和洋折衷風に改築して、電化装置を設置した。それによって、彼女は出入りの電気器具商の青年に会って、その青年を有為な発明家として育てようとした。老妓が若い発明家を援助したのは自分の夢を青年の身に託したからである。その点に関して、『老妓抄』では、次のように述べられている。

仕事であれ、男女の間柄であれ、混り気のない没頭した一途な姿を見たいと思う。
私はそういうものを身近に見て、素直に死にたいと思う。

「何も急いだり、焦ったりすることはいらぬから、仕事なり恋なり、無駄をせず、一揆で心残りないものを射止めて欲しい」と云った⁴⁶。

仕事に専念する姿が老妓の夢である。もしその姿を見ることができたら、老妓は「素直に死にたい」という気持ちになる。ここでの「いのち」のテーマは仕事のため、一生懸命に努力する生命力である。

『老妓抄』の中にも、作家かの子自身は登場していない。前述のかの子の経歴によると、老妓や青年の発明家がかの子の直接に経験した身の事柄と距離があるというのが分かる。したがって、『老妓抄』に感動した当時の竹内好の文学理解は日本の私小説を高く評価する以前の自分の文学観と次第にずれていた傾向が見られる。

続けて、かの子の短編小説に傾倒した後の竹内好は現実の恋愛体験に入った。当然、恋愛体験はかの子文学と関連する部分がある。しかし、本論文は、かの子文学と違う、これまでの研究で論じられていない峯子との恋愛体験の分析を試み、かの子文学の後の竹内自

⁴⁶ 岡本かの子「老妓抄」『岡本かの子』筑摩書房、2009年、237頁。

身の文学観の再形成について考察したい。

峯子の経歴から見て、彼女は悲哀を抱えた女性であろう。彼女の父は道楽して病気にかかって死を待つのみであり、彼女の夫は気性が荒く、暴力を振るう男である。生活も貧しかったことから、彼女は故郷から東京へ、東京から中国のハルピンへ、ハルピンから北京へと流浪していたのである⁴⁷。そして、学校にも行かず、「ブラブラ無為の日を送っていた」竹内好と峯子は外国の北京で偶然に出会った。その時の竹内の心境は、日記で次のように述べられている。

隣の table で壬子香（引用者註：峯子）が客と談笑しているのをきく。こうしてきていると、やはり酒場の女かなと思う⁴⁸。

壬子香は懐中鏡で顔を直している。黒っぽい着物が似あうと云うほど色が白いわけではない。荒れてやや骨太い指、唇に血が引いている。すさんだ過去を思わせる、しみの出来たたるんだ頬の肉。どこと云ってとりたてて美しさのない顔に、流石に眼だけは澄んでいると思われる。この女の態度や言葉にぐいぐい引られるような魅力ではない。極くあたりまえな感情しか起きず。それが却ってこの女を哀れ深く思わせる⁴⁹。

峯子は貧しさと不幸の中で、客と談笑する手並みを培った。その談笑する様子は楽しくて自然に出てきた女性の美しい姿ではなく、貧乏な弱者として、長い間、強者の歓心を買う悲哀を抱えた結果である。そのような貧乏な弱者の女性に直面し、エリート青年の竹内好は自尊心や優越感を取り戻そうし、「やはり酒場の女かな」というやや軽蔑的で厭な印象を持った。その後、竹内は貧しい峯子に対して憐憫の感情を抱き、「哀れ深く思わせる」と同情する。

竹内好は日本の最も優秀な大学である東京帝国大学を卒業しており、日本の一流の人材と言ってもいいであろう。そして、当時、竹内は外務省文化事業部の補助金を受け、北京に留学していた、日本人のなかでも数少ない国費留学生であった。したがって、知識人の竹内と苦しい生活をしていた峯子の間には、厳然とした身分の差異が存在した。強者の歓心を買わない竹内は峯子の前で、強い姿勢を示し、少し傲慢ともとれる態度を取っていた。

しかし、前述のように、この時期の竹内好は、自分の真の姿に嫌悪していたのである。表面的には優等生の身分であったが、実際は、学校にも行かず、何をしているか分からない劣等生であった。

当時の日本の外務省文化事業部の「在支第三種補給生」の制度を調べると、「日本の大学若しくは専門学校卒業生又は之と同等以上の学力ある者で、中国の大学、大学院、専門学校若しくは其の他に於て修学研究する者に対し、月額百二十円以内の学資を補給するもの」ということが分かる⁵⁰。さらに大里浩秋の研究によって、当時の外務省文化事業部の

⁴⁷ 竹内好「北京日記」（前掲）、1939年8月7日の項、310頁。

⁴⁸ 竹内好「北京日記」（前掲）、1939年8月5日の項、307頁。

⁴⁹ 竹内好「北京日記」（前掲）、1939年8月7日の項、309—310頁。

⁵⁰ 河村一夫「対支文化事業関係史—官制上より見たる」『歴史教育』第15巻第8号、1967年8月、88頁。

第三種補助金を受けた留学生の多くは満額の月額 120 円を得られることはなかった⁵¹。竹内好と同時代の、外務省文化事業部の第三種補助金を受けた留学生濱一衛の生活に対する周豊一の記述の中で、「官費といっても決してほしいままに使える金ではなかった。豊かな生活を送ることが允されなかったのは勿論のことである。間借や喰代で大変だろうと思って・・・」⁵²というように分析されている。留学中、竹内は近代科学図書館や北京大学理学院の日本語講師を担当したが、この時期はすべての仕事を辞めていた⁵³。つまり、竹内は学費を払った後、実際、貧乏な生活をしていた。そのような竹内は峯子の前で、劣等生で貧困な自己の姿を隠そうとした。だが、その努力は次のように失敗する。

汝よくこの死闘を現実に行う勇氣ありや。好きかきらいか、はっきり云えと壬子香はせまる。弱虫と云う。昨日は別れるとき、どんとからだを突いて意気地なしと云った。手をさしのべ、幾度か握った。面はゆい気持である。壬子香の顔を直視出来ぬ気の弱さである。十六日の公休と一緒に遊んでくれと云うのである。万寿山へ行こうと云うのである。どうして素直な気持になれぬかとせめる。芳子も卑怯と云った。男らしくないと云う意味であろう。思えば久しい自己憎悪である。すがりたい気持ではある。すがってつっぱなされることを怕れる気持が妨げるのだ。お互いに pose を脱ごうと壬子香は云う。この女の常に吐くもともな言葉に、あまりにまともすぎて返す言葉のないときも、この女のあでやかな面影を眺めればまた憶する。切ない恋ではないのだ⁵⁴。

峯子に向き合ったことで竹内好は、自分が果たして現実と戦う勇氣があるかどうかという問題を突きつけられた。峯子は、圧倒するような勢いで竹内に迫った。「はっきり云え」と迫った峯子は、弱い自分を見せたくない竹内の演技を見破っていたのである。「弱虫」と呼ばれた竹内は、自分の隠していた弱点と虚勢を相手に見破られたということを理解した。その後、竹内は峯子の前で相対的に優位に立とうと虚勢を張っていたことに思い至り、恥じ入った。なぜなら、竹内の考えでは、人間と人間の関係は、真摯に向き合う誠実なものであらねばならなかったからである。竹内は恥ずかしさのあまり最早、峯子を直視できなくなった。続いて、峯子は、劣等生の姿の竹内を厭うのではなく、「お互いに pose を脱ごう」、即ち仮面を脱ごうというように竹内に幾度も提案した。その後、次のように竹内は、自身のありのままの姿が峯子の愛情のうちに受けとめられたと感じた。

だんだん純粋な気持になっていくと壬子香は云う。以前鼻についた技巧が次第に消えてゆくのは、そうした壬子香の気持から生れる変化なのか。おのれの既に恋の盲と

⁵¹ 大里浩秋「在華本邦補給生、第一種から第三種まで」『留学生派遣から見た近代日中関係史』御茶の水書房、2009年、111頁。

⁵² 周豊一「憶往二三事」『颯風』第19号、1987年3月、32頁。（引用文の翻訳は、中里見敬「濱一衛の北平留学—外務省文化事業部第三種補給生としての留学の実態」『言語文化論究』第35号、2015年11月、36頁を参照）。

⁵³ 岡山麻子「竹内好の文学精神—存在と文学」『年報日本史叢』1999年号、1999年12月、87頁。

⁵⁴ 竹内好「北京日記」（前掲）、1939年8月14日の項、315頁。

なり果てたる浅ましきの仕業なのか。この女ほど素直におれの素朴なありのままの姿に価値を見出してくれた女はなかったし、また将来もあろう筈がないように思える。巧みに賢く受入れる女。底に美しさを持った女。いとしい女。泥沼のような過去から正に咲き出でんとする女。おれが開いてやらなければ永久に美しさを土に任せて萎えそうな女。そのくせ手にとれば、いつか小鳥のようにせわしく飛び去りそうな女⁵⁵。

竹内好は、自尊心や優越感を傷つけないようにするため、自己の墮落と貧困の現実を正視できなかった。峯子はそうした彼の弱さの中に価値を見だし、愛してくれたのだと竹内は感じたのである。竹内は、峯子のそうした素朴な人格に触れたことで、自分のありのままの醜い現実に向き合う勇気を得たのである。

弱さの価値とはエリートの優越感を守るために装う強者の価値とは逆に、全ての仮面を脱いだ後の、社会日常生活におけるありのままの真実の人間の価値である。峯子の目に、弱者としての真実の自己をさらした竹内好は、峯子の思いに打たれ、いとしい憶を抱いた。当然、エリートの竹内に社会生活における弱さを認めさせることは容易いことではない。北京留学の最後の恋愛体験の過程において、竹内は次のように頻りに心変りをしていった。

愛情に餓えているのだ。貪婪に愛情を求めながら、その本心を掘りあてずにいたのだ。峯子はそれを見事に発いた。発いだけでこの女は行ってしまった。この女も愛情に渴えて終生彷徨する運命の血を、放蕩者であった父親から受けているのかもしれない。この俺をかくまで狂おしくする女の不思議な魂。かたくなな俺の心を解きほぐし、恋するものの寂しさを沁み込ませていった、この女の不思議な柔かい純情。俺は一体何物をも与えずに、この女からすべてを与えられたのであろうか⁵⁶。

久しぶりに午前の机に向う。今にも峯子が入口の扉からこっそり覗きそうな気がしてならない。既に別れて一週間である。国へ帰ったものならば今ごろ現われるわけではないが、こっそり帰って来て今にも姿を現しそうな気がする。夜毎に狂ったのも二、三日で、昨今は夢も見ず熟睡するのは俺の峯子に対する愛情がなお浅いためであろうか。かくてはこの女にあまりに済まない気がする。淡い交情と云わば云え。はじめて俺の心を開いたこの女に俺は報ゆるものを持たねばならぬ。人間愛慾の世界は更に広いものなのであるか⁵⁷。

それも行く行くと云い、最後になるといやだと云い出すのはこの女のあまりにも素朴な天性に思えるのが、今となつては放埒な生活に荒れた我がままのようにも思われてくる。魅力は常に欠陥にひそんで居り、欠陥を欠陥と意識するようになれば、お互の感情は既に来るところまで来ているのかもしれない⁵⁸。

⁵⁵ 竹内好「北京日記」（前掲）、1939年8月22日の項、320頁。

⁵⁶ 竹内好「北京日記」（前掲）、1939年9月10日の項、322—323頁。

⁵⁷ 竹内好「北京日記」（前掲）、1939年9月14日の項、324頁。

⁵⁸ 竹内好「北京日記」（前掲）、1939年9月28日の項、331頁。

俺はこの女が素朴に俺の価値を認めたといい、その点でこの女の素朴さに打たれ、いとしい憶を抱いたのだと思う。はじめて俺の心を開いたと、たしかにその時はそう思い、今もまたそう信じている。その点にいささかの悔もない⁵⁹。

「北京日記」において、竹内好は峯子との生活を「放蕩者」の生活、あるいは「放埒」な生活と称している。エリート竹内はそのような社会での生活に対して、時には「本心」と称しつつ、時にはその生活から離れて「淡い交情」と述べた。彼は恋愛中に峯子に対する態度をも頻繁に変えた。北京留学の最後、竹内は「はじめて俺の心が開いた」と断言し、峯子との社会における「放蕩者」の生活を受け取ったのである。

そのように帰国前の竹内好は恋愛体験を通して、北京の対日協力者に見出し得なかった「人間」を、峯子との日常生活から発見した。当時の北京は、日本の軍事占領と中国の漢奸による日本化された政治によって、混乱していた。日本の官僚、中国人の漢奸以外、特権を持っていなかった普通の民衆の社会生活の全体像は良くなかったと言える。竹内と峯子の生活は当時、日本化された北京における普通の人間生活の代表である。そのような人間は「隠士」のエリートたちのように桃源郷や「文壇」に隠居する可能性はないであろう。つまり、彼らは生き続けるために、現実の社会に直面しなければならないし、苦しい生活を耐え、自分の弱さを認め、社会から逃げず、社会における自分の真実を相手に見せるのみである。

峯子との「生と性」を体験した竹内好が発見した人間は以前、竹内が学んだ日本の私小説作家に由来する人間と異なる。私小説作家が描く主人公は作家個人のアイデンティティを証明する人間である。その人間は社会から乖離する「文壇」の特殊性の特徴を持っている。それに反して、峯子との生活に由来する人間は、社会の中で不遇や辛苦などに直面しなければならない普通の社会人の全体像であろう。つまり、社会における民衆の中で、誰でも生活のために現実に直面しなければならない感情を持っているのである。

他方、峯子との生活に由来する、等身大の生活体験以外に、竹内好は社会批判の視点をも持っているはずであろう。それは竹内の文学思想の全体を検討した加々美光行の研究によって明らかにされた。つまり、竹内は文学者として、「『等身大』を超える世界に向かって文学の言葉を吐こうとする」⁶⁰ということである。文学者の言葉は、社会における民衆の生の苦しみを読者に語ると同時に、現存の社会秩序と政治の管理への批判をも含む。その上に、竹内は文学と社会、文学と政治が関係していることを次第に理解できたと筆者は考える。

竹内好の北京留学は1939年10月に期限を迎えた。そのために、帰国直前の竹内は夫を持っている峯子と別れなければならない。最後に、竹内はこの恋愛について次のように述べている。

俺はお前に云われるまでもなく、見さげはてた、だらしない男にちがいない。お前

⁵⁹ 竹内好「北京日記」（前掲）、1939年10月12日の項、333頁。

⁶⁰ 加々美光行『鏡の中の日本と中国 中国学ゴロ・ビヘイビオリズムの視座』日本評論社、2007年、157頁。

だって俺のような男を相手にするに不足するほど立派な女ではあるまい。もったいないわと云う気持ちはお互いあり、またそれを反撥する気持もお互にあるのだ。この女は既に俺の弱点を悉く見抜いて見くびっているのかもしれない。お前が俺を好きになったのは、その弱点に於てこそ、つまりその弱点を透して俺の今は俺自身見失ったかと怕れる純粋な本質を発見したからではなかったのか⁶¹。

ここで、竹内好は自分が以前、自身の弱点を隠していたことを明確にしている。「俺の弱点を悉く見抜いて」という言葉は、峯子がエリート青年である竹内の内面にあった墮落と貧困そのものを発見したということを示している。そして、「俺の今は俺自身見失ったかと怕れる純粋な本質」という言葉は、竹内の懸念を表している。峯子と別れ、日本に戻る直前の竹内は、自分がまもなく北京での生活から抜け出して、再び、東京の有為のエリート青年になり、北京における峯子との生活に由来する以上の体験の記憶を失うということを恐れていた。

第四節：「中国」への復帰

北京留学を終えて東京に戻った竹内好は、再び「中国」について深く考えるようになった。彼は、以前の自分の考え方について次のように回想している。

支那を支那と呼び支那人を支那人と呼ぶことは支那人の感情を害うから、宜しく中国及び中国人と称すべしという論が行われている。ちかごろ『文芸春秋』の「話の屑籠」でも見たし、別にこれを実行に移している刊行物もあるようである。個人で支那と書く場合に好んで中国と書く人が、僕の知る範囲でもかなりある。（中略）

僕は、自分のことを先ず云うと、数年前、中国文学研究会を始めるときは、中国という言葉のを会名に用いて少しの疑惑も抱かなかった。（中略）僕らは中国という言葉の清新さを愛した。少年の行動の夢はつねに衣裳の生産に初まる。だが、それだけが全部の理由ではない。多少の支那文字を読み習い、多少の支那人と識った僕らは、支那人がどんなに支那とよばれることを嫌うか、逆に中国とよぶことが彼らをどれほど喜ばすかという、頗る単純な国民心理の洞察に基いてこれが応用を企てたわけである。僕らが支那人を愛したかどうか、いま遽かに云えぬ。少くとも僕らは、支那人の識るところとなり、彼らに好意を抱かれることを以て自身の仕事の有利に展開すべきを信じたのである⁶²。

竹内好の留学前、東アジアでは日本は植民地支配の強国であり、中国は半植民地の弱国である。その認識の下で、中国人は時代遅れのレッテルを常に張られていた。その一つは「支那」⁶³という東アジアにおける劣等生の代名詞である。竹内はそれに抵抗し、北京留

⁶¹ 竹内好「北京日記」（前掲）、1939年10月12日の項、335頁。

⁶² 竹内好「支那と中国」『竹内好全集』第14巻、筑摩書房、1981年、162頁、163頁。（初出は『中国文学』第64号、1940年7月）。

⁶³ 「支那」には元々、強者の弱者に対する軽蔑の意味は込められていない。後に、特に竹

学中、「支那人」とは異なる、優等生の「中国人」を発見しようとした。ところが、その試みは挫折し、絶望感を抱いたようだ。1940年に東京に戻っていた竹内は、北京留学当時の絶望的な状況にあった記憶を再構成することを試みた。北京留学中に竹内は苦悶の時、頻繁に人力車に乗りながら、空を見ていた。竹内は次のように述べている。

そういう日常をくりかえす中、僕の車上の空想に、いつか一つの型が生れた。それは型というより、地上の息苦しさから思考を解放するきっかけのようなものであった。それは、この走る機械を目して発する「俺はこの男に何を加え得るであろうか」という自問の形式であった。俺はこの男に何を加え得るか。（中略）

機械が僕の思考の要求するリズムを外れるとき、腹立たしさがまた僕にこの自問を吐かせた。俺はこの男に何を加え得るか。この男とは檻褸をまとった走る機械である。湧き上る汗を首筋ににじませ、顔面紅潮し、双手は軽く梶棒を支え、歩度を一定に保って疾走する開化の交通機関。みじめな、いじらしい、それでいて人に恐れを抱かしめる執拗な本能の漲った生きもの。俺はこの男に何を加え得るか。僕の思考は恐れのない天上に馳ける。リズムが快ければ僕は車上に睡る。そのときハムのような伴奏だけがきこえている。俺はこの男に何を加え得るか。（中略）

僕は東京のバスに乗って、車掌の愛嬌さえ気になるが、洋車ひきとの交渉はせいぜい一片の銅貨を多く地上に擲きつけるだけで解決がつく。数ならぬ作家の品評を下すより、これは遥かに明確な現実ではないか。彼らの個人の表情は記憶に残らぬ。在るものは全体としての一個の抽象された支那人一般の顔である⁶⁴。

半植民地の北京で、竹内好は中国人の車夫に対して、「俺はこの男に何を加え得るであろうか」と自問した。つまり、車夫のような、自分と距離がある「機械」を目の当たりにし、竹内は無力を感じたのである。留学中、竹内は優等生の「中国人」の顔を最後まで発見できず、「彼らの個人の表情は記憶に残らぬ」と述べていた。それに対して、竹内が北京留学を終える時に発見したのは、「みじめな」「一個の抽象された支那人一般の顔」である。それは当時の峯子と竹内と同じく、「支那」（北京）という日本化社会の中で生活していた車夫に由来する普遍的な中国人の民衆に共通する、世の辛酸をなめる社会人全体像の顔である。続いて、竹内は次のように述べている。

さて僕は、かつて中国と口にも出し筆にもした僕は、いま口に出し筆にすることに気持が落ち着かない。この変化はいつころ起ったのであろうか。二年間北京に暮すようになってから、僕は支那という言葉に忘れていた愛着の念を再び感じ出していた。昔なじんだ言葉を思い出してふと口にすれば、今さら何をけうとい中国の響よ。言葉とはかくもおろかに人を誑すものか。所業の無役を悔む心はあながち一ひらの言葉に限るわけではないが、身に沁む寂寞は如何ともなしがたい。一たい僕は何を考えつづけ

内の1930年代1940年代では、当時の中国人は「支那」と聞き、強者日本対弱者中国の軽蔑が含意されていると述べていた（注53を参照）。

⁶⁴ 竹内好「支那と中国」（前掲）、168頁、170—171頁。

て今日わが精神の盾としてきたのか。僕は理窟で中国をきらったわけではない。僕は自分に支那がふさわしいと直覚したのである。支那こそ僕のものだ。ほかの何ものよりもそれはいま僕の心情にかなう。見栄や虚飾は人を疲らせるばかりではないか。僕には支那が丁度いいのだ。（中略）

過去に支那と称したことによって、たしかに支那を軽蔑したか、いま中国と称することによって、必ずこれを軽蔑せぬか、何人も己の胸に問うことなくして言葉の問題を提出するとするならば、文学の背信これより甚しきはないであろう。僕をして云わしむれば、彼らが支那人を軽蔑するとせぬとは同じことである。彼らは、子供をあやすように支那人を憐憫し得たと信ずるかもしれない。これほど支那人にとっても迷惑なことはない。憐憫さるべきは、一人の支那人を愛し一人の支那人を憎み得ぬ彼ら自身の精神の貧しさなのである。もし支那に支那人が侮蔑を感じるならば、その被侮蔑感を僕は払拭したい。いつか支那人の前で、ためらうことなく、相手の気嫌を忖度することなく、はっきり支那と云いきれる自信を養いたい。僕は支那人を尊敬しようとは思わない。だが、支那に尊敬すべき人間の居ることは知っている。日本に軽蔑すべき人間が居ると同様に。僕は支那人を愛さなければならないとは信じない。だが僕は、ある支那人たちを愛する。それは、彼らが支那人であるからでなく、彼らが僕と同じ悲しみを常住身にまとっているからである。僕は、日本語の響を純粹にするためにも今は支那といたい⁶⁵。

恋愛の体験によって、自分の優越感から解放された竹内好は、車夫のような市井の中国人民衆の世の辛酸をなめる顔を、自分の悲しい北京の生活体験と関連付け、「この変化はいつころ起ったのであろうか。二年間北京に暮すようになってから」と、さらに「彼らが僕と同じ悲しみを常住身にまとっている」などと述べた。当時の峯子も、当時の竹内も、当時の北京の中国人の一般の民衆全体も、現実の社会生活の苦しみという真実に直面し、真っ暗闇の中で歩いていたのであろう。竹内は他者中国人の真実の姿を自己の北京における人生と社会生活に投影できたのである。

その後、竹内好は支那という言葉に拘束されていた自分を発見し、自分の言葉の能動性を取り戻そうとした。「支那こそ僕のものだ」、「僕には支那が丁度いいのだ」などの言葉の意味は、恐らく自分が「支那人」と同じく、混乱した社会と政治支配の下での北京で生活していたということであろう。つまり、北京留学時代の竹内も暗い政治管理と混乱の社会から逃げず、「支那人」という全体の中で生活していたのである。竹内は「支那」という言葉を使うことができる。中国人とともに生活していた日本人竹内が背負っているものは支那と軽蔑された現代中国人の社会生活の悲しみであろう。

第五節：『魯迅』とその後

留学前に日本の私小説に由来する作家の「個人の経験」や、革命文学と距離を置く文人小説を高く評価し、魯迅を批判したのと異なり、北京留学の後、竹内好は再び魯迅の文章

⁶⁵ 竹内好「支那と中国」（前掲）、167頁、172頁。

を読み、『魯迅』という本を書くなかで、自分の魯迅像を作り上げた。『魯迅』の中で、竹内は、辛亥革命の「成功」を批判した『阿Q正伝』など政治や社会に関する文学に注目し、同時に魯迅が「三・一八」事件など政治からの迫害を引き続き受けていたが旧政治を倒す能力のない歴史上の事実に基づいて、革命・社会・政治と関わる自身の魯迅像を描き出した。つまり、竹内は魯迅の作品を読み、政治や社会や革命の中で苦しく生活していた魯迅像を書くことで、日本の私小説に由来する留学前の文学観を大きく変化させたと考えられる。竹内は文学と政治との関係を、次のように再構築した。

文学が政治と無関係だと云はうとするのではない。関係のないところには、有力も無力も生ずるはずがないからである。政治に対して文学が無力なのは、文学がみづから政治を疎外することによって、政治との対決を通じてさうなるのである。政治に遊離したものは、文学でない。政治において自己の影を見、その影を破却することによって、云ひかへれば無力を自覚することによって、文学は文学となるのである。政治は行動である。従って、それに対決するものもまた行動であらねばならぬ。文学は行動である。観念ではない。しかしその行動は、行動を疎外することによって成り立つ行動である。文学は、行動の外にでなく、行動の中に、廻転する球の軸のやうに、一身に動を集めた極致的な静の形で、ある。行動がなければ文学は生れぬが、行動そのものは文学ではない。文学は「餘裕の産物」だからである。文学を生み出すものは政治である。しかし文学は、政治の中から自己を選び出すのである。従って革命は「文学の色彩を變へる」のである。政治と文学の関係は、従属関係や、相剋関係ではない。政治に迎合し、あるひは政治を白眼視するものは、文学でない。真の文学とは、政治において自己の影を破却することである。いはば政治と文学の関係は、矛盾的自己同一の関係である。（中略）文学の生れる根元の場合は、常に政治に取巻かれてみなければならぬ。それは、文学の花を咲かせるための苛烈な自然条件である。ひよわな花は育たぬが、秀勁な花は長い生命を得る。私はそれを、現代支那文学と、魯迅とに見る⁶⁶。

前述のように、留学前の竹内好は、当時の中国を軽蔑した意味の「支那」と言わず、「中国」と呼んでいた。ここで、竹内は「私はそれを、現代支那文学と、魯迅とに見る」というように「支那」と敢えて述べている。つまり、留学後の竹内は、旧中国の政治管理の混乱状態の下で、現代中国文学における、苦悶する現代中国人全体像の社会生活の真実を直視できるようになったということであろう。

このように、竹内好が「支那」を受け入れることができたからこそ、彼の文学観における文学と社会の関係、及び文学と政治の関係も再構築が可能になったのだと筆者は考える。以前、竹内は文学と政治の関係を「相剋」と書き、文学には日本の私小説作家の個人の特徴を描くという芸術の役割を重んじていたが、留学後は、「相剋関係ではない」と自分を否定するように考えを改めた。また、「文学の生まれる根本の場合は、常に政治に取巻かれてみなければならぬ」ということから見て、私小説を進んだ文学だと評価する彼の以前の「古風」な文学観も変化したということが窺える。単純な私小説ではなく、文学の発生が

⁶⁶ 竹内好『魯迅』日本評論社、1944年、145—175頁。

政治、及び政治によって管理された背後の社会から離れてはならないという見解になった。文学は政治や社会生活において、人間の全体像を発見しようとするのであろう。文学の発生に対する政治の意義も竹内は認めているのである。こうした文学観が定まることにより、竹内の「掙扎」の魯迅像、あるいは、「現代支那文学」像が生まれたのである。

魯迅がもし先覚者であったとしたら、それは不可能のはずである。彼は先覚者ではない。彼は一度も、新時代に対して方向を示さなかった。最も公式主義的な批評家の魯迅論においてさへ（たとへば平心「魯迅の思想を論ず」など）この点は認めてあるほどである。魯迅のやり方は、かうである。彼は、退きもしないし、追従もしない。まづ自己を新時代に対決せしめ、「掙扎」によって自己を洗ひ、洗はれた自己を再びその中から引出すのである。この態度は、一個の強靱な生活者の印象を與へる。魯迅ほど強靱な生活者は、恐らく日本では求められぬかもしれぬ⁶⁷。

文学者である「自己を新時代に対決せしめ」、時代から「自己を洗ひ」という「生活者」は、時代の要素を引き離すことができない現実の社会の状況に直面したことを意味する。時代から自己を「引出す」というのは以上の状況の中から、真の強い文学を生み出していくことを指しているのであろう。「掙扎」という姿は自己が社会でもがいている姿であり、文学者が旧時代と新時代の中で自己を実現しようとするものではなかろう。つまり、竹内は「自己」（文学）と「時代」（社会と政治）が繋がっているという姿を文学観として受け入れた。そのことによって、伝統と現代、文学と政治との葛藤に由来する、有機的結合を持った新しい文学が現れると考えることができたのである。

竹内好は戦後に、北京留学中、理解できなかった周作人をも理解しつつあった⁶⁸。彼は1965年に「周作人から核実験まで」の文章を書き、周作人の対日協力者の面を批判し続けると同時に、「排日家」の面もあるということを発見した⁶⁹。政治と文学がつながる文学観を持った後だからこそ、竹内は文学者周作人の「排日家」という政治的側面を高く評価したと考えられる。

おわりに

本章では、北京時代の竹内好の生活が彼の文学に対する理解にどのように影響を与えたのかを考察し、文学に従事し、文学を放棄し、最終的にまた文学へ戻る思考の過程を検討した。竹内の留学前の文学観は日本文学の私小説における一部の特徴に由来し、社会や政

⁶⁷ 竹内好『魯迅』（前掲）、10頁。

⁶⁸ 戦後の竹内好が「排日家」の周作人をどのように理解したのかということについては、伊藤徳也が論じている。本論文は、伊藤が触れていない北京留学中に竹内好が「親日家」の周作人を見ながら苦悩したという事実を考察した。本論文は、伊藤の研究と論点が違い、文学と政治が関わるまでの竹内好の考え方の変化を示そうとするものである（伊藤徳也「竹内好の周作人論」『周作人研究通信』第5号、2007年1月、16—20頁）。

⁶⁹ 竹内好「周作人から核実験まで」『竹内好全集』第11巻、筑摩書房、1981年、283—298頁。（初出は『世界』第229号、1965年1月）。

治的統治から乖離する「文壇」作家の人間性を重んじていた。留学中、竹内の視線では、半植民地状態の北京の中で、日本占領という社会と政治から距離をおく文学は作り出されなかった。私小説の特徴を持っている文学を発見できなかった竹内の心情は、期待から絶望へと変わった。しかし、竹内は個人的な恋愛体験を経て、「文壇」の人間に近づく知識人としての自分の優越感を捨て、社会や政治の下で生活していた、辛酸をなめる社会の人々の人間像全体を発見し、それを愛することができるようになった。留学後の竹内は政治と文学の不即不離の関係を本格的な文学の特徴であると考えた。その苦悩を経た、思想の変化は竹内の成長であると言える。

戦後、竹内好は「社会環境の日常性」が欠いていた日本文学を批判した⁷⁰。そして、彼は自分の人間観について、戦後、岩波映画の撮影隊が制作したドキュメンタリーの映画「夜明けの国」（1976年）を批評する中で、次のように述べた。

けれども、極限状況においてしか人間がとらえられないとする人間観には私は反対である。人間は日常性において人間であり、したがって愛も憎しみも、日常性において最大に発揮される、という人間観に賛成し、その点私と共通するらしいこの映画の制作者たちを支持する⁷¹。

竹内好は個別性を持っている「極限状況」の人間観と、自分の社会における日常生活（ここでの日常生活は中国文化大革命の下での民衆の生活）の人間観の区別を明言した。文学は「極限状況」という特別な人間の愛憎を描くのか、それとも、社会や政治の渦中で日常生活を送る人々の人間像全体の感情を描くのか。竹内の考え方は後者であり、その考え方は彼の北京体験に影響されているということが本章で述べた点である。文学観を定めた竹内は戦後、どのように日本自然主義文学や私小説と格闘したのかは、次章以降で引き続き、検討していきたい。

⁷⁰ 竹内好「『戦争体験』雑感」『竹内好全集』第8巻、筑摩書房、1980年、235頁（初出は『思想の科学』第29号、1964年8月）。

⁷¹ 竹内好「夜明けの国」『竹内好全集』第4巻、筑摩書房、1980年、425頁。（初出は『世界』第264号、1967年11月）。

第二章：竹内好による「文学者」魯迅像の生成 —小田嶽夫の「愛国者」魯迅像への懷疑—

はじめに

小田嶽夫（1900～1979）は日本文学の分野で広く知られているが、彼は東京外国語学校支那語科を卒業し、中国に深く関わっている。彼は中国に対する自らの感情を「郷愁」と表現している。先行研究により、小田は確かに中国に対して、「郷愁」を抱いていることが知られている¹。

1936年9月15日の「魯迅日記」によれば、魯迅が小田の手紙を受け取ったことが分かる²。同年10月に小田によって書かれた「魯迅を偲ぶ」では、「偉大な文学者」という魯迅への感嘆も垣間見える³。小田は1940年6月、雑誌『新風』に「魯迅伝（第1回）」（Ⅰ）、9月、雑誌『新潮』に「魯迅伝（第1～3回）」（Ⅱ）を発表した。ⅠとⅡの「両者をベースにして『魯迅伝』がその全貌をあらわしたのはⅢの段階で、ここに『魯迅伝』は一応の完成をみる」⁴と先行研究では考えられている。ここで言われる「Ⅲ」は、1941年出版の『魯迅伝』を指す⁵。1941年3月に小田の『魯迅伝』は、筑摩書房により出版された。以前にも「魯迅伝」の名前で書かれた文章があるが、1941年の『魯迅伝』は日本最初の本格的な魯迅の評伝であり、小田の魯迅像を提示したといえよう。

竹内好は、1937年から1939年まで北京で留学していた。帰国した後、竹内は1941年5月に日本評論社と『魯迅』の出版契約を結び、後世の魯迅研究者に多大な影響を与えることとなった『魯迅』を書くことを決めた。つまり、竹内が『魯迅』の執筆を決心したのは、ちょうど小田の『魯迅伝』が出版され、当時の人々に読まれている頃である。『魯迅』は、1944年に出版され、これによって竹内の魯迅像が提示された。

小田の魯迅像と竹内好の魯迅像の間には相違がある。その相違は、魯迅の一部の作品への小田の解説に対する竹内の反発や批判と関わっている。

本章では、小田の魯迅像と竹内好の魯迅像との差異を明らかにしようと試みる。第一節では、『魯迅伝』と『魯迅』の関係についての先行研究を批判的に検討した上で、『魯迅

¹ 邱嶺「小田嶽夫的「城外」与郁達夫的「過去」」『外国文学研究』2004年第2期、2004年4月、111—115頁。伊藤虎丸「『文士』小田嶽夫と中国」『国文学 解釈と鑑賞』第64巻4号、1999年4月、32—36頁を参照。

² 魯迅『魯迅日記 下巻』、人民文学出版社、1976年、1024頁を参照。李平「小田嶽夫の魯迅観—『魯迅伝』を中心として」『二松 大学院紀要』14号、2000年、101頁も、合わせて参照。

³ 小田嶽夫「魯迅を偲ぶ」、『支那人・文化・風景』、竹村書房、1937年、165頁。

⁴ 松本和也「小田嶽夫『魯迅伝』の形成と変容（1940—1966）」『立教大学日本文学』106号、2011年7月、94頁。

⁵ 本論文で使うのは1966年に大和書房により出版された『魯迅伝』である。1966年の『魯迅伝』は1941年の『魯迅伝』のリプリント版である。

伝』に対する竹内の批判の経緯を説明する。第二節では、『魯迅伝』と『魯迅』を対照させつつ、両者における魯迅像の分析を行う。具体的には、①『魯迅伝』と『魯迅』における文学観の相違を考察し、②魯迅の作品に対する「素朴」な解読を通して、小田は「青春期の真の愛国の情」を提示し、「愛国者」の概念を完成したことを指摘する。さらに、③竹内は魯迅の作品に対する「素朴」な小田の解読を批判し、自らの新しい解読方法を通して、「青春期の真の愛国の情」と異なる文学者の概念を作り上げたことを示し、非功利的な立場を作り上げたことを指摘する。第三節では、両者の魯迅像が魯迅の一つの側面を捉えたことにすぎないことを指摘した上で、各々の背後の日本批判の立場を考察し、魯迅像の相違の理由を説明する

第一節：『魯迅伝』と『魯迅』の関連について

本節では、まず小田の魯迅像と竹内好の魯迅像との関連についての先行研究を簡潔にまとめる。丸山昇は論文で『魯迅伝』に触れ、竹内好による「花鳥風月」の批判の重要性を指摘したが、『魯迅伝』の内実についての具体的な分析は十分に展開されていないように思われる⁶。伊藤虎丸は『魯迅伝』を読んだ30年後（1985年）に再び、それを読み返した際、小田の魯迅像と竹内好の魯迅像には共通点があると判断している⁷。さらに、伊藤は、その共通点を小田の「倫理的」魯迅像の枠組みとして指摘し、「(イ) 反政府の「愛国者」、(ロ) 小田が「弱国人の文学」と呼んだ民族主義、(ハ) 強固な伝統（小田の言葉では「中国旧文化」「中国語文化」）との生涯の格闘」という枠組みを提出した⁸。しかし、「倫理的」魯迅像の枠組みの発想は仮説であり、その根拠が詳しく説明されていないように思われる。管見の限り、両者の関連に触れる論文は少ない。

では、竹内好は『魯迅伝』における小田の魯迅像をどのように批判していたのか。『魯迅』には、竹内による『魯迅伝』に対する批判が見られる。竹内は「私が、彼の伝記の伝説化に執拗に抗議したのは、決して揚足取りのつもりからではない。魯迅文学の解釈の根本にかかはる問題だからである。（中略）その根底的な自覚を得たことが彼を文学者たらしめてあるので、それなくしては、民族主義者魯迅、愛国者魯迅も、畢竟言葉である」⁹と述べている。その批判から、小田の魯迅像と異なる自らの魯迅像を作ろうという竹内の意図が分かる。

ここでの「伝説化」は具体的に何を指しているのか。戦後、再出版した『魯迅』には「自註」の部分が増えられた。その「註六」を見ると、「増田渉『魯迅伝』、小田嶽夫『魯迅の生涯』等、すべてこのような解釈をとっている」¹⁰とある。戦後の1949年に鎌倉文庫に

⁶ 丸山昇「日本における魯迅」、伊藤虎丸・祖父江昭二・丸山昇『近代文学における中国と日本』、汲古書院、1986年、434—436頁。

⁷ 伊藤虎丸「小田嶽夫氏と中国文学」、小田三月『小田嶽夫著作目録』、青英舎、1985年、23頁。

⁸ 伊藤虎丸「『魯迅と終末論』再説—『竹内魯迅』と一九三〇年代思想の今日的意義」『東京女子大学比較文化研究所紀要』62号、2001年、32頁、36頁。

⁹ 竹内好『魯迅』、日本評論社、1944年、72頁。

¹⁰ 竹内好『魯迅』、未来社、1961年、178頁。

より、小田の『魯迅伝』が『魯迅の生涯』という名前で再出版された。「支那」を「中国」に変えるといった工夫やいつかの細かい変化が見られる¹¹が、小田の魯迅像は変化しなかった。つまり、「伝説化」のところには『魯迅伝』の問題点がある。

続いて、「魯迅文学の解釈の根本にかかはる問題」について、竹内好は以前の魯迅像を批判した。それは、小田の魯迅像など、先行する魯迅像に対する不満ではないかと考えられる。小田の『魯迅伝』の「あとがき」では、「無意識のうちに自ら一つの線に沿って進んでいたようにも思われる。というのは「愛国」者という魯迅の面に知らず識らずのうちに叙述が集中して行ったような気もする」¹²と述べられており、『魯迅伝』には「愛国者」魯迅像という認識が見られる。竹内の考えでは、「愛国者魯迅」という認識に問題があり、自らの文学者魯迅を提唱した。したがって、『魯迅』を書いていたときの竹内はすでに、『魯迅伝』における「愛国者」像と、「文学者」としての魯迅像の差異に関心を寄せていたのであろう。

戦後にも竹内好は『魯迅伝』を論じている。魯迅が亡くなってからちょうど20年目に竹内は「花鳥風月」を書き、小田の『魯迅伝』を単行本として「最初の（魯迅）研究書」と述べたが、伝記として成功していないものと酷評し、結局、「『魯迅伝』は、魯迅のいちばんきれいな花鳥風月で魯迅を処理したきれいなところがある」と述べている。「花鳥風月」は自然の美しい風物としばしば解釈されるが、竹内は次のように説明している。

つまり、まちがっているとすれば全体がまちがっているとしかないのだが、私の不満の点を強いてあげれば、作者は素朴すぎやしないか、文章を信じ過ぎやしないか、文章を、その奥のところで問題にするのでなくて、手前のところで問題にしているのではないか、ということである¹³。

小田が魯迅の作品（小田に選ばれた一部の作品のみ）を事実としてそのまま信じることに對して、竹内好は不満の意を表し、魯迅のそれらの文章を「素朴」な姿で解説していると批判した。つまり、竹内は『魯迅伝』における「愛国者魯迅」の魯迅像を批判したのみならず、「愛国者魯迅」を構築する小田の方法にも反対したのである。

このように小田の魯迅像と竹内好の魯迅像との間には大きな相違があるが、先行研究では両者の関係について未だ十分に議論が深められていない。それを念頭に置きつつ、本章では次に、『魯迅伝』と『魯迅』の内容を具体的に比較していきたい。

第二節：「愛国者」と文学者について

第一項：小田の文学観から竹内好の文学観へ

¹¹ 松本和也「小田嶽夫『魯迅伝』の形成と変容（1940—1966）」（前掲）、100—102頁。

¹² 小田嶽夫『魯迅伝』、大和書房、1966年、190頁。

¹³ 竹内好「花鳥風月」『竹内好全集』第2巻、筑摩書房、1981年、324—326頁（初出は『新日本文学』1956年10月号、1956年10月）。

本節では文学と革命の認識（文学観）をめぐる『魯迅伝』と『魯迅』の区別を説明する。『魯迅伝』では、魯迅は「愛国者」という概念によって捉えられている。小田は次のように述べている。

結局魯迅の全著作を主な頼りとするほかなかった。それによって魯迅の歩いた道を辿って編述するかたわらその時々々の魯迅をとりまく環境を書き添えたというのが本伝の大凡であって、（中略）一方これ〔引用者註：「愛国者」〕は生涯を通じて魯迅の心に最も熱く燃えていたものであって見ればそうなるのも当然かも知れない。魯迅は青年期以後殆んど終生時の為政者、権力者にたいし憎悪、反感に燃えていたようであったが、それも彼の真の「愛国」の情に根ざしていたことは、本伝を読まれた読者は容易に了解せられたことと思う。（中略）

孫文は新支那の形を作った人であった。それに比して魯迅は新支那の中身を作るために終生苦しんだ人であった。（中略）この古き支那を根底から覆そうとして身を挺した最も果敢な二人の勇士が、共に留学生出身であったことはさもあることと肯られる（中略）けれども魯迅が血をもって綴った国家、社会、民族を思う熱誠の文字は、いつの日にも誰かあって灯の下にその書を繙く若人の胸をあたため、その多感な血を熱くたぎらせることであろう¹⁴。

小田は魯迅の「全著作」（文字）に基づいて、魯迅像を作り上げた。彼は魯迅作品の重要性に対する認識を踏まえ、魯迅の文字に表現された「国家、社会、民族を思う」ことを信じ、「愛国者」の観念を基軸とした文学観を樹立したのである。

小田の「愛国者」魯迅像にとって肝要なのは、為政者・権力者に対抗する「反権力」の立場に寄せる「愛」の情である。それは「真の「愛国」の情」と呼ばれ、魯迅の青年期に発生し、終生に貫かれているものであり、魯迅文学の中核（魯迅の精神）となる。「真の「愛国」の情」は、小田によって魯迅の文字（作品）から読み取られた魯迅独特のものである。また、為政者・権力者とは当時、半植民地の中国における反動的な弾圧の凶暴化という政治的情勢であろう。当時の政治的情勢と戦う目的は革命であり、即ち旧来の中国の「根底」（中身）を文学（文字）の武器で徹底的に覆すことである。

したがって、『魯迅伝』における文学観は革命の文学観といえよう。魯迅文学（文字から読み出された「真の「愛国」の情」）と為政者・権力者との間の対立が見られる。なおかつ、文学は革命にとって、それ自体が革命の武器になり、旧中国を覆す力を持っている。小田の文学観に直面した竹内好は『魯迅』で小田の文学観と対峙し、異議を唱えた。格闘の過程について、竹内は以下のように述べている。

彼はたしかに虚言を吐いたのであり、ただ虚言を吐くことによって、一の実を守った。それが、多くの実を吐いた俗流文学者から彼を区別する所以である。「文学は無用だ」これが、魯迅の根本の文学観である。（中略）

「革命」とは広義に云へば、政治といふことである。（中略）従って政治理念とし

¹⁴ 小田嶽夫『魯迅伝』（前掲）、190頁、11—22頁。

ての「革命」を「永遠の革命」と解するのは、すでに一つの態度である。(中略)

文学は無力である。魯迅はさう見る。無力といふのは、政治に対して有力なものは文学でない、といふことである。(中略)「文学文学と騒ぐ」こと、文学が「偉大な力を持つ」と信ずること、それを彼は否定したのである。(中略)文学が政治と無関係だと云はうとするのではない。関係のないところには、有力も無力も生ずるはずがないからである。(中略)政治と文学の関係は、従属関係や、相剋関係ではない。政治に迎合し、あるひは政治を白眼視するものは、文学ではない。真の文学とは、政治において自己の影を破却することである。いわば政治と文学の関係は、矛盾的自己同一の関係である。(中略)文学の生まれる根本の場は、常に政治に取巻かれてゐなければならぬ。それは、文学の花を咲かせるための苛烈な自然条件である。ひよわな花は育たぬが、秀勁な花は長い生命を得る。私はそれを、現代支那文学と、魯迅とに見る¹⁵。

魯迅は「『墳』の後に記す」や『兩地書』、「私は人をだましたい」などの文章の中で、自らの作品と自らの思想と異なるという点を指摘した¹⁶。竹内好はそれらの文章を羅列しつつ、魯迅の文章を「虚言」と称し、「無用」の文学観を出した。その態度は魯迅の作品を単純に信じる小田の態度と逆方向である。

その上で、竹内好は旧中国の根底を覆す革命を「政治」という言葉でまとめる。魯迅文学が革命に対して偉大な力を持っていないという「無用」の説を提唱する竹内は、文学の功利性を否定し、それによって、文学の力を以て旧中国を覆すといった小田の見方を退けた。魯迅文学の「無用」は、革命と対立することなく、革命と調和することでもなく、革命と共存する意味に近いであろう。文学が最初から革命の中に自立しているということである。

竹内好の文学と革命(政治)の関係は「矛盾的自己同一」¹⁷の文学観といえよう。「矛盾的自己同一」は矛盾と同一の両面を持っている。矛盾というのは、文学と革命が本質的に異質のものであることを指す。同一というのは、本質的に異なる文学と革命が、一つの場で共存し、どちらも相手と離れないことを意味する。戦後になって、魯迅を敷衍した「矛盾的自己同一」のロジック¹⁸は、日本の文学と革命(政治)の問題の解決方法として、さらに以下のようにまとめられた。

私は、政治と文学とは機能的に区別しなければならないことを主張しただけである。

¹⁵ 竹内好『魯迅』、日本評論社(前掲)、12頁、145—175頁。

¹⁶ 「『墳』の後に記す」は『魯迅全集』第1巻、人民文学出版社、2005年を、『兩地書』は『魯迅全集』第11巻、「私は人をだましたい」は『魯迅全集』第6巻を参照。

¹⁷ 「矛盾的自己同一」は西田哲学から借用された言葉である。『魯迅』の「自註」の「註12」を見ると、その言葉は西田哲学の用語に厳密に従っていないことがわかる。つまり、竹内の言葉と西田哲学の用語とは異質のものである。

¹⁸ 竹内好の思想における魯迅文学と日本文学の関連は、竹内の文章「中国の近代と日本の近代—魯迅を手がかりとして」『竹内好評論集第三巻 日本とアジア』、筑摩書房、1966年、9—50頁。(初出は『東洋文化講座3』、1948年11月)を参照。

文学は政治を代行しえず、政治は文学を代行しえない。目的は全人間の解放であり、（中略）その目的にたいして政治と文学は、それぞれの側面から責任を待たねばならぬのである。（中略）それぞれの機能を責任をもって果すことによって、目的のために有機的に結ばれたものが、真の自律性である¹⁹。

「文学も政治の役割を代行できない」のように、「矛盾的自己同一」は文学が革命（政治）に関与するのは、その役割に取って代わる考えではない。むしろ、文学は革命の中で、文学の自己更新を完成することであろう。そして、いわゆる「目的のために有機的に結ばれた」のは「無用」における「無用の用」の内容である。

以上のように、小田と竹内好の文学観には区別が見られる。文学が旧中国の革命に対して大きな力を持っているという小田の文学観は、功利的な文学観と言ってもいいであろう。文学は旧中国を覆す手段として使われるからである。一方、竹内は文学と革命（政治）が各々の役割を果たすことを提唱しており、旧中国の革命に対する非功利的な文学観といえよう。文学は革命の手段として認められないのである。

第二項：小田の「愛」から竹内好の「愛」へ―「幻燈事件」をめぐる論争―

前述のように小田の魯迅像にとって、「真の「愛国」の情」は最も肝心である。その情は無論、先進国が時代遅れの国を侵略するという当時の政治状況に置かれた中国の民衆を案じている情である。『魯迅伝』第二章「日本留学」で、小田は魯迅の「藤野先生」に対する解説に基づき、「強国対弱国」という帝国主義的侵略の「圧迫」の下で「真の「愛国」の情」を生み出した感情豊かな「愛国者」魯迅を表した。

「藤野先生」では「幻燈事件」が紹介されている。主人公「我」は、1904年に医学の留学生として仙台の医学専門学校に入学した。仙台留学のある日、次の授業の合間に、日露戦争で日本が勝つ様子を伝える幻燈が映し出された。幻燈の中には、ロシア軍のスパイとして日本軍に捕まり、殺される中国人が映されており、それを見ていた周りの中国人同士の観衆がみな拍手と歓声で興奮を表したという場面が見られる。その場面を見た主人公「我」は「医学を捨てて文学に転ずる」ことを決心した。そのようにして、主人公「我」が仙台から離れる動機は、「幻燈事件」であったと解釈されている。小田は「藤野先生」の主人公「我」が魯迅本人であることを信じ、以下のように述べている。

そしてこの時以来急激に彼の医学求学の志は他のあるものにとり代えられたのである。……彼らの精神の革新！これこそが今日の最大の急務と彼には考えられた。しからばその精神を改革させるには？それには文学の力を置いて他に無いというのが彼の結論であった。そのことは単に頭脳だけでなく彼の全身全霊で考えられた。八年前郷人の白眼視の中を決然と新人生開拓の旅路に出発した時の彼はまだどこか少年の夢を多分に孕んでいたところがあったが、今心に漲るものはむしろ夢から醒めた冷徹

¹⁹ 竹内好「文学の自律性など」『竹内好全集』第7巻、筑摩書房、1981年、64頁。（初出は『群像7』、1952年11月）。

な瞳で現実を透視して起こさせられた灼熱の情であった。もともと祖国の民生への思いに燃えていた心はたださえ熱くたぎっている青春の血に煽られて今はもうじっとしていられなくなった。彼は東京へ戻って文学運動を起すことを決意した²⁰。

以上の描写からは、「幻燈事件」に刺激を受け、唐突に同胞（弱国人）の「精神の革新」を意識した魯迅の姿を読み取ることができる。「幻燈」の内容を考えると、殺人者は日露戦争時期の日本軍隊である。その際、日本は既に帝国主義の段階に進み、中国を侵略していた。日本帝国主義の殺人に直面した周りの中国人同士たちは平然と見物していた。それを見た魯迅は覚醒し、急速に「文学へ転ずる」ことで行動に移したというのである。

そのような意識上の覚醒には、「祖国の民生」〔引用者註：民生は中国語で、民衆の生活という意味である〕に対する強い感情が見られる。小田は、「幻燈事件」に由来する強い感情を弱国人〔精神が遅れている祖国の民衆〕に対する急激な「愛」の変化であるとし、主人公魯迅の主体的態度や感情を印象深く表現した。「新人生開拓」の「少年の夢」が減びることによって、魯迅の少年期が終わった。「灼熱の情」や「青春の血」は魯迅が青年期の「愛」を迎えていることを意味している。

小田の描写から、魯迅の「愛」の情の発露と、情による急激な情動が見られる。小田の魯迅像は、弱者たちに直面し、心から湧き上がった「愛」の情により、「もうじっとしていられなくなった」という状態で、文学に従事する最初から政治的情勢と戦う「愛国者」の姿である。注意しなければならないのは、「愛」の発生は「幻燈事件」による偶然のことに過ぎないという点である。

小田は「藤野先生」を通して、『魯迅伝』で「愛」の情を描いた。それに反して、竹内好の視点では、作家魯迅の精神や本質と彼の作品とは対等な関係ではない。その考えに基づいて、竹内は「幻燈事件」の「伝説化」に抗議し、小田と異なる愛の発生を次のように『魯迅』の「思想の形成」の章で書いている。

魯迅が、仙台の医学校で、日露戦争の幻を見て志を文学に立てたといふ話は、（中略）彼の伝記の伝説化された一例であって、私はその真実性に疑いを抱く。そんなものでは恐らくあるまいと思ふ。（中略）

彼が仙台を立去る動機になったものは、幻燈事件だけではない。（中略）彼は幻燈の画面に、同胞のみじめさを見ただけでなく、そのみじめさにおいて彼自身をも見たのである。（中略）彼は、同胞の精神的貧困を文学で救済するなどといふ景気のいい失望を抱いて仙台を去ったのではない。恐らく屈辱を嚙むやうにして彼は仙台を後にしたと私は思ふ。（中略）同胞を憐む傍ら文学を考へたのではない。同胞を憐むことが、彼の孤独感につながる一つの道標となったまでである²¹。

竹内好は「幻燈事件」の真実性に疑問を持つが、「幻燈事件」そのものの存在を認めな

²⁰ 小田嶽夫『魯迅伝』（前掲）、42頁、43頁。

²¹ 竹内好『魯迅』、日本評論社（前掲）、65—71頁。

いわけではない。丸山昇の研究によれば、それは魯迅の文章と魯迅の体験の間に距離があるという方法論上の主張である²²。竹内が小田のように、「魯迅が文学を志した動機」を「幻燈事件」のみと見なさず、魯迅自身の体験した屈辱も考慮に加えたということである。竹内にとって、「藤野先生」は、被害者の場面を見た傍観者たちの精神的貧困を書く文章ではない。「藤野先生」は、追憶文として、魯迅自らの体験した屈辱の記憶を昇華した文章ではないかと思われる。

竹内好が考える魯迅の屈辱感、以下のようなものであろう。魯迅は苦しい運命を耐え忍ぶ長い過程（「幻燈事件」以前から文学の発生（「狂人日記」）まで）で、為政者・権力者から繰り返し屈辱を受けることによって、相当数の心の傷を付けられた。続いて、相当数の心の傷は次第に魯迅の心に沈殿して「弱者」の記憶となった。例として、「狂人日記」が発表された前の魯迅の北京生活の時代（魯迅が為政者・権力者によって排斥され、古書に没頭するしかなかったとき、即ち「回心」が発生する時代）が挙げられる。

そして、沈殿した魯迅自らの悲しむ（弱者の）記憶と、目撃した他人（弱国人たち）の現実との結合による「愛」の発生に基づく文学の動機こそ、竹内好が考える魯迅文学であろう。竹内は、「同胞を憐むことが、彼の孤独感につながる一つの道標となったまでである」と述べている。つまり、魯迅にとって「幻燈事件」は自分を見つめる一つのきっかけに過ぎず、同胞への憐れみがどこから生じてくるのか、十分に自己認識ができなかった。ゆえに、自らの内心から沸き起こる弱者への憐れみも十分にではなかった。従って、魯迅文学の発生は「幻燈事件」当時ではなく、後の時代に至ったというのである。竹内は「幻燈事件」に対する再分析により、魯迅のテキストに設定された急激な変化の「枠組み」を乗り越えようとする。「幻燈事件」は、魯迅の屈辱感を生み出す一つの「場」として捉えられた。医学から文学へという魯迅の変化は、「幻燈事件」による偶然の行為ではないのである。

同じ「藤野先生」のテキストに直面した際、小田は作品の主人公「我」が魯迅本人であると信じるが、竹内好は「藤野先生」をフィクションと見なし、作品の主人公「我」と作者魯迅と区別している。竹内は大胆に魯迅の作品を疑い、魯迅の心理的な世界にアプローチし、魯迅の心の底に潜んだ個人的な孤独感（屈辱の記憶）を探し出し、それによって読者の目の前に、独自の魯迅像を立てようとする。竹内は確かに先見の明がある。後の魯迅テキストに対する研究によって、魯迅本人の体験と一致しない魯迅の言葉が幾つも発見された²³。「藤野先生」の主人公「我」は果たして魯迅本人と同じであるかどうかは確かに問題である。さらに、筆者が小田と竹内の異同を挙げることには両者の比較を通して、小田の「愛」と竹内の「愛」との相違を探求する考えも含まれる。

小田に捉えられた魯迅文学は、相手（弱い他者）に対する強い感情に結びついた「愛」の体験に由来する。その体験を遡ると、「愛国者」魯迅は「幻燈事件」によって先に覚醒し、先覚者になった後、「彼ら」（覚醒していない弱者）の精神を憐れみつつ、心が傷つ

²² 丸山昇「日本における魯迅」（前掲）、440頁。

²³ 仙台における魯迅の記録を調べる会『仙台における魯迅の記録』、平凡社、1978年、87—257頁。

けられ、弱者を憐憫しようとする「愛」の情を生み出し、文学に従事した。そのようにして、先覚者魯迅と落伍者の同胞とが区別されている。

「愛」の主体としての先覚者（魯迅）と「愛」の対象としての落伍者（同胞）との関係は、教える者と教えられる者の関係である。小田の原文で言うと、「彼らの精神の革新！」である。つまり、「愛国者」魯迅の「愛」は文学の手段を通して、相手の精神の進歩という目的を完成しようとする愛である。その意義から言えば、小田の「愛」は功利的な愛であろう。

一方、竹内好は「幻燈事件」の問題について小田と対峙し、自らの「愛」を描き出そうとする。竹内が捉えた魯迅文学の「愛」は、共通な体験による共感の愛であろう。その体験に遡ると、「同胞の苦痛を見ながら、自分の体験した屈辱感が動く」ということである。つまり、「愛」の主体としての魯迅と「愛」の対象としての同胞は共に弱者の立場に立っている。当時の竹内はそのような「愛」を次のように述べている。

彼らは、子供をあやすように支那人を憐憫し得たと信ずるかもしれない。これほど支那人にとっても迷惑なことはない。憐憫さるべきは、一人の支那人を愛し一人の支那人を憎み得ぬ彼ら自身の精神の貧しさなのである。（中略）僕は支那人を愛さなければならないとは信じない。だが僕は、ある支那人たちを愛する。それは、彼らが支那人であるからでなく、彼らが僕と同じ悲しみを常住心にまとっているからである²⁴。

「愛」の主体と「愛」の対象との関係は、教える者と教えられる者（大人と子供）の関係ではない。両者は共同の運命（弱者）を持っている。文学の「愛」は共通な弱者の体験による共通の悲しみから生まれた弱者の間の愛である。相手の精神の進歩を完成するための手段ではない竹内の「愛」は非功利的な愛の心情であろう。

以上、「幻燈事件」をめぐる論争を通して、竹内好は小田の魯迅像における「愛」と格闘し、自らの「愛」の理解を文学者魯迅像の中に定着させていったことが分かる。

第三項：小田の指導者意識から竹内好の罪の意識へ

『魯迅伝』では、第五章「呐喊」において、「真の「愛国」の情」が再び登場する。小田は魯迅の文章「呐喊・自序」・「狂人日記」などの解説に基づき、次のように「真の「愛国」の情」を描き出した。

民国六年夏、魯迅の旧友錢玄同が魯迅を紹興會館の寓居に訪れ、「新青年」に小説執筆をすすめた。（中略）翌年魯迅は魯迅という筆名を使い最初の短編小説「狂人日記」を書いた。（中略）

これをきっかけとして魯迅は次々に小説を書きつづけ、同時に随筆をもさかんに書き出したが、忘れてはならないのは魯迅はあくまでも支那人性改革ということにその

²⁴ 竹内好「支那と中国」『竹内好全集』第14巻、筑摩書房、1981年、172頁。（初出は『中国文学』第64号、1940年7月）。

執筆の根本目標を置いていたことである。（中略）

魯迅は先にも言ったように作家として、随って人間としても冷徹なリアリストであった。そしてその創作上に於けるリアリズムは概して個々の人間によりは全体としての支那人に向けられていた。（中略）一方彼は常に冷徹な現実家であると同時に、その現実に徹することによって起る改革的情熱に燃やされている意味でははげしい主情家でもあり、かくして彼は透徹した瞳と紅い血液の溢れた心臓との同時的所有者であり、そこに冷たい暖かさ、暖かい冷たさというような一種独特な感触が生成せられる²⁵。

『呐喊』は魯迅の代表的な作品集である。その「序」で、これを著した契機は錢玄同の訪問であったと説いている²⁶。その訪問によって、『呐喊』を書く魯迅の動機は、覚醒した魯迅が頹廢的民族性を持っている旧中国人を呼び起こすという目的であったことが分かる。小田はそれを信じ、事実として『魯迅伝』で書き、さらに、それに基づいて魯迅の作品群を解釈している。

小田による魯迅作品の共通のテーマは、「支那人性改革」という執筆の根本目標である。「支那人性」は個人の人間性ではなく、小田の言葉によると、「全体の支那人」であり、当時中国人の全体の特徴（国民性）を意味する。「改革」の目的意識から出発する魯迅は文学を「支那人性改革」の手段として使う。つまり、魯迅は先覚者のみならず、文学の手段を持っている「改革」の指導者となった。

その魯迅の姿は「主情家」と小田によって名付けられた。「愛国者」魯迅は「支那人性改革」の行動を行いつつ、「真の「愛国」の情」も伴っている。小田の言葉によると、その情は改革的情熱に燃やされている「冷たい暖かさ、暖かい冷たさというような一種独特な感触」というように描かれ、頹廢的な国民性と逆方向のものである。そして、「支那人性改革」の指導者としての「愛国者」魯迅像の総体的な描写は、『魯迅伝』で次のように述べられている。

又魯迅があくまで西欧の科学文明に傾倒したということは、当時の支那にあっては必要なことだったのであろうが、この傾向は事変以後に於ても支那の青年の心に強く根を張っていることと思われるし、このことはこれの是非を論ずる前にわれわれが東亜の問題のことを考える上に牢記しなければならないばかりでなく、今日支那文化の過去、現在、未来を考える上の一つの基軸のようにも思われる。²⁷

総体的に言って、鋭くもあるがやさしくもある、雄々しくはあるが可憐でさえもある、一脈東洋的悠揚さを具えた深く、美しい風貌である。そういう顔—私は彼の文章を思い、その顔を思うたびにいつもその文章と顔の間に寸分の間隙もないことを覚える。つまり私にはその文章を思うことは顔を思うこととなり顔を思うことは文章を思

²⁵ 小田嶽夫『魯迅伝』（前掲）、76—86頁

²⁶ 魯迅「呐喊」『魯迅全集』第1巻、光明日報出版社、2012年、7—8頁を参照。

²⁷ 小田嶽夫『魯迅伝』（前掲）、191頁。

うことになるのである²⁸。

実際には、小田は一度も魯迅に会ったことがなかった。それにもかかわらず、彼は文学者の気質と円熟の筆致で、西欧文明に傾倒する「愛国者」魯迅の想像上の日常生活の総体的風貌に思いを馳せた。結局、『魯迅伝』で西欧文明に傾倒する魯迅像は「鋭くもあるがやさしくもある、雄々しくはあるが可憐でさえもある、一脈東洋的悠揚さ」という二重の「東洋的悠揚さ」とまとめられている。そして、その「東洋的悠揚さ」は魯迅の作品の総体と同じもの（「寸分の間隙もない」）と小田は語っている。

小田は、まず「支那人性」を暗い印象に位置付ける。次に、いわゆる「支那人性改革」は全て暗い印象の中国の内部から自発的に生み出した改革ではなく、外部の要素「西欧の科学文明」（明るい印象）からの積極的な吸収を手段として行うことである。

小田の「愛国者」魯迅像には、夢——覚醒——改革の指導者という変化の過程が織り込まれている。「愛国者」魯迅が覚醒し、そして中国の民衆の外（西欧）から理想的なものをもって、無葛藤に中国の落後した民衆まで改革を進めるということである。先進の西欧文明を吸収し、時代遅れの中国を改革するこのような指導者意識は功利的なものではないかと考えられる。

小田が「呐喊・自序」を信じ、功利的な改革の指導者の「愛国者」魯迅像を描いたことに対して、竹内好は納得しなかった。『魯迅』の「思想の形成」・「作品について」・「序章」では、次のように述べられている。

いったい魯迅は文章で自己を談る場合、追憶の形を取ることが多いのは、前にも述べたことであるが（中略）それだけ虚構の多いものと私は見てゐる。金心異が訪れたので「狂人日記」が生まれたといふことになってゐるが、恐らくそれはそのまま事実ではあるまい²⁹。

「狂人日記」が近代文学の道を開いたのは、それによって口語が自由になったのでも、作品世界が可能になったのでもなく、まして封建思想の破潰に意味があるのでもない³⁰。

彼は先覚者ではない。彼は一度も、新時代に対して方向を示さなかった。（中略）魯迅のやり方は、かうである。彼は、退きもしないし、追従もしない。まづ自己を新時代に対決せしめ、「掙扎」によって自己を洗ひ、洗はれた自己を再びその中から引出すのである。この態度は、一個の強靱な生活者の印象を與へる。魯迅ほど強靱な生活者は、恐らく日本では求められぬかもしれぬ³¹。

²⁸ 小田嶽夫『魯迅伝』（前掲）、20頁。

²⁹ 竹内好『魯迅』、日本評論社（前掲）、61頁、62頁。

³⁰ 竹内好『魯迅』、日本評論社（前掲）、99頁。

³¹ 竹内好『魯迅』、日本評論社（前掲）、10頁。

竹内好は「呐喊・自序」を「追憶」と見なし、中には「虚構」の部分が存在していると判断した。それに基づいて、「狂人日記」における「封建思想の破摧」の意味を否定している。『呐喊』が書かれたのは金心異（錢玄同）事件の後のことであり、「追憶」の影響が確かに存在している。したがって、竹内の疑いには道理がある。

小田の「指導者魯迅」と逆に、竹内好は魯迅を「先覚者ではない」と判断した。いわゆる「先覚者ではない」とは魯迅自身も中国改革の方向を模索していることを意味する。つまり、魯迅は終始一貫、「路は漫漫として其れ修遠」「吾まさに上下して求め索めむ」といった姿で現れる。続いて、竹内はその姿を中国的な「掙扎」と解釈し、生活者魯迅と名付けた。

注意すべき点は、「掙扎」という態度を日本では探し出すことができない、というところにある。魯迅は竹内により、日本で存在しない「中国人」として描かれ、『魯迅』の「結語」で「現代支那の国民文化の母」と呼ばれた。つまり、竹内によって書かれた魯迅像は全て中国の内部で独自に前進の方向を探し、中国の内部から自発的に中国を改革しようとする姿であろう。その姿には、支那の内部から生み出した自己否定が見られる。結局、竹内は小田の魯迅像と格闘し、『魯迅』で、罪の意識を以下のように述べている。

その根底的な自覚を得たことが、彼を文学者たらしめてあるので、それなくしては、民族主義者魯迅、愛国者魯迅も、畢竟言葉である。魯迅を贖罪の文学と呼ぶ体系の上に立って、私は私の抗議を発するのである³²。

私は、魯迅の文学をある本源的な自覚、適当な言葉を缺くが強ひて云へば、宗教的な罪の意識に近いものの上に置かうとする立場に立ってゐる。（中略）この「宗教的」といふ言葉は曖昧だが、魯迅がエトスの形で把へてゐたものは無宗教的であるが、むしろ反宗教的でさへあるが、その把持の仕方は宗教的であった、といふ風の意味である³³。

ここでの「宗教的な罪」は「把へてゐるもの」ではなく、やり方（把持の仕方）を意味する。その点に関しては、伊藤虎丸の解釈によって、キリスト教の「贖罪」を比喩的に用いたことがわかる³⁴。歴史的に見れば、確かに罪の意識はキリスト教に遡ることができる。伊藤は次のように説明している。

聖書の宗教における法律的、道徳的な罪と区別される宗教的な「罪」は、既成の教団や教義の象徴とされてしまった「神」（それはもはや一つの偶像でしかない）への反抗にあるのではなく、むしろ反抗の放棄にある³⁵。

³² 竹内好『魯迅』、日本評論社（前掲）、72頁。

³³ 竹内好『魯迅』、日本評論社（前掲）、5頁。

³⁴ 伊藤虎丸「『魯迅と終末論』再説—『竹内魯迅』と一九三〇年代思想の今日的意義」（前掲）、23頁。

³⁵ 伊藤虎丸「魯迅思想の独異性とキリスト教」『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』

周知の通り、キリスト教には、「原罪」（生まれつきの罪）という言葉がある。「原罪」のため、聖なる絶対者の前には、すべての人間は汚れている。絶対者の神と普通の人の間に存在する偶像（カリスマな指導者）にならないということは、神を信じる人間の自覚である。人はその自覚によって、誇りがくじかれ、自己を否定する。心による以上のような生まれ変わりは、人間としての魯迅の新しい生き方の契機になった。

小田が表現したカリスマ指導者の像は、民衆のために西欧の先進文明（教義）を一方向的に導入する場合、何がいいか、何が悪いかわからないという価値判断を民衆に無理に押し付けて民衆の絶対自由を束縛する。その点を意識した竹内好の魯迅像は功利的な指導者意識を避け、中国の民衆とともに中国の内部で改革の方向を模索する。目標がわからないという「改革者」の姿は無論、非功利的な姿であろう。

総じて、小田に描かれた、西欧文明に傾倒し、伝統的な旧中国を徹底的に破壊しようとする指導者の姿は功利的な姿である。一方、竹内好に描かれた、旧中国の土壌を重視し、弱者の中国の民衆に伴い、共に成長し、方向を模索しつつ、前に進む「改革者」の姿（罪の意識）は非功利的な姿である。以上のように、旧中国の「改革」を巡って、竹内は小田の魯迅像における功利的な指導者の意識を退け、罪の意識を持った非功利的な魯迅の姿を『魯迅』の中で表現していったのである。

第三節：日本に対する批判

魯迅像の描写をめぐる小田の功利的な立場と、竹内好の非功利的な立場は、互いに関わることはなかった。魯迅は「拿来主義」を書き、外部からいいものを直接に取り入れる功利的な思想を表した³⁶。魯迅の翻訳の実践のみを見ても、外部から優れたものを導入することに関して、彼ほど積極的であった知識人はいないことが分かる。一方、『野草』の「墓碑銘」で「浩歌熱狂の際、寒に中り、天上に深淵を見、一切眼中に無所有を見、希望なき所に救を得」³⁷と書かれているように、魯迅は外部から何かを導入することのみを通して、中国を救うことができるということも信じていなかった。つまり、「十九世紀の文明は改革によってはじまり、反抗を根本とするものである以上、一極に偏向するのは、理の当然のなりゆきであった。それが末流ともなると、弊害もはっきりしてくる。（中略）外は世界の思潮におくれず、内は固有の伝統を失わず、今を取り古えを復興してあらたに新学派をたて、人性の意義をいっそう深遠なものとするれば、国民は覚醒し、個性は充実し、砂の集まった国は転じて人間の国となる」³⁸のようであり、即ち、外部の世界に傾倒する（指導者）と同時に、内部の土壌も重視し、民衆とともに模索するという考え方なのである。さらに、小田と竹内が各々、魯迅の一つの側面を捉えた由来には日本批判の動機の相違を無視できないと筆者は考える。

49号、1988年、78頁。

³⁶ 魯迅「拿来主義」『魯迅全集』第6巻、人民文学出版社、2005年、41頁。

³⁷ 魯迅、竹内好訳「墓碑銘」『魯迅全集』第2巻、筑摩書房、1976年、49頁。

³⁸ 魯迅、伊東昭雄訳「文化偏至論」『魯迅全集』第1巻、学習研究社、1984年、83頁、84頁。

小田の魯迅像において肝要な「真の「愛国」の情」の「真」は、当時の日本の政治状況における愛国の情の「偽」に対する批判であろう。戦時中に青柳優は『魯迅伝』の中に「寓意」の存在を見出した。青柳優の「寓意」の解釈について、松本和也は「『小田嶽夫氏の魯迅に対する愛惜感の美しさ』に『現代日本のある状態』を類比的に見出している」と述べている。青柳の「寓意」の解釈に基づいて、松本は自らの「寓意」の解釈を「魯迅／中国を鏡として映し出される同時代の日本（の政治状況）に差し向けられた」と提唱している³⁹。ただし、松本の論文では「同時代の日本の政治状況」を具体的に説明していない。では、当時の日本の政治状況はどのようなものであったのか。

日中戦争期、日本の軍部は無軌道な横暴を極め、すべての言論を戦争に奉仕するために統一させていた。1938年当時、日本の近衛（文麿）内閣は中国との全面戦争を展開するために、総力戦体制に入る必要があると判断し、「国家総動員法」を制定した。その中の第20条には「政府ハ戦時ニ際シ国家総動員上必要アルトキハ勅令ノ定ムル所ニ依リ新聞紙其ノ他ノ出版物ノ掲載ニ付制限又ハ禁止ヲ為スコトヲ得」⁴⁰とある。さらに、1940年に近衛文麿は再び首相になり、大政翼賛会という官製国民統合団体を結成させ、大政翼賛運動を推進し、すべての政党を解散し、全国の戦争動員を行った。その状況で、1941年1月に「国家総動員法」に基づいた、戦争総動員の勅令の「新聞紙等掲載制限令」⁴¹が日本全国で施行された。その時から「国家総動員法」の第20条が正式に発動された。

つまり、当時の日本政府は戦争のために国民に愛国心の涵養を要求し、「国家」による国民の同一化の理念で、出版物法の改革による戦争動員をしていた。政府が対外戦争と国内改革を関連させ、民衆の愛国の心（情）を誘起する以上の考えである。

戦争動員の言説では、相手の中国人は常に「時代遅れ」や「野暮」などのレッテルを貼られていた。それは文明の日本が時代遅れの中国を侵略する戦争動員のロジックに「合理的」な理由を与えようとする目的を持っている。結局、戦争から生み出された日本への誇りが溢れていて、戦争動員という偽の愛国の情になった。当時、内藤湖南の「中国の中毒説」や和辻哲郎の「頹廢的な大陸文化」⁴²など、戦争動員に融合されやすい研究が頻繁に出てきた。

小田は戦争動員の雰囲気の中で、政府の宣伝によって生まれ、戦争に対する民衆の偽の愛国の情に対し、「心破る」を感じ、「憂慮」の気持ちを抱いた。当時小田は作品集で次のように書いた。

書中に収めた文章のうち幾つかは日支の間に事変の発生するに至らんことをひそかに憂慮し乍ら書いた。又幾つかは号外の鈴の音、出征兵士歓送の軍歌を耳にし乍ら綴った。又この一文を草してゐる今は友人青柳瑞穂君の応召入隊を見送り返った直後である。（中略）支那の土に今皇軍が流してゐる血を思へば、それらの果敢なる将士の

³⁹ 松本和也「小田嶽夫『魯迅伝』の形成と変容（1940—1966）」（前掲）、97頁。

⁴⁰ 『官報』第3371号、1938年4月1日。

⁴¹ 『官報』第4202号、1941年1月11日。

⁴² 内藤湖南の「日本の天職と学者」（『近代文学史論』）や和辻哲郎の『風土』を参照。

ために心破るる思ひすると共に、無量の感慨の心中を去来するのを禁じがたい⁴³。

そして、文士小田は文学を武器（手段）として、そのような政治的状況と戦った。1930年にわずか30才で外務省の仕事を辞め、文学に専心して、文学を「道」とする生活を始めた。満州事変・日中戦争が勃発した後、日本の政府は小田の文学を規制しつつあった。政府に対する当時の小田の革命的抵抗は、井伏鱒二によって考察されている⁴⁴。つまり、文学組織を作り、政府に抵抗していたという事実である。その過程の中で、小田の素朴な人格（文学の力を信じること）が次第に形成しつつあった。小田は文学の力を信じ、文学をもって政治的状況と功利的に戦うことができると確信している。

そのような小田の人格は小田の魯迅像に投影されているであろう。文学を以て中国を功利的に改革しようとする魯迅の風貌は、対中戦争の偽の愛国の情に抵抗している。文明の日本が時代遅れの中国を侵略する戦争の前提を避けるためには、まず文学で時代遅れの中国を文明化させる必要がある。そのために、西欧の先進文明に傾倒し、文学の力を信じる指導者の魯迅像を描かなければならないと小田は考えたのである。『魯迅伝』における功利的な立場は、当時の日本の「文明対時代遅れ」のロジックに対する不満や批判を表すという創作の動機と文学の力を信じる小田の素朴な人格に由来するであろう。

同時代（日中戦争期）の『魯迅』における竹内好の文学者魯迅像にも戦争動員に対する日本批判の傾向が見られる。ただし、二人が直面した「戦争」は本質的に異なる。小田が直面したのは文明の日本が時代遅れの中国を侵略する単純な日中戦争である。竹内が直面したのは大東亜戦争であり、文明化された日本が落後した中国を指導して大東亜共栄圏を建設し、西欧と戦う戦争である。したがって、竹内が直面した日本批判の任務には当時の指導者意識に対する批判も含まれている。戦後、竹内は『魯迅』で次のように「註」を付けた。

当時、中国の文学は（中略）日本軍占領下の諸都市の協力者文学とがあり、（中略）それは伝統と無縁であり、正統の文学でないと私は考えた。しかし、それを主張することは憚られたし、それを論証するだけ十分な自由中国の作品を手に入れることもできなかった。その鬱屈した気持を魯迅研究に託してここに吐いたのである⁴⁵。

「魯迅研究に託して」という竹内好の言葉から、イデオロギーの指導者意識を批判する日本批判の意義が見られるのであろう。なおかつ、以前より悪化した政治的状況と戦う過程の中で、竹内好は絶望し、困惑し、「混沌」や「無力」などの言葉を頻繁に当時自らの日記の中で書いた⁴⁶。竹内は次第に物事を疑いながら捉える人格を形成しつつあった。そして、竹内は自らの人格を『魯迅』に投影し、文学の力を信じない魯迅像を描いたのであ

⁴³ 小田嶽夫『支那人・文化・風景』、竹村書房、1937年、4頁。

⁴⁴ 井伏鱒二「小田君についての点描」、小田三月『小田嶽夫著作目録』、青英舎、1985年、3頁。

⁴⁵ 竹内好『魯迅』、未来社（前掲）、178頁。

⁴⁶ 竹内好「北京日記」『竹内好全集』第15巻、筑摩書房、1981年、249—303頁。

る。

戦時中の竹内好は「大東亜戦争と吾等の決意」⁴⁷という文章も書いたが、実は当時の暗黒の政治的背景の下で、彼の苦悶の心が戦争を支持するか戦争に反対するかの両面で揺れ動いていた。そして、『魯迅』は心が揺れ動いていたとき、大東亜戦争に抵抗するものとして書かれたのである。『魯迅』の書かれた経緯について、丸山昇の以下の分析がさらに鮮明に表している。

一九四一年一二月 文学者愛国大会開催、全国文学者の統一体結成を決議。（中略）

四二年五月 文学者愛国大会の決議にもとづき、日本文学報国会創立。

九一一〇月 「近代の超克」座談会。

一一月 大東亜文学者大会

四三年三月 大日本言論報国会創立。谷崎「細雪」の連載禁止。（中略）

八月 大東亜文学者決戦大会開催。

すなわち、ほとんどすべての文学が、戦争遂行の手段、日本人民の思想統一の手段として動員され、また文学者のなかにも、それに積極的に呼応する部分が現れて、国家のため戦争のための文学こそが、欧米近代文学に代るより高度な文学であるかのような「文学論」が唱えられていた時期に（中略）そのような文学のあり方に対する反発として、「また同じように押し流されそうになる自己への支えとして」竹内はこの本を書いた⁴⁸。

つまり、竹内好は大東亜戦争の戦争動員に押し流されないために、『魯迅』を書いた。大東亜戦争の最も顕著な特徴は日本を盟主とする大アジア主義であり、即ち日本が文明の優位である日本の指導者意識であり、文明の日本が落後した中国を指導することである。そのような指導者意識に抵抗するため、竹内は非功利的な魯迅像、つまり、文明に傾倒せず、暗黒な中国で「掙扎」する魯迅の姿を書こうとしたのである。

おわりに

以上、本章では戦前日本における『魯迅伝』と『魯迅』を分析して、小田の魯迅像と竹内好の魯迅像の相違を比較した。本章で明らかにしたのは第一に、魯迅のテキストに対する小田の解読方法と格闘した竹内の姿である。小田は魯迅の一部の作品（『藤野先生』など）を真実として信じるが、竹内は小田のその姿を「花鳥風月」と称し、それを批判した。

第二に、魯迅の作品に対する二人の解読方法が異なるために、二人が描いた魯迅像にも相違が見られる。文学観の相違、文学の「愛」の相違、「改革者」の相違という側面から魯迅像の差異を分析した。小田は功利的な立場に立ち、竹内好はそれと格闘し、非功利的な立場に立っていた。竹内は、小田の魯迅作品に対する解読の方法や功利的な立場との格

⁴⁷ 竹内好「大東亜戦争と吾等の決意」『竹内好全集』第14巻、筑摩書房、1981年、294—297頁（初出は『中国文学』第80号、1942年1月）。

⁴⁸ 丸山昇「日本における魯迅」（前掲）、444頁、445頁。

闘によって、自らの非功利的な立場を『魯迅』の中へ組み込んでいったのである。竹内好の非功利的な立場は文学を功利的な手段（武器）としては認めないが、それは文学者が弱者との共通の体験に基づき、弱者に伴い、共に成長する立場ではないかと筆者は考える。

第三に、分析によって、小田の文学の立場と竹内の文学の立場の相違は、両者の日本批判の差異（歴史的な任務）やそれぞれの人格の相違と関わっていることが明らかとなった。

竹内好の『魯迅』の形成過程において、小田の『魯迅伝』は重要な役割を果たしていた。竹内は、小田の『魯迅伝』と対峙し、格闘することによって、自らの魯迅像を構想したのである。

小田にとっての魯迅は中国の社会改革の象徴であり、魯迅の文学は社会改良の重要な手段であった。一方、竹内の魯迅像は、自己を掘り下げ、深い自己認識を基礎として自己確立を試みるものであった。竹内にとって、そうした人間の行為、過程こそが目的であり、「文学」そのものであったのである。

第三章：日本の戦争システム下の文学者の交流 —竹内好の魯迅像と武田泰淳の司馬遷像を例として—

はじめに

武田泰淳（1912—1976）と竹内好は1940年代初期に交流し、それぞれ『司馬遷』と『魯迅』を執筆・出版した。日本の戦争という状況下での産物とも言える『司馬遷』と『魯迅』は、時代の環境に由来する影響を深く受けている。執筆時に二人が頻繁に交流した事実を踏まえるならば、『魯迅』における竹内好の文学理解と『司馬遷』における司馬遷像は親和的な関係を持っている可能性がある。例えば、武田と竹内が構想した人物像は、司馬遷像でも魯迅像でも、時の為政者と果敢に対立しつつも、その為政者を倒すことができず、力不足を感じて、絶望を抱えて歩いていくという特徴を持っている。このような特徴的イメージは作者である武田と竹内の自画像でもあると言えよう。戦時下において、武田と竹内は共に、日本の政府からの圧迫に由来する、当時の日本の知識人の心に存在した「弾圧を受け、その苦しみに堪えなかった」¹状態を脱出しようと試み、作品の執筆に、その思いを託したのではなかろうか。

これまでの研究には、竹内好を単独で論じる竹内好論、あるいは武田泰淳のみを論じる武田泰淳論が多い。一方、武田と竹内の関係に関する研究は、主に二人が共に作った雑誌『中国文学月報』と『中国文学』、及び戦後の二人の関係に重点が置かれている。

高橋和巳は『中国文学月報』と『中国文学』における武田泰淳と竹内好の関わりを考察しながら、『魯迅』と『司馬遷』をそれぞれ分析し、ある仮説を立てた。その仮説は高橋の言葉によると、「竹内好の『文学者』は、武田泰淳の『司馬遷』における『政治的人間』に対応するものだが、世界のすべては変化するものと語る武田泰淳、変らない魯迅の姿を知りたいという竹内好は、表面上は対極的なまでに異なる二つの典型を追究するよう見えながら、最も確かな世界と人間の核を掴もうとする動機においては、殆どあい等しかったのだと私には思われる」²ということである。岡山麻子は雑誌『中国文学』における武田泰淳と竹内好の文章を分析し、竹内の「北京時代の実存的不安から展開した、現在の文化に対する不安」を発見した³。大原祐治も同様に『中国文学』の二人の文章を分析し、二人の研究上の「対立——盟友」の関係を指摘し、さらに「対立——盟友」における「対立」に対して、否定ではなく制動的な役割を果たしたということを指摘した。その後、大原は研究を進め、武田と竹内の「対立——盟友」の関係の形成期が、二人が共に雑誌『中

¹ 伊原沢周「抗日戦争期における日本人民の反戦運動」『東洋文化学科年報』第10号、1995年11月、40頁。

² 高橋和巳「自立の精神—竹内好における魯迅精神」『逸脱の論理』、河出文庫、1996年、73頁（初出は「竹内好—その魯迅精神」『思想の科学』第4巻第29号第30号、1961年5月6月）。

³ 岡山麻子「竹内好の文学精神—存在と文学」『年報日本史叢』1999年号、1999年12月、95頁。

国文学』を作った時期であったという結論に至った⁴。米谷匡史は武田泰淳と竹内好が雑誌『中国文学』を停刊させること、及び、二人が中国文学研究会を解散したことの意義に着目して、自己否定の竹内好像を提唱した⁵。以上の研究に基づいて、朱琳は雑誌『中国文学』に掲載された武田泰淳と竹内好の文章をさらに分析し、1930年代における武田と竹内の「体験」の「交錯」を発見した。朱琳が発見した「交錯」は、武田と竹内が弱者であるという体験を共有することだったと思われる⁶。

渡辺一民と丸川哲史は歴史的な視野から、概括的に戦前から戦後までの武田泰淳と竹内好の関わりの総体を紹介した。戦前と戦中における武田と竹内の交流の部分に関しては、渡辺はまず、1930年代と1940年代の時代の背景を述べ、その時代において、武田と竹内がどのように『中国文学月報』と『中国文学』で活動・執筆したのかについて考察した。次に、『司馬遷』を研究し、作品における戦争中の意義について言及しながら、作品における中国の「政治的人間」を重視し、『司馬遷』において書かれた『史記』の構造分析を行った。さらに、渡辺は武田の文章「影を売った男」における魯迅像を分析し、その上で『魯迅』における魯迅文学の根源を探るという竹内の努力を究明した⁷。戦前と戦中における武田と竹内の交流の部分に関して、丸川はまず、『中国文学月報』と『中国文学』における武田と竹内の関係について述べた。次に丸川は、『司馬遷』と『魯迅』が当時の思想界における対抗的文脈に存在していると判断した。そして「対抗的文脈」について、「危機の時代において『時の流れに詠嘆する』こと——これへの『抵抗』として『司馬遷』（あるいは竹内の『魯迅』）が書かれた」と解釈した。その上で、政治を重んじるという武田と竹内の書き方の特徴を分析し、「日中戦争という、海を越えて東アジアの地図上で戦われた戦争を契機として、日本に生きる知識人の歴史感覚に激しいインパクトを与えていた可能性があるはずだ。日本人の時空意識の再編を象徴するものとして、武田『司馬遷』が書かれたと言っても過言ではない」と指摘した⁸。

ここに挙げた先行研究は、終戦までの武田泰淳と竹内好の交流に関して、1930年代の二人の中国研究、あるいは中国体験に由来する結果を重視している。一方、武田と竹内は1940年代に日本の戦争動員の気運の下で『魯迅』と『司馬遷』を執筆していた時、二人は共に、日本の当時の政治的情勢をも考えていた。日本の政治的情勢に由来する武田と竹内の交流は、『魯迅』と『司馬遷』の中にどのように反映されているのであろうか。本章は生涯を貫く二人の付き合いを踏まえて、『司馬遷』と『魯迅』を分析し、戦争という政治的情勢に対するどのような思いが作品に託されたのかということ、これまでの研究より、さら

⁴ 大原祐治「羅漢と仏像—雑誌『中国文学』における竹内好・武田泰淳」『昭和文学研究』第45号、2002年9月、77頁。大原祐治「北京の輩と兵隊—『中国文学月報』における竹内好・武田泰淳」『学習院大学人文科学論集』第11号、2002年10月、101—129頁。

⁵ 米谷匡史「日中戦争期の文化抗争—『帝国』のメディアと文化工作のネットワーク」『日本近代文学と戦争—「十五年戦争」期の文学を通じて』、三弥井書店、2012年、181—218頁。

⁶ 朱琳「二人の『弱者』の交錯—1930年代における竹内好・武田泰淳の中国体験を中心に」『国際文化研究』第21号、2015年3月、113—127頁。

⁷ 渡辺一民『武田泰淳と竹内好—近代日本にとっての中国』、みすず書房、2010年、7—93頁。

⁸ 丸川哲史『竹内好—アジアとの出会い』、河出ブックス、2010年、77—101頁。

に深く検討したい。前述の朱琳の研究である 1930 年代の武田と竹内の交流の上に、本章では 1940 年代の武田と竹内の交流の進展を示したい。

第一節：武田泰淳と竹内好の付き合い

武田泰淳の『司馬遷』は、1943 年に日本評論社より出版された。同じ年に竹内好は、代表作『魯迅』を完成させ、1944 年に日本評論社から出版した。同じ 1940 年代初期という時間において、なぜ武田と竹内は司馬遷と魯迅について書かなければならなかったのか。彼らが作り上げた人物像はどのようなものであるのか。彼らが『魯迅』と『司馬遷』を執筆し、自分の中国像を構想した動機は何か。本節はまず、武田と竹内の関わりから分析していく。

『魯迅』と『司馬遷』が関連付けられる理由は、武田泰淳と竹内好の関係にある。武田と竹内は 1931 年、東京帝国大学文学部支那文学科に入学し、そこで初めて出会った⁹。その後、武田と竹内は 1934 年、共に中国文学研究会を作り、1935 年に雑誌『中国文学月報』を発行した。『中国文学月報』は後に『中国文学』に名を変えた。武田と竹内は『中国文学月報』と『中国文学』に多くの文章を掲載し、次第に盟友の関係になった。終戦まで、武田と竹内が長期間に亘って互いに協力し、二人の考え方の交流を認識し合った最も顕著な証拠は、『中国文学月報』と『中国文学』における文章と『司馬遷』、『魯迅』の執筆である。

1937 年、「盧溝橋事件」を契機に、日本と中国の間には全面戦争が起きた。それは東アジア全体の歴史を変えるものであった。1937 年から 1939 年にかけて、竹内好は北京へ留学し、北京が日本の軍隊によって占領された事実を目撃し、考え方に大きな変化が生じた。それは先行研究で「生命や存在の凝視を掘む精神の画期とすることが可能になった」¹⁰時期と称されている。ほぼ同じ時に、武田泰淳は日本軍の兵士として、1937 年に中国の上海に到着した。武田は日本軍が残した弾痕の多い壊れた壁や、腐敗した死体などを見て、「荒々しい感情の渦に巻きこまれていた」と感じた¹¹。その後、武田は 1939 年に軍隊を離れた。以下の朱琳の研究は、1937 年から 1939 年までの竹内と武田の中国体験が二人の間に共通する、自分が弱者である気持ちを意識したきっかけについて考察している。

竹内の「政治的」と武田の「文化的」は、一見対立的な立場であるが、実に裏に両者に通底するものであった。（中略）この一文は、表には竹内が認識した日中戦争は「弱いものをいじめ」的的行為であり、中国はこの戦争の被害者であったという意味を読み取れるが、裏には二人の現地体験によって生じた「弱者意識」が表現されている。ただし、二人の「弱者意識」には異なる内実が存在する。竹内の場合は、平穏な北京の空気を通して、戦争における権力という政治的な支配力の強さを自覚し、その支配

⁹ 鶴見俊輔『竹内好 ある方法の伝記』、岩波書店、2010 年、247 頁。

¹⁰ 岡山麻子「竹内好の「北京日記」—文学の解体と再生」『社会文化史学』第 44 号、2003 年、14 頁。

¹¹ 武田泰淳『武田泰淳全集』第 11 巻、筑摩書房、1971 年、240 頁。（初出は武田泰淳「支那文化に関する手紙」、『中国文学月報』第 58 号、1940 年 1 月）。

力の下で自分が求めていたジャーナリズムは中国と同じ被害者であったと彼は認識した。一方の武田の場合は、戦場で「強者」としての中国人を目撃した。彼の文章では、竹内のような中国に対する同情的な感情は看取できない。しかし、彼は現地で「百姓」の強靱さを体感することで自分の弱さを認識し、次第に現地を無視する中国研究の空虚さと脆弱さへと自覚が転換することとなった¹²。

同じ1937年から1939年にかけて、中国で共通する体験を得た後、武田泰淳と竹内好は共に1939年10月に東京へ戻り、1940年代初めから『司馬遷』と『魯迅』を書き始めた。武田は1939年から『司馬遷』を構想し、1943年の出版まで執筆を続けていた。竹内は1941年に日本評論社と『魯迅』の執筆を契約し、1943年まで『魯迅』を書き続けた。つまり、1940年代初めに武田と竹内が同じ時間の中で『司馬遷』と『魯迅』を構想あるいは執筆していた。この1940年代の初期に関して、丸山真男は次のように述べている。

帰京してから武田泰淳と再会し、何をしていたか分からなくなった、という気持ちを泰淳と共有し「俺の北京生活はそういうものの連続であった」（四〇・二・四）と回想していますね。しかもそこで「いわば虚しい仕事をしてみたいと思っている」といい切っている。戦後の好さんのめざましい活動はまさにこの「虚しい仕事」を覚悟したうえでの、その延長線上にあるのじゃないでしょうか¹³。

1940年代初期は、武田泰淳と竹内好が中国体験に由来する「自分が弱者である」という感覚を共に持って、その延長線上の「何をしていたか分からなくなった」心情に立っている時点であった。

また、竹内好の「北京日記」を調べると、1939年から1940年代初期までは、武田泰淳と竹内好は同じ東京の目黒区に住んでおり、互いに交流し、頻繁に討論していた¹⁴。『司馬遷』と『魯迅』が執筆された当時、武田と竹内は、文学理解に関する特別な交流を続けていたのである。その点に関しては、竹内の長女竹内裕子のエッセーでも証明されている。筆者は京都の「竹内好を読む会」へ頻繁に参加するなかで、竹内裕子に会って対話する機会を得て、竹内好に関する知識を数多く得ることができた。そして、竹内裕子が執筆した「武田さんと父の四十年」（2016年7月）および「丸山さんと二十年の対話を」（2016年8月）、さらに「目黒に通う」（2018年5月）という最近のエッセーを入手した。竹内裕子のこれらのエッセーはごく最近書かれた文章であるので、これまでの研究では触れられていない。したがって、本節においては、竹内裕子のエッセーを参照しながら、竹内好と武田泰淳の具体的な交流の様子を明らかにしていきたい。竹内裕子は以下のように述べている。

¹² 朱琳「二人の『弱者』の交錯—1930年代における竹内好・武田泰淳の中国体験を中心に」（前掲）、123頁。

¹³ 丸山真男「竹内日記を読む」『丸山真男集』第12巻、岩波書店、1996年、32頁。（初出は丸山真男「丸山真男氏に聞く聞き手編集部」『ちくま』第138号、1982年9月）。

¹⁴ 竹内好「北京日記」『竹内好全集』第15巻、筑摩書房、1981年、387—388頁。

戦争が悪化する中、父は目黒区の祐天寺の借家と、同じ目黒の武田さんのお寺長泉院を、毎日のように往復して武田さんと話し込んだ。ついに父にも召集令状が届く。『魯迅』を書きあげ一か月後、父は日本陸軍二等兵として中国へ出兵した。日記にはこの往復を「目黒村の不安」と呼び合っていたことが記されている¹⁵。

「何をしていたか分からなくなった」という心情を共有していた武田泰淳と竹内好が頻繁に行き来する様子は、ここで「目黒村の不安」と呼ばれている。竹内好の「北京日記」によると、「目黒村の不安」は戦争の状況下の「文化の基礎がゆらぐ気持ち」であり、また「何をしていたか分からなくなった」¹⁶気持ちであることを指す。では、武田泰淳と竹内好がこの時期、頻繁に、そして深く討論した話題の焦点は何か。竹内は『中国文学』で「この一年間の話題の中心は主に世界史一脈と司馬遷であった」¹⁷と書いている。つまり、この時期、世界の歴史以外に彼らが頻繁に討論したのは『司馬遷』という作品における考え方であったのではないか。この時期の討論を通し、『司馬遷』と『魯迅』は同じ1943年に同じ東京の目黒区という場所で完成した。その点に関して、竹内裕子は次のように書いている。

さあ、明日もまた、あきらめず目黒に通おう。かつて武田さんや父が住んでいた「目黒村」。』毎日のように往復し、ここで武田さんは『司馬遷』を父は『魯迅』を書いた。道の途中には尾崎秀実さんの家もあった。その地下を通る電車に乗って¹⁸。

戦中に出版され、戦後に強い影響を日本に与えた『魯迅』と『司馬遷』は、竹内好と武田泰淳の代表作であると言える。『魯迅』は戦後、竹内の文学思想の出発点となった。また、『司馬遷』の1952年の第三版の序の中で、武田は『司馬遷』が自分の著作において最も高く評価された本であると述べている。1959年の『司馬遷』の文芸春秋新社版の序の中で、武田は『司馬遷』が自分の思想の出発点であると明確に記した¹⁹。

第二次世界大戦が終戦した後、武田泰淳と竹内好は引き続き親友の関係を保ち、それは1976年10月5日に武田が亡くなった時まで続いた。武田と竹内は20歳前後から逝去まで中国と日本の双方に関連する同じ学問の陣営に属していた。二人は生涯を通して特別な関係を維持した。その点に関して、竹内裕子のエッセーでは、次のように竹内の性格を踏まえて、表現されている。

父は寡黙で通っている。実際何日でもしゃべらないことは珍しくない。客が来てもそれを平気で通した。これに耐えられるひとはわずかだ。鶴見俊輔さんくらいかもしれない。来訪の続くころがあった。向き合って座りながら、鶴見さんも父も一日中、

¹⁵ 竹内裕子「武田さんと父の四十年」『かまくら春秋』第555号、2016年7月、34—35頁。

¹⁶ 竹内好「北京日記」（前掲）、387—388頁。

¹⁷ 竹内好「後記」『竹内好全集』第14巻、筑摩書房、1981年、445頁。（初出は「後記」『中国文学』第91号、1943年1月）。

¹⁸ 竹内裕子「目黒に通う」『はなかみ通信』第54通、2018年5月、17頁。

¹⁹ 武田泰淳『司馬遷 史記の世界』、講談社、1997年、9—10頁。

だんまりと無言。見事な沈黙の対座を続けていた²⁰。

このように、竹内好が娘に与えた印象は「寡黙」である。竹内好は普段の生活でも、さらに来客があったとしても、口を開くことが少なかった。そのような性格であった竹内好だが、武田泰淳と会う時だけは違った。竹内裕子は、竹内好と武田泰淳の関係を次のように示している。

丸山真男さんのいう「三大おしゃべり学者」（桑原武夫さん、久野収さんとご本人のこと）には、無言の中にも時々「うん」とか「そうかね」とか発声をしたから、これでも父は充分に対話をしている。これが父の常の印象だ。

それに比べ、武田さんと会っている時は父の方が饒舌だった。別人の観がある。ぼつぼつと答える武田さんにはしゃいで話しかける父は、まるで大好きな子のまわりをぐるぐる回る男の子のよう。武田さんはすまして父の好きなようにさせている。これは完全に父の片思いだなあと考えたものだ。しかし片思いが四十年も続くだろうか。武田さんは父のことをどう思っていたのだろうか。

上等の牛肉を抱えて、日曜の朝よく我が家にやってきた。「武田に寝込みを襲われる。」父の日記だ。日曜の朝からすき焼きが始まり、歯のない武田さんも食べられる霜降りの肉は口の中で蕩けた。すき焼きを仕切るのは父で、自分が食べるより武田さんに取り分けては「武田、食べる、食べる」としつこい。肉が段々積み重なっていくと、「どうした、泰淳。食べないのか」と案じる。まるで世話女房だ。こんな時、武田さんの妻の百合子さんは大抵知らん顔をしている²¹。

丸山真男は、竹内好と非常に親しい友人であった。竹内と丸山は戦後、二十年の対話を続けていた事実があるのみならず、生活面でも深く交わっていた。丸山が吉祥寺に引っ越した一年後、竹内好も近所に転居した。その転居は「偶然ではなかった」と竹内裕子は述べている²²。「三大おしゃべり学者」の一人であると自称する丸山に対して、竹内好は常に「うん」とか「そうかね」といった短い返事で対話を続けていた。

丸山と同様の親友である武田泰淳は、竹内好の交友関係の中で、特別な存在であった。竹内は武田の前で「饒舌」であった。また、「まるで大好きな子のまわりをぐるぐる回る男の子のよう」な様子や、二人が共に肉を食べる時の「世話女房」のような様子からは、武田を目の前にした竹内が、非常に活発な態度であったことがわかる。以上のことを通して、武田と竹内の親交の特別さが伺えるであろう。

二人が共に過ごした時間について、竹内裕子は以下のようにも述べている。

一九七六年十月五日未明 父は武田泰淳さんと永別した。二十代の初め大学で出会ってから四十年。臨終に間に合わなかった父は武田さんの傍に立ち尽くし、その手を

²⁰ 竹内裕子「武田さんと父の四十年」（前掲）、33頁。

²¹ 竹内裕子「武田さんと父の四十年」（前掲）、33—34頁。

²² 竹内裕子「丸山さんと二十年の対話を」『かまくら春秋』第556号、2016年8月、32頁。

ずっとさすっていたという。その日から五か月して父もまた彼岸に旅立った。あれから四十年が経つ。父たちの交友と別れてからの時が同じになった。わたしより倍近い時をふたりは共にしている²³。

武田泰淳が亡くなった1976年10月の五ヶ月後、竹内好も逝去した。武田の逝去まで、竹内好は武田と40年に亘る交友を続けていた。その交友の長さは竹内好が自分の長女と共に生活していた20年の時間を超え、二倍近くになる。武田と竹内の関係の親しさは肉親と比べても見劣りしないであろう。

総じて、戦前、戦中、及び戦後に、武田泰淳と竹内好は親しい関係を保ち、亡くなるまで続いた。武田泰淳が亡くなる2年前に、竹内好はエッセイ「交友四十年」を書き、武田の趣味を次のように書いている。

かれ（筆者注：武田泰淳）は無類の乗り物ずきである。無類というのは、われわれ仲間うち、つまり、旅心を捨てかね、旅心こそ日本文学のエッセンスだという旧来の陋習にとらわれている世代の間での無類ということである。それだけかれは新しいのかもしれない²⁴。

武田泰淳と竹内好の40年の親しい関係の中でも、1940年代の戦時下の関係、及びその結果である『司馬遷』と『魯迅』は、戦前と戦後における武田と竹内の結びつきを明らかにするために、特に重要な要素である。続けて、本論文は『司馬遷』と『魯迅』の具体的な内容の研究を通して、戦中の竹内と武田が互いに交流を深め、同じ方向に向かっていくことを究明したい。

第二節：竹内好の魯迅像

竹内好は北京留学を終え、文学と政治との関連の重要性を認識した後、『魯迅』という本を執筆することを目指し、彼の魯迅像を構想し始めた。この時、竹内の魯迅像が構想されたとともに、文学者と無慈悲な為政者の関係をめぐる彼の認識も次第にはっきりとしてきた。本節では、竹内の『魯迅』の中に見られる、無慈悲な為政者と文学者魯迅の関係を研究することを通して、彼の文学観をさらに明白にしたい。

『魯迅』において、魯迅は文学者であり、文学者魯迅は当時の中国を統治していた軍閥の政治家たちと対立している。その対立は以下のように書かれている。

「革命」とは当面の政治目標である。従ってそれは「抗戦」にも「救国」にも変りうるものである。あるひは「救国」にも「愛国」にも変りうるものである。それに対して、文学は無力だと魯迅は見た。少くとも、有力たらんとする文学は無力だと見た。

²³ 竹内裕子「武田さんと父の四十年」（前掲）、33頁。

²⁴ 竹内好「交友四十年」、武田百合子『犬が星見た ロシア旅行』の巻末特別エッセイ、中央公論新社、1982年、400頁。初出は『日本文学全集（豪華版）』第79巻「武田泰淳集」月報、集英社、1974年。

(中略)「革命」や「救国」に対して、文学は無力である。何故か。軍閥に対して無力な文学が、革命に対しても有力なはずがないからである。敵を殺しえない文学が、味方を助けうるはずはないからである。今日もし文学が「革命」に有力なら、それは「三一八」のとき段祺瑞に対しても有力でなければならなかった²⁵。

講演の中から私は挿話を二つだけ選ぶ。

その一つは、曹操に殺された孔融である。孔融はなぜ曹操に殺されたか。文学者孔融は政治家曹操を批判したのである。批判したことによって文学者孔融は政治家曹操に殺された。(中略)

殺人者は批判者を殺すが、批判者は殺されることによって殺人者を批判する、といふ関係である。政治は政治的には有力であるが、文学的には無力であり、無力である文学は、無力であることによって文学としては絶対である²⁶。

ここで、竹内好は文学が政治的統治を批判する、あるいは文学者が為政者を批判することについて考察している。その考察を具体化するために、竹内は中国古代の人物である孔融と曹操、現代の人物である魯迅と軍閥政府に言及した。

孔融は中国の後漢時代末期の文学者である。曹操は当時の強権的な政治家である。政治的統治を維持する曹操に対して、文学者孔融は曹操を殺す、あるいは倒すことはできない。それに反して、孔融は弱者であり、受難者でもある。孔融は最後、曹操に殺された。その受難は竹内によって、「批判者は殺されることによって殺人者を批判する」と解釈され、つまり、無慈悲な為政者と対抗する政治上の実力を持っていない文学者の死であるとされた。

また、前述の引用における段祺瑞は魯迅の時代の政治家である。段は「三・一八事件」²⁷の時、曹操と同じ、殺人者の立場に立っている。当時、魯迅は、北洋軍閥の段祺瑞の統治下で、恐ろしい鎮圧を目撃した。魯迅は、段祺瑞の政府当局に民衆及び自分の学生が虐殺されるという体験をし、自分の命も脅かされ、南の厦門、広州に行った。1927年4月12日に革命陣営の指導者である蔣介石の軍閥政府が上海で「四・一二事件」(上海クーデター)²⁸を起こし、共産党員と民衆を殺害した。蔣介石のクーデターに応え、革命陣営の広州で李濟深や銭大鈞をはじめとする軍閥は1927年4月15日に「四・一五広州大虐殺」を実行し、多数の広州の共産党員と民衆を殺戮したと言われる。魯迅の学生もその中で殺された。その状況下で、魯迅は中山大学の教員の職務を辞め、孔融と曹操について講演を行っている²⁹。実は、魯迅本人も政治当局と対立しつつも、非道な為政者に対抗する政治

²⁵ 竹内好『魯迅』、日本評論社、1944年、171頁。

²⁶ 竹内好『魯迅』(前掲)、181頁、183頁。

²⁷ 1926年3月18日に段祺瑞政府が、北京の民衆の請願デモに対して発砲して多数の死傷者を出した。

²⁸ 1927年4月12日に蔣介石が共産党勢力の排除をねらって、上海で労働者糾察隊本部を襲撃させた。13日に多数の上海の労働者が抗議のデモを行ったところ、蔣介石側はデモ隊に発砲し、多数の死者が出た。

²⁹ 魯迅は1927年7月23日と7月26日に広州市教育局によって開催されていた「夏期学術講演会」の中で曹操と孔融についての講演を行った。魯迅『魯迅日記 上巻』、人民文学出版社、1976年、562頁を参照。

上の実力を持っていなかった弱者の存在である。そのようにして、文学者と無慈悲な為政者、弱者と強者という対立的な人物の位置づけが形成されつつあった。続けて、竹内は次のように述べている。

敵を殺さずに味方を助けるといふのは、欺瞞である。敵に無力であることを忘れて味方に有力だと称する文学は、真の文学でない。それは「虚名」の手段であり、烈士の追悼会に飾られた「輓聯」に過ぎない³⁰。

「一首の詩は孫傳芳を嚇すことは出来」ない。文学は「一発の砲弾」に代りえない。何故ならば、文学は「余裕の産物」だからである。これは、一個の見識である。しかし、それだけのことである。別に感心しなければならぬやうな特別なことではない。文学は「一発の砲弾」に代りえないが、「一発の砲弾」もまた文学に代りえぬのである。魯迅の言葉は、文学が何発の砲弾に代りうるかを論ずる風潮に対して、吐かれてゐるのである。³¹。

竹内好は文学者の誠実さを重視していると考えられる。竹内の『魯迅』には、「一首の詩」と「一発の砲弾」の対比が見られる。文学者は「一首の詩」であり、悪政からの被害を通して、絶対的に正しい地位から相対的に混乱した状態に墮した為政者による政治を否定する文学を書く能力を持っている。竹内はその点に関して、魯迅の「摩羅詩力説」などの文章を分析した後、次のように述べた。

私は、魯迅文学の自己形成の原理については、ごく抽象的な覚書であったが、前の講演の説明に際して一応解釈を下したつもりである。それゆゑ、ここにはそれを繰返さない。ここでは、その原理を確かめるために小さな実験を試みるだけである。（中略）政治に対して文学を無力と置いたのは、政治を絶対としての上である。政治を追廻す文学から自己を区別するためである。いま政治は混乱した。追廻す文学は逃亡した。逃亡した相手に昔の言葉を浴せることは、自身が観念を追廻すことになる。それは文学者の態度ではない。では何が文学者の態度か。政治に対して自己を否定する代りに、政治そのものを否定するより外にない。前に自己を否定したのは、相手を絶対としたからである。相手が相対に墮した今、自己否定は自己肯定に代らねばならぬ。無力な文学は、無力であることによって政治を批判せねばならぬ³²。

文学者の役割は「一発の砲弾」という、為政者を殺す能力を持つまでには至らない。したがって、できないことをできないと直接的に語るのは嘘や欺瞞を避け、真実を守る行為である。その誠実さによって、文学者は為政者との対立の中で、文学の役割という自分の限界が分かり、文学そのものの役割が政治情勢の中で、為政者を替える政治革命の役割と区別されている。いわゆる「絶望」はそこから出てくる可能性があると考えられる。

³⁰ 竹内好『魯迅』（前掲）、171頁。

³¹ 竹内好『魯迅』（前掲）、173頁。

³² 竹内好『魯迅』（前掲）、180—181頁。

ただし、文学者は死ぬまで殺人者による政治的統治を批判する態度を保っている。前述の孔融の例における竹内好の表現を用いると、「批判者は殺されることによって殺人者を批判する」ということである。したがって、文学者は文章、ないし自分の死を以て、永遠の批判の姿を形成するということである。竹内の魯迅像にとって、それは国民文学、国民文学者に由来する批判であり、未来に現れる真の民衆政治（民衆が覚醒し、殺人者による政治的統治を変化させること）と結合することを待つものであろう。

以上の、文学者と無慈悲な為政者が対立するという関係の下で、文学者魯迅の力は現実の為政者と比べて、常に弱くて「無力」であり殺される危機に瀕している。その現実的な境遇から、文学者個人の屈辱と絶望が形成された。文学者魯迅個人が体験した屈辱は、同じように為政者から被害を受けた民衆の感情と共通する。そのような屈辱的感情を等身大の自分を超え、文章という形を通して、日常生活の自分以外の世界へ訴えるのが魯迅文学である。その上で、魯迅文学の発生に関する重要な一件、「幻燈事件」については第二章で触れた（37—39頁）。ここで指摘したいのは、為政者からの被害に由来する絶えざる屈辱が魯迅を絶望に導いたという点である。竹内は為政者による被害である「三・一八事件」の直後の魯迅を次のように述べている。

「これは事件の結末ではない。事件の発端である。
墨で書かれた虚言は断じて血で書かれた事実を掩ひきれぬ。
血債は必ず同じもので償還されねばならぬ。支拂が遅ければ遅いほど利息は増さねばならぬ。」（「花なき薔薇の二」）

これは恐らく絶望の呻き声であらう。しかし絶望は、自己自身に希望を生みうる唯一のものである。死は生をうむが、生は死へ行きつくに過ぎない³³。

竹内好が書いた「絶望の呻き声」を発する姿は、希望を持って前進する姿と違い、死に向かう前進である。原文によると、「死は生をうむが、生は死へ行きつくに過ぎない」ということである。つまり、絶望の中にある希望も死にゆくことである。高橋和巳の研究によれば、希望が見えない竹内の魯迅像は「永久非難者の立場」であり、「非体系的、非協調的」な人物像である³⁴。

しかし、魯迅は徹底的な絶望によって破滅したり、自殺したりしなかった。彼はかえって、諦めず、前進しつつ、呻き声を生み出した。その呻き声は文章の声、魯迅文学そのものであろう。結局、魯迅は一つの時代の混乱を描くことができた。『魯迅』の中で、竹内は次のように述べた。

論争は、魯迅の文学が自己を支へる糧であった。（中略）学匪、墮落文人、偽善者、反動分子、封建遺物、毒舌家、変節者、ドンキホオテ、雑文屋、買辦、虚無主義者、これらの、専ら魯迅をきめつけるために案出された嘲罵の数々は、彼の用ひた筆名に

³³ 竹内好『魯迅』（前掲）、7—8頁。

³⁴ 高橋和巳「自立の精神—竹内好における魯迅精神」（前掲）、65頁。

も劣らぬその多彩さによって、論争の激しさと性質を暗示してある。彼は、旧時代を攻撃しただけでなく、新時代をも怒さなかったのである³⁵。

魯迅がもし先覚者であったとしたら、それは不可能のはずである。彼は先覚者ではない。彼は一度も新時代に対して方向を示さなかった。(中略) 魯迅のやり方は、かうである。彼は、退きもしないし、追従もしない。まづ自己を新時代に対決せしめ、「掙扎」によって自己を洗ひ、洗はれた自己を再びその中から引出すのである。この態度は、一個の強靱な生活者の印象を與へる。魯迅ほど強靱な生活者は、恐らく日本では求められぬかもしれぬ³⁶。

以上の言葉から見て、竹内好が構想した魯迅像は自分の生活していた現実の社会、あるいは自分の周りの生活の状況に着目する人物像であることが分かる。竹内の魯迅像は耐え忍び難い逆境の中に存在している。その逆境は魯迅の時代を指している。

魯迅は中国の清の時代の末期から日中全面戦争が勃発する前夜まで生存していた。その時代は旧時代と新時代の間の転換期である。中国は清の末期の暗黒の統治の下で、さらに外国の列強からの侵略によって、瓦解に瀕して、いわゆる「半植民地半封建」の時代に入った。それは乱世と言え。清を倒した中華民国政府も当時の中国の落伍と列強の支配から徹底的に脱却し得なかったのである。そして、前述の北洋政府など軍閥政府が登場した。魯迅の亡くなった直後の1937年には、日本が全面的に中国を侵略した戦争の勃発によって、中華民族はかつて見たことがない危機に直面していた。したがって、いわゆる「新時代」は実は希望が見えない困難な状態でもあった。魯迅はその困難な時代の中で迫害のみを感じて、その迫害を耐えながら生きなければならなかった。その点に関して、高橋和巳は次のように述べている。

竹内好の「文学者」には定義がない。定義づけられ固定した時に逆に滅びるものとしてそれはある。あえて言うならそれは永遠の抵抗者であり、それ故に、形式の合理的整備に満足する官僚的人間、他人の思弁に盲従する政治的人間、さらに定義と言葉に頼る学者など、それらすべてが文学者の敵なのだ。「生きていれば、迫害あるのみ」ということから、「生きねばならぬ」定形なき意志を抽出した李長之の魯迅論に、その点で竹内好は賛同する。もっともその意志も、無垢な発光体であるのではなく、それ自体において暗い影をひきずっていると竹内好はみている。魯迅に認められる無宗教的な罪の意識がそれである——と³⁷。

「生きていれば、迫害あるのみ」という、暗黒の旧時代と困難な新時代が混在していた乱世の中、受難者の一員としての魯迅は旧時代を批判しつつ、中国を貧困と落伍から救わなかった新時代について、学匪、墮落文人、偽善者、反動分子、封建遺物、毒舌家、変節者、ドンキホオテ、雑文屋、買辦、虚無主義者と論争し、窮地に陥った。魯迅自身は進む

³⁵ 竹内好『魯迅』（前掲）、2頁。

³⁶ 竹内好『魯迅』（前掲）、10頁。

³⁷ 高橋和巳「自立の精神—竹内好における魯迅精神」（前掲）、74—75頁。

べき方向が分からない上、乱世の暗黒の中で模索している状態の時代の受難者の人物像である。

第三節：武田泰淳の司馬遷像

竹内好と深い親交のあった文学者武田泰淳は『司馬遷』において、威勢を誇る為政者と対立し、迫害を受け、恥辱を感じて絶望した人物像を描いた。武田は次のように述べている。

史官は記録者である。唯一の記録者である。彼が筆を取らねば、この世の記録は残らない。そのかわり、書けば、万代までも、事実として、残るのである。書くべきことと、書かなくても良いことを、定めるのが、彼の役目である。書くべしと思い定めたことは、如何なる事が有ろうとも、書かねばならぬ。天に代り、人間を代表して記録するのであるから、なまやさしき業ではない。たとえば、「史記」の「斉太公世家」に記載された実例は、この業のきびしさを、最もよくあらわしている。

斉の崔杼と言う権力者は、その君、莊公を殺した人である。その故、斉の太史は「崔杼、莊公を弑す」と記録したのである。そこで崔杼は、「けしからぬ奴かな」とこの太史を殺してしまった。すると、太史の弟が、また同一のことを記録したのである。そこで、崔杼は、この弟も殺してしまった。すると、その弟の弟が、また同一のことを記録したのである。三度目には、さすがに崔杼も、記録者を、殺すことはしなかった、と伝えられている。三人の兄弟が、つぎつぎと、死を以て記録を守ったのである。「記録」のきびしさは、つきつめれば此処に至る³⁸。

ことに、偉大なる支配者武帝の、人間的圧力は、何物よりもはげしく、彼の全身に、のしかかっていた筈である。武帝の能力が異常であり、個性が強烈であっただけに、身にしみて影響は感じているわけである。郎中と云う役も、太史令と云う役も、天子には近い役目であるから。彼の日常生活のきびしさは、漢代政治家の存在のきびしさであった。そしてそれはやがて、彼の書くべき「史記」のきびしさを、決定的なものにしたのである³⁹。

ここで、武田泰淳は司馬遷と無慈悲な為政者の対立の構図を描いた。そのような対立は司馬遷の命と関わりながら、展開されている。歴史家の司馬遷は文学者の武田によって、「記録者」と称されている。記録者というのは文字を書く人である。『司馬遷』における「記録者」と政治的統治を実施する為政者との違いに関して、高橋和巳は次のように述べている。

一つは、「太史公（父の司馬談）は既に天官を掌りて、民を治めず」というなげない叙述。（中略）

³⁸ 武田泰淳『司馬遷 史記の世界』（前掲）、42—43頁。

³⁹ 武田泰淳『司馬遷 史記の世界』（前掲）、48頁。

すこしく解説的に言いかえれば、それはこういうことである。第一は、記録者というものは、直接政治に参加しない、あるいはするべきでないということ⁴⁰。

以上のように、『司馬遷』における「記録者」と「歴史家」の概念は、民を治めるという政治的統治の行為に参加しない。そして、文字を書く「記録者」の行為は、凶暴性を発揮する政治的統治を批判する、あるいは、その政治的統治を行っていた為政者を批判することになる。その構想を具体化するために、武田は中国古代の人物齊の太史と政治家崔杼、司馬遷と政治家漢の武帝について言及した。

齊の太史は齊という国の歴史の記録者である。崔杼は主君を殺し、政権を握っていた為政者である。齊の太史は実際の歴史を記録するために、為政者によって命を奪われた。その点に関して、武田は齊の国の二人の太史の死を例として、説明した。受難者としての悲劇的な太史の死は、凶暴性を発揮していた為政者と対抗する政治上の実力を持っていないということを証明した。そして、武田が三人の齊の国の太史を書いた目的は、齊の太史を司馬遷と対照させ、司馬遷が存在していた政治的環境を描くためであった。

引き続き戦争を発動し、民衆を戦地に送る偉大な為政者としての漢の武帝が司馬遷に与えた「人間的圧力」は何者と比べても激しい。司馬遷はそのような政治的環境の下で、記録者としての歴史家の責任を守らなければならない。そして、司馬遷と漢の武帝の対立の構図の中で、司馬遷は常に弱者の立場に立って武帝を倒すことができなかった弱者の存在である。『司馬遷』における「日常生活のきびしさ」という言葉はそういう意味である。『史記』はそのような「きびしさ」の中から生まれた。そのようにして、司馬遷と漢の武帝、弱者と強者という対立的な人物の関係が形成されつつあった。

記録者と無慈悲な為政者の関係の中で、記録者の司馬遷は終始一貫、文字を書くことしかできない。彼は政治革命に参加しなかった。彼は筆を持っていたが、武器を持っていない。司馬遷は単なる真実を記録するのみであった。

では、弱者の地位に立っている司馬遷はなぜ引き続き、『史記』を執筆していたのか。その執筆の原動力はどこから来るのか。武田泰淳は「恥——絶望」の設定を使い、叙述を展開していく。その点に関して、『司馬遷』の冒頭の段落で、次のように述べられている。

司馬遷は生き恥さらした男である。士人として普通なら生きながらえる筈のない場合に、この男は生き残った。口惜しい、残念至極、情なや、進退谷まった、と知りながら、おめおめと生きていた。腐刑と言ひ宮刑と言ふ、耳にするだけにけがらわしい、性格まで変るとされた刑罰を受けた後、日中夜中身にしみるやるせなさを、嘔みしめるようにして、生き続けたのである。そして執念深く「史記」を書いていた。「史記」を書くのは恥ずかしさを消すためではあるが、書くにつれかえって恥ずかしさは増していたと思われる⁴¹。

その企みをやる気持が、人間世界では非常に稀なのである。それ故「気持」と言っ

⁴⁰ 高橋和巳「忍耐の思想—武田泰淳」『逸脱の論理』、河出文庫、1996年、97頁。（初出は「曼陀羅の思想—武田泰淳論」『文学』1963年5月号、1963年5月）。

⁴¹ 武田泰淳『司馬遷 史記の世界』（前掲）、25頁。

ても一寸した気分や感傷ではない。現代風に言えば「思想」となるかも知れぬ。要するにその非常に稀な、絶体絶命の気持を司馬遷が持っていたことは疑いがない⁴²。

いずれにしても司馬遷の詠嘆は一時的のものではない。執筆までには血肉骨髓に徹していた。下獄から返書執筆までの年月の永さは、決して恥辱をうすめ消してはいないのである⁴³。

「司馬遷は生き恥さらした男である」という言葉は、司馬遷の中核が恥に由来するということを単刀直入に指摘した。武田泰淳の恥に対する理解は、迫害によって発生した恥の心持ちである。そして、その恥の心持ちは最後に持続する個人の思想になった。その恥は強い為政者から圧迫と迫害を受けた李陵事件に由来する。

李陵は漢の名将軍李広の孫であり、優れた将軍である。李陵は五千人の歩兵を率いて八万人の騎兵と戦い、八昼夜戦闘を続けたが、最後に敗戦し、包囲され、匈奴に降参した。漢の武帝は李陵が匈奴のために匈奴の兵士を訓練したという噂を聞き、李陵の家族を殺した。李陵は漢と関係を断った。この事件の中、司馬遷は李陵のために弁解したため、死刑という刑罰を下された。司馬遷が最後に実際に受けたのは「宮刑」つまり、男根を切る刑罰である。司馬遷はこのような苦痛を抱えて生き続けていた。武田は司馬遷の恥から「執念深く」と「絶体絶命の気持」まで書き、そして、漢の武帝からの迫害による苦痛が『史記』の登場を導いたことが述べられている。

しかし、一時の苦痛は記憶が薄まるにつれて消え、忘れられる可能性がある。武田泰淳は司馬遷の苦痛を持続する心理の感情と見なしている。証拠として、武田は司馬遷の「報任安書」を挙げた。「報任安書」は李陵事件以後の七年目あるいは九年目に書かれたが、中には李陵事件に由来する司馬遷の苦痛が相変わらず見られる⁴⁴。したがって、司馬遷の苦痛は消えておらず、持続している。武田はそれを「血肉骨髓に徹していた」と称している。そして、武田は次のようにまとめた。

この事件に於て、父が感じた憤りに、数倍する憤りを、司馬遷は感じた。彼のうけた屈辱は父の屈辱より、はるかに大きい。父の憤り、父の屈辱の後をうけたものであるから、それだけに、重い、深い、致命的な傷であった。もちろん、「太史公自序」には、この感情は、ひたすら、かくされている。しかし私たちは、すでに、「任安に報ずるの書」を読み終わっている。私たちは、絶望が、彼を動かしたことをあの手紙で知った⁴⁵。

⁴² 武田泰淳『司馬遷 史記の世界』（前掲）、26頁。ここで「企み」の意味は記録、つまり執筆である。

⁴³ 武田泰淳『司馬遷 史記の世界』（前掲）、34頁。

⁴⁴ 任安は死刑の判決を受けて、司馬遷に助けを求めたが、拒絶された。「報任安書」は司馬遷の返信である。「報任安書」では、李陵事件に由来する司馬遷の苦痛について、「只今、肉体不具者となり、奴隷の境地に於て、けがれにけがれている際、首をあげ、眉をのばし、おこがましくも、是非を論じたならば、それこそ、朝廷をかるんじ、当代の士をあなたなどるものではありませんまいか？」と述べられている。翻訳は武田泰淳の『司馬遷』による。

⁴⁵ 武田泰淳『司馬遷 史記の世界』（前掲）、59頁。

武田泰淳は以上の一連の、漢の武帝からの迫害に由来する司馬遷の心情全体を「絶望」と表した。その絶望は「致命的な傷」とも称された。しかし、司馬遷は「致命的な傷」によって、諦めることはなかった。それどころか、司馬遷を動かすものになった。絶望の中で、司馬遷は歴史を記録し、『史記』を書いたのである。その点に関して、高橋和巳は以下のように述べている。

第三は<発憤著書の説>としてしられる、人間の行為と表現活動に関する激烈な認定であって、すべて偉大な著述は、屈原の『離騷』、左丘明の『国語』、孫子の『兵法』におけるがごとく、あるいは放逐され、あるいは失明し、あるいは脚をきられるなど、いかにしても現実的には行為しえない窮地においつめられた者の憤激から生みだされたものであるということ。表現はそれゆえに、おのれの志を行動にあらわしえない道を塞がれた士人の、やむをえぬ代償的实践なのである⁴⁶。

記録という「代償的实践」を通して、結局、武田泰淳の記録者司馬遷は絶望の中で、一つの時代の混乱を書くことができた。『司馬遷』の中で、武田は次のように述べた。

天子を貶し、諸侯を退け、大夫を討じて、王事を達した。天子及び政治家達を批判することにより、孔子は「王事」を宣明したのである。この説によれば、記録者は、記録が目的ではない。王事宣明が目的である。それ故、記録者は、批判者でなければならぬ。宣明すべき「王事」とは何であるか？それは第二篇で取り上げる所であるが、いずれにせよ、「乱世を撥めて、正しきに返す」のが歴史家の眼目である。貶し、退け、討ずべき、乱世が対象である。己の生活する現実を、乱世なりと、観ずる所から出発せねばならぬ。

それ故、司馬遷が、『春秋』の意図を己の意図とする以上、漢代を、乱世なりと、定めねばならぬ。態度決定は、まず此処にかかっている⁴⁷。

以上の言葉から見て、武田泰淳が構想した司馬遷像は自分の生活していた現実の社会を「観ずる」人物像であることが分かる。司馬遷は乱世という時代の逆境の中に存在していると書かれている。しかし、周知の通り、司馬遷が存在していた漢の武帝の時期は、漢民族が統一した時期であり、統一された国家からの立場から見ると、その時期は乱世ではないはずである。それは武田の叙述と矛盾している。

武田泰淳が司馬遷を解読する方法は司馬遷を徹底的な記録者と見なすということである。武田によって、記録者の記録する基準は「乱世を撥めて、正しきに返す」ということである。したがって、「正しい道」こそ、時代が乱世であるかどうかを決定する基準である。武田は中国の伝統を調べ、「正しい道」を『春秋』という本に設定した。『春秋』における意図に相応しい時代は良い時代であり、『春秋』の意図に違反する時代は乱世であると

⁴⁶ 高橋和巳「忍耐の思想—武田泰淳」（前掲）、98頁。

⁴⁷ 武田泰淳『司馬遷 史記の世界』（前掲）、58頁。

述べられている。その方法論に基づいて、武田は司馬遷が存在した漢の武帝の時期が『春秋』における意図に違反し、「正しい道」が衰微し、政治的統治が暗黒となる時代であり、為政者が民衆を戦場に送る時代であり、乱世であると述べた。そのようにして、武田が書いた司馬遷像は乱世の中、文字で為政者を批判し、受難者の一員として乱世を記録する時代の受難者の人物像である。

第四節：乱世における悲哀

竹内好は魯迅を古代の人物孔融と対照させ、魯迅対軍閥政府の為政者、孔融対為政者曹操の関係について描いた。それに対して、武田泰淳は司馬遷を古代の人物齊の国の太史と対照させ、司馬遷対為政者漢の武帝、齊の国の太史対為政者崔杼の関係を書いた。

一方、竹内好と武田泰淳は為政者の抑圧に直面しつつ文字を書く弱者の人間を構想するために、異なる書き方も利用した。竹内が描いた魯迅は確かに安定していない乱世に存在していた。したがって、竹内は客観的に旧時代と新時代が入りまじっていた混乱の時代の背景を描いた。それに反して、武田は統一され、強い漢の武帝の時代を乱世と設定した。武田は『春秋』における道義のロジックを導入し、乱世の時代の背景の設定を主観的に構想した。

総じて、竹内好の魯迅像と武田泰淳の司馬遷像には共に、筆で身を立てる人物と、無慈悲な為政者との対立の構図が見られる。竹内の文学者魯迅も、武田の記録者司馬遷も、共に、武器を持って為政者を倒す能力はない。したがって、魯迅像と司馬遷像は悲哀の人物像となり、絶望が生涯を貫いているように感じる。武田は司馬遷が恥を感じたという以前の解釈を信じ、その上で、司馬遷が恥から絶望に至った考え方で絶望的な人物像を構築した。それに対して、竹内は以前、流行した「幻燈事件」が魯迅文学の発生であるとする説を否定し⁴⁸、魯迅自身が弱国人である自分に屈辱を感じ絶望したという解釈で絶望的な人物像を構築した。つまり、竹内と武田が互いに討論し、強者の為政者に対して、弱者の絶望を描いたと考えられるのである。そして、その絶望こそ、魯迅と司馬遷を動かしたものであり、彼らは絶望の中で作品を書き、時代の混乱を描くことができたのだ。

強者の為政者に対する弱者の存在という文脈における情感は、実際、文学者竹内好と文学者武田泰淳の個人的な真の情感である。あるいは、その情感は竹内と武田が自身で感じた真実に由来すると言ってもいいであろう。

日本の知識人として、特に、中国文学研究会のメンバーとして、竹内好と武田泰淳が当時、置かれた社会環境は戦争である。1937年に日本と中国の間に全面的戦争が起こった。その後、1941年12月12日、日本政府の東条英機内閣は「大東亜戦争」の遂行を決定した。日本は大東亜の盟主として、西洋諸国の支配によって植民地になったアジアの諸国を解放し、「大東亜共栄圏」を作ろうとする。そして、日本国内の戦争動員が活発に行われ、日本国内の雰囲気は緊張していた。一般の民衆は自分が「正義」の戦いに参加するのだというように考え、アジアを解放する理念を抱えて戦場に送られた。そして、1941年12月に

⁴⁸ 余禱延「竹内好による『文学者』魯迅像の生成—小田嶽夫の『愛国者』魯迅像への懷疑」『立命館文学』第655号、2018年1月、33—34頁。および本論文第二章39—40頁。

文学愛国者大会が開催された。翌、1942年5月に日本文学報告会が、同年11月には大東亜文学者大会が開催された。さらに、1943年3月には大日本言論報告会が成立し、同年8月には大東亜文学者決戦大会が開催された。つまり、竹内と武田は全て、「文学が戦争に奉ずる」という戦争の時代の背景の下で生きていた。『司馬遷』における戦争の影響に関して、渡辺一民は次のように述べた。

つまり、破壊をこととする兵士が戦場の一刻の静寂のなかでしみじみと味わった、太古からの時間にかかわる感慨と、まさにそれと対蹠的な兵士の冷酷な日常の認識——わたしはその対立のうちに、武田泰淳の歴史認識の出発点を見たいのだ。そのような戦場のぬきさしならぬ緊迫感を前提とすることなしには、『司馬遷』は理解できないとわたしは考えている⁴⁹。

渡辺の言葉によって、戦争の時代の背景に由来する「戦場のぬきさしならぬ緊迫感」が『司馬遷』の中から見られるということが分かる。武田泰淳自身は1948年に『司馬遷』を再出版した時にも次のように述べた。

私の二十代の後半期に於て、世は恐怖とそれともなう緊張にみちていた。そのためきわめて未熟な思想であり幼稚な文章ではあるが、この書物にも恐怖らしきもの緊張らしきものがふくまれている⁵⁰。

『魯迅』の先行研究の中では、戦争の環境が作品に与えた影響について、次のように述べられている。

「魯迅像」の確立はまず、純粋な知識領域において、どの概念がより正確に魯迅というこの作家を概括できるようにするためではなく、日本文化の弊害に明らかな一つの対立項を与えるためである。竹内好の「文学者」魯迅像は最初に、「文学が政治（戦争）に奉仕する」と「文学が政治から離れる（逃げる）」の二元対立に注目し、以後、より深く「転向」をもって表現する「優等生文化」という伝統に注目した⁵¹。

したがって、戦争の時代の環境の下で、竹内好と武田泰淳が『魯迅』と『司馬遷』を完成させたという点から言うと、戦争という政治情勢が直接に竹内好と武田泰淳の執筆に影響したと言えよう。しかし、先行研究の多くは、前述のように作品『魯迅』あるいは『司

⁴⁹ 渡辺一民『武田泰淳と竹内好 近代日本にとっての中国』（前掲）、67頁。

⁵⁰ 武田泰淳『司馬遷 史記の世界』（前掲）、12頁。

⁵¹ 李明輝「百年日本魯迅研究の生機与偏至」『文学評論』2016年第5期、2016年9月、156頁。原文は「“魯迅像”の確立首先不是为了在纯粹知识领域研究哪一个概念更能够准确地概括魯迅这个作家——“文学者”“革命人”抑或“终末论意义上的科学者”，而是为了给日本文化的弊病明确一个对立项。竹内好的“文学者”魯迅像最初针对的是“文学为（战争）政治服务”与“文学远离（即逃避）政治”的二元对立，后来更深刻地针对了以“转向”为表征的“优等生文化”传统。」である。

馬遷』のどちらか一方に対する研究である。戦中における武田と竹内の『司馬遷』と『魯迅』を構想・執筆することに重要な影響を与えた「目黒村の不安」を研究したのは、管見の限り、前述の朱琳の研究と岡山麻子の研究のみである。しかし、朱琳と岡山の研究は共に、中国文化の視点から「目黒村の不安」を解釈するところに重きを置いている。ゆえに、本節は戦時中の二人の交流における、前述の「目黒村の不安」に対してさらに踏み込んで考察を深めることを試みる。本節では「目黒村の不安」の中に隠れている竹内と武田の日本人としての感情を見出したい。「目黒村の不安」という言葉は最初、竹内の記録の中で、以下のように現れた。

武田、このごろ不思議な気持を訴える。何が何だかわからなくなったようだと言う。文化の基礎がゆらぐ気持だろうと思う。そう云われて、武田が近ごろ書いているものが単に支那に対する愛情の疑いだけでないのがわかった。不安と云うものであろう。俺はそれを目黒村の不安と名付けた。何をしていたかわからなくなった気持。そう云えば、俺の北京生活はそういうものの連続であった。武田が歴研の連中を評した言葉も云われて思い当る。俺の中にもそう云う気持はたしかに強くある。そう云う気持があると云うことすら自覚しなくなった位、それは強くある⁵²。

一月の末に事務所の引越をした。昭和十二年六月白金から本郷に移り二年ぶりで目黒へ越した。ロクに掃除もしないので本には埃が痛ましいほど積っていた。(中略)二年半の本郷生活は僕ら大半を支那で暮したから知らないが他の同人諸君にとっては甘苦い記録があろう。手垢に黴んだ本を取り片付けながら気持ちが滅入った。二年半の間に世間も人も自分も変わった。だが僕らの抱いている希望は明くない。それを僕は「目黒村の不安」と呼び昨夜も晩くまで武田と「目黒村の不安」についてしゃべった⁵³。

戦時下での執筆中、武田泰淳は竹内好に「何が何だかわからなくなった気持」を話した。竹内はその気持ちを自分も強く共有しているのを意識した上で、それを「文化の基礎がゆらぐ気持だろう」と解釈している。そして、竹内は武田と1940年代初めに頻繁にその「文化の基礎がゆらぐ気持」を討論していた。武田が竹内に伝えた、文化の基礎がゆらぐ気持とは何か。前述の岡山の研究では、武田が1940年に書いた「支那文化に関する手紙」を使い、主に中国の文化をめぐって解釈している。本節は同じ材料「支那文化に関する手紙」を使い、「目黒村の不安」の背後にある、これまでの研究が触れていない内容を説明したい。まず、武田は次のように帰国した自己の感情を述べた。

ぼくの周囲には日本語を話し日本人の感情を抱き、同胞愛にうるむ瞳を持った日本人ばかりがいます。敵意に満ち顔をうかがい心の中で嘲り絶望を笑いにかえている人々の影は見えません。私は今ほどはっきりとこの愛すべき日本を見たいと願ったこ

⁵² 竹内好「北京日記」(前掲)、387—388頁。

⁵³ 竹内好「後記」『竹内好全集』第14巻、筑摩書房、1981年、142頁。初出は(「後記」『中国文学月報』第59号、1940年2月)。

とはありません、私ばかりでなく兵士たちはみな黄濁した眼を凝らして自己の国の姿を眺めています⁵⁴。

武田泰淳は戦時中に、敵意を抱き日本に抵抗した中国人と違い、自国への同胞愛が溢れる瞳を持つ日本人に、特別な、愛の感情を示した。しかし、日本へ好意を向ける武田は逆に、戦争中の中国文化の喪失を次のように心配していた。

なるほどこのことは東亜文化協議会が日本と支那の大学者を集めて何やらやっているというほど華やかなものではありません。しかし現在のような状態の下では華やかなるものはすべて空しとさえ言えるのではないのでしょうか。私が日本に帰って驚いたことは支那関係の出版の華やかさでありました。しかし今はその空しさに驚かすにはいられないのです。日支親善のすべての機関、支那研究のための著書、それらの文化的なものが我々には何となく影が薄いもののように見えて仕方ないのです⁵⁵。

日中戦争の前、日本人の文化人は当時の中国の現実を幾度も描いた。しかし、それらは日本人の目から見た「中国」の姿であった。戦争の進展によって、日本は次第に勝利し、中国は次第に敗北した。そのような状況下で、1940年頃には、当時の日本人は、武田泰淳の考察によれば、現実の中国文化に無関心の態度を示していた。その点に関しては、日本政府による戦争動員の雰囲気の中で戦争に勝ち続けている日本人の誇りの観点から考えると、理解できないことではない。だが、その背後にある日本人の対中国意識の問題について、武田は次のように考えていた。

更に意外と言うよりむしろ日本のために残念でありました。なぜ内地の読者は「大地」などというアメリカ人の作品を読んで満足していなければならないのでしょうか。日本は支那の隣国ですよ。なぜ日本人の書いた「大地」を読むことが出来ないのでしょうか。私はこのことを考えると悲しくなりました。日本人の書いた「大地」がなかったからであります。私はそれからというもの、内地から送られる雑誌の類の中から支那人を書いた日本作家の小説はないかと眼を皿のようにして捜しました。(中略)支那人というものを対象として果して日本人の智慧や感情が、どんな具合にどの程度に働くものか知りたかったのです。(中略)ある国が支那人を書くということはその国の文化的表情を示すことになります。その国の知性の成長を示すことになります。支那人を書くということはそれ故決定的な力を持った事なのです⁵⁶。

武田泰淳にとって、中国を書くことは、中国のためだけではなく、日本のためでもあった。上掲の文章によれば、「ある国が支那人を書くということはその国の文化的表情を示すことになります。その国の知性の成長を示すことになります」ということである。戦争

⁵⁴ 武田泰淳「支那文化に関する手紙」『中国文学月報』第58号、1940年1月（『武田泰淳全集』第11巻、筑摩書房、1971年、239頁）。

⁵⁵ 武田泰淳「支那文化に関する手紙」（前掲）、239頁。

⁵⁶ 武田泰淳「支那文化に関する手紙」（前掲）、239—240頁。

中、勝利を得た日本人が興奮し、現実の中国に対する興味を失っていくにつれて、自国日本の文化的表情が陰り、日本の知性の成長が止まってしまうという武田の苦悩が見られる。戦争によって危機に直面したのは、中国人と日本人の身体のみならず、弱い異国の人間を描く能力を持っていた日本の文化でもある。

日本の知性の成長を憂慮する武田泰淳の考えは「目黒村の不安」の付き合いを通して、竹内好と共有された。同じ1940年に竹内は武田との交流を経た後の自分の考えを次のように述べている。

僕は支那人を尊敬しようとは思わない。だが、支那に尊敬すべき人間の居ることは知っている。日本に軽蔑すべき人間が居ると同様に。僕は支那人を愛さなければならぬとは信じない。だが僕は、ある支那人たちを愛する。それは、彼らが支那人であるからでなく、彼らが僕と同じ悲しみを常住身にまとっているからである⁵⁷。

筆者は竹内好が戦中、中国人を害する日本軍に反対していたということを否定しない。しかし、以上の竹内好の言葉を、もし戦争による中国人の被害に対する同情の角度のみから解釈すると、理解できないところがある。竹内は「僕は支那人を愛さなければならないとは信じない」、そして「だが僕は、ある支那人たちを愛する。それは、彼らが支那人であるからでなく」と大胆に述べた。つまり、相手が支那人（弱い中国人）だから、弱い相手を愛するという単純なロジックでは、竹内の考えを全ては解釈できない。ここで、竹内が自分とある中国人（竹内が愛する中国人）の間に「同じ悲しみを常住身にまとっている」というある種の繋がりが存在するという読み取ることができる。戦争という社会環境における竹内とある中国人の繋がりは戦後、竹内によって、以下のように説明されている。

中国から学ぼうという気持はあまりなかったですね。学ぼうというより、そこに自分に心の通うものが見出せるという感じだった。戦争は強制されて行くものだし、鉄砲も撃たなければいけないのですが、その極限で自分がどうすべきかという問題は心の底にあった。私にもあったし、武田にもあったと思う⁵⁸。

戦争を支持しても、戦争に反対しても、人間、特に文学者自身は殺されやすい悲しい弱者である。特に『魯迅』を執筆した後の竹内好自身もすぐに兵士として、日本政府によって中国の戦場に送られた。竹内は『魯迅』を「遺書」と見なしている。「遺書」というのは、戦争における一兵士としての自分が弱者の地位にあることを示唆しているのであろう。そして、自分の心の中の弱者の感覚に通じるものを見出せたのは魯迅であった。

以前の魯迅解釈の多くが魯迅を英雄、つまり特別に強くて偉い人として書いた。それに対して、竹内好は不満であって、彼らの観点を批判することに基づいて、魯迅を絶望的な

⁵⁷ 竹内好『竹内好全集』第14巻、筑摩書房、1981年、172頁。（初出は竹内好「支那と中国」、『中国文学』第64号、1940年8月）。

⁵⁸ 竹内好「文学 反抗 革命」『状況的 竹内好対談集』、合同出版、1970年、38—39頁。

弱者として描いた。『魯迅』では、以下のように述べられている。

死の三年前、彼は楊杏佛の葬儀に列するために鍵を携へずに家を出たといふ。私はどうも、この話には嘘があるやうな気がする。嘘といふのは、事実がまちがってゐるといふ意味ではない。事実の解釈があまりに政治的で、彼を英雄にしてゐると思ふのである。魯迅は英雄ではない。これは、彼自身も認めてゐる。(中略)

これは恐らく絶望の呻き声であらう。しかし絶望は、自己自身に希望を生みうる唯一のものである。死は生をうむが、生は死へ行きつくに過ぎない⁵⁹。

一方、戦争の発動者は無慈悲な国家の支配者である。国家の支配者は戦争を発動するために、民衆を騙すことを厭わず、また圧迫する。日本の民衆の一員として、同じ政治的統治の中心地東京に住んでいた竹内好と武田泰淳は深くその点を感じ取っていた。竹内と武田は戦争動員の圧迫を受けなければならなかったのである。結局、戦中の武田と竹内は弱い中国人を描くことを選んだ。そのようにして、『司馬遷』と『魯迅』の作品における主人公と為政者の対立、及び強者対弱者の構図が竹内と武田によって構築された。

また、戦争の主戦場は中国であった。竹内好と武田泰淳は共に中国文学研究会のメンバーであったため、中国には特別な感情を抱えていた。したがって、竹内と武田は中国の魯迅と司馬遷を主人公として登場させ、無慈悲な為政者によって圧迫された自分の弱者の文学者の感情を作品における中国人の魯迅と司馬遷に置いた。その意義から言えば、魯迅と司馬遷は戦争の環境の下で国家の支配者の圧迫を受けていた竹内と武田自身の自画像であると言ってもよいであろう。

実は、竹内好と武田泰淳のみならず、この戦争の時期のほぼ全ての日本の知識人もその心の葛藤を克服しなければならなかった。日本の知識人は国家の支配者の圧迫に由来する苦悶の心情となり、絶望的な境地に陥った。これもこの時期の日本の知識人の目の前の困難であるといえる。この絶望的な困難との葛藤を経て、日本の知識人は自己を確立することができる。自分の目の前の困難に直面する方法として、竹内は魯迅を選び、武田は司馬遷を選んだ。その選択は魯迅も、司馬遷も、絶望の逆境の中を歩いている人物であることに由来するのかもしれない。あるいは、竹内と武田が意図的にそのような魯迅像と司馬遷像を作りあげたのかもしれない。二人はそれぞれ、『魯迅』『司馬遷』を書くことによって、自己の位置づけを確かめられることを期待していたのである。

おわりに

以上の考察を振り返ると、1930年代、武田泰淳と竹内好が共有した中国における体験に由来する心情は、自分が弱者であるということである。その点は前述の朱琳の研究によって考察されている。続けて、本章は1940年代における武田と竹内の関係の内実を詳細に考察した。

まず、竹内好と武田泰淳は『魯迅』と『司馬遷』を通して、文学者と記録者が他の人を

⁵⁹ 竹内好『魯迅』（前掲）、7—8頁。

迫害し、殺す為政者に出会って、不遇になるということを書いた。文学者と記録者は為政者からの圧迫を受けることによって、希望が見えず、持続する絶望的な心持ちを持たざるを得ない。社会全体も進歩することができず、混乱状態に陥る。それにより、文学者と記録者は、自分の絶望と社会の停滞、混乱、落後を描くことができるようになる。

次に、戦中に、弱い中国人を描く行為は、中国のためという好意のみならず、日本の文化のためでもあった。戦争中の1940年代に、武田泰淳と竹内好は戦争動員の国家の支配者の側、あるいは中国人を害する日本軍側の立場には立っていない。彼らはその時、対中戦争において優勢を保っていた日本人がどうあるべきかを考えていた。

そのほか、『司馬遷』と『魯迅』を読むと、「絶望に対する絶望」という考え方も、司馬遷と魯迅を通して、表現されている。例えば、『司馬遷』において、次のように述べられている。

「歴史家は無為である。又為さざること無し、とも言える」と書き改めて見よう。歴史家はただ、記録するのみである。ただ記録すること、それのみによって、他のことは為さぬ。しかし彼は、記録によって、あらゆる事を為すのである。歴史家は、為さざること無し、でなければならぬ。何故ならば、彼は万物の情を究め、万物の主となるのであるから⁶⁰。

生活していた環境において、司馬遷は弱者であり、何もできない運命にあり、彼は彼の現実を変えることができなかつた。しかし、「無為である。又為さざること無し」という中国の道家の哲学思想を借りて、武田は現実を正確に認識し、受け入れる記録者司馬遷像を書いた。司馬遷は何もできないが、「万物の情を究め」、つまり、世間の全ての道理が分かつた。『魯迅』の中でも、同様に、現実を受け入れる考え方が見られる。

「絶望の虚妄なることは正に希望と相同じい。」絶望も虚妄ならば、人は何をすればよいか。絶望に絶望した人は、文学者になるより仕方ない。何者も頼らず、何者も自己の支へとしないことによって、すべてを我がものにしなければならぬ。かくて文学者魯迅は現在的に成立する⁶¹。

竹内好の魯迅像は、「何者も頼らず」であり、同時に「すべてを我がものにしなければならぬ」である。「何者も頼らず」によって、竹内の魯迅像は新時代に頼らず、新時代を持って旧時代を変える考えがなかつた。「すべてを我がものにしなければならぬ」というのは、旧時代のものを捨てずに、新時代のものをも受け取る状態である。つまり、竹内の魯迅像は最終的に、時代の旧と新の差に由来する希望と絶望との対立を離れて、現実を受け入れて生きていこうということであろう。つまり、戦中に、武田泰淳と竹内好は頻繁な行き来を通して、苦難に満ちた現実を受入れることができるという考えを受け入れようとしたと考えられる。その点も1940年代の武田と竹内の交流の影響であると言ってもよいで

⁶⁰ 武田泰淳『司馬遷 史記の世界』（前掲）、46—47頁。

⁶¹ 竹内好『魯迅』（前掲）、135—136頁。

あろう。

第一節にも記したように、その後も武田と竹内の交流は続いた。1969年に竹内好と武田泰淳、武田の妻百合子は当時のソ連への団体旅行に出かけ、さらに3人だけで欧州を旅した⁶²。二人の強固な友情は文字通り死ぬまで続いたのである。なお、二人の関係についての武田泰淳からの視点については稿を改めて論じることとしたい。

⁶² 武田百合子『犬が星見た ロシア旅行』、中央公論社、1979年に詳しい。『犬が星見たロシア旅行』の初出は『海』1978年2月号—12月号、1979年2月—12月。

第四章：竹内好の浦和時代における日本文学の再発見

はじめに

戦時中の竹内好の文学観は、主に『魯迅』の中で体現されている。その後、1945年8月15日に日本が終戦を迎えた時、竹内は意識や考え方が根底から覆る経験をした。その点に関して、丸山真男は「もちろん、好さんの意識のうえでは八・一五の敗戦がやはり個人体験としても大きなエポックになっていることは、「屈辱の事件」（全集、第十三巻所収）の一文だけでも明らかですし、戦後も期待と失望を繰り返している」¹と述べている。

終戦によって意識に大きな変化がもたらされた後もなお竹内好は、文学についてさらに深く思考し続けていた。文学に対する戦後の竹内の思考における特徴の一つは、同時代の日本文学を積極的に評価しようとしたことである。『竹内好全集』を調べると、戦前の竹内の主な活動が、中国文学研究を中心とする『中国文学月報』と『中国文学』にあるということが分かる。一方、戦後の竹内は、日本文学を評価する文章を大量に書き、戦後文学の同時代状況へ果敢に関わろうとしていた。

例えば、1954年に東京大学出版会から刊行された竹内の『国民文学論』がある。『国民文学論』は、1949年10月から1954年2月までの間に発表された論文集である。本書に収録されている竹内の「近代主義と民族の問題」は、当時の日本文学界において、国民文学論争の「口火を切る」²役割を果たした。その反響は、日本文学の発展に関する100人を越える論者を巻き込んだ「戦後最大規模の論争」³となった。

戦後の竹内の日本文学に関わる仕事について、これまでの研究には竹内好の『国民文学論』を1950年代の日本文学界における国民文学論争の中で読み解き、竹内の観点を同時代の批評と比較し、その差異、あるいは論争における竹内の位置を探る研究が多い。

本多秋五は、1950年代初期の日本文学界における国民文学論に関する論者の文章を検討した上で、竹内好の『国民文学論』における文学観念と論争相手や他の論者の観点とを比較し、竹内好が国民文学論争全体における「口火を切る」位置にあるということを述べた⁴。

島村輝は、同時代の思想状況の中で竹内の位置を確認しようと試みた。竹内は自ら国民文学論争の「整理者」と記していたが、島村はそれに異議を唱え、「ある意味で発言者の真意をぼかし、議論のすれ違いを引き起こすような立場であるともいえる」と述べた。島村は、福田恒存の竹内好批判について、「竹内の主張する『国民文学』が、その実質をなほども語っておらず、近代主義者と反近代主義者をやっているだけ」であり、「『近代主義』に対して『民族』や『国民』という通路を不可欠とする竹内の論が内在する論理上

¹ 丸山真男「竹内日記を読む」『丸山真男集』第12巻、岩波書店、1996年、32頁。（初出は丸山真男「丸山真男氏に聞く聞き手編集部」『ちくま』第138号、1982年9月）。

² 本多秋五「『国民文学』をめぐる論議」『本多秋五全集』第7巻、菁柿堂、1995年、432頁。

³ 坂堅太『安部公房と「日本」植民地／占領経験とナショナリズム』和泉書院、2016年、28頁。

⁴ 本多秋五「『国民文学』をめぐる論議」（前掲）、432頁。

の矛盾をつく」とまとめている。その上で、竹内が福田の批判に対して対決しようとしなかったと島村は結論づけた。福田の批判に対する竹内の態度と対照して、竹内がレジスタンスや抵抗を中心とする野間宏の国民文学論に対して、積極的な評価を下した。そして、島村は野間宏の「国民文学について」を踏まえ、竹内が「民族の独立と国民的解放とが結合した形で野間氏にとらえられていない点に危惧を表明している」というように分析している⁵。

竹内好の立場に立って国民文学論争を考察した島村に対して、内藤由直は「戦後国民文学論争を野間宏の立場から読み直した。内藤は、竹内が野間に対して考え方の一致を認めていることを確認した上で、野間の反米の意識を極めて重視している。そして、内藤は「文学の自律（政治と文学）をめぐる議論において、野間と竹内の考えは一致している」が、革命のプロセスの問題で竹内と野間は一致していないと述べた。同時に内藤は、竹内と野間の国民文学論争では、戦争への加害責任の問題が忘れられたということを指摘した⁶。さらに、内藤は、竹内の国民文学論が生起する伏線としてあった『山びこ学校』の重要性と文壇文学の狭隘さを指摘した上で、『魯迅』以降の竹内の作品や文章を集め、文学と政治の関係を分析し、竹内の議論を中心にして戦後の論争における竹内の国民文学とは何かを究明し、「戦後国民文学論が、政治の優位性論において唱えられた政治と文学の対立を揚棄することで他者への回路を開きつつ、同時に特定の他者を排除するという両義的な論理機制を備えているということであった。国民文学論はこのように両義的な言説編成（＝組織化）を実践する議論であったのである」という結論を下した⁷。

また、国民文学論争を考察するだけでなく、竹内好の『国民文学論』を竹内のほかの作品と比較する先行研究も見られる。米田利昭は、竹内好の『日本イデオロギイ』と『国民文学論』の二冊の本を比較し、西欧に抵抗しない「日本の近代主義」を批判する点で、両者が類似していると考察した⁸。岡山麻子は、竹内好の日本近代批判の論文を研究し、日本近代文化における問題を克服するために「国民文学」が提起されたという見方を示した。岡山は、竹内の『国民文学論』における「インテリの内的要求」と「民衆の自発的契機」を重視している⁹。鈴木将久は、竹内好の『魯迅』など中国文学研究と『国民文学論』を対照し、中国文学研究と『国民文学論』の関連性を指摘した¹⁰。丸川哲史は、竹内好の毛沢東研究を敷衍し、「国民形成」の過程における、「戦争を単純に否定するのではなく、むしろその戦争の思想的性格を徹底的に分節化し、そして再統合するのだ」という観点が竹

⁵ 島村輝「浮沈する『国民』と『文学』—『国民文学論争』という問題系」『文学』第5巻第6号、2004年11月—12月、37—47頁。

⁶ 内藤由直「野間宏の抵抗と革命—戦後国民文学論の同時代性」『社会文学』第33号、2011年2月。59—70頁。内藤由直「竹内好論—国民文学論争における政治と文学」『論究日本文学』第82号、2005年5月、39—52頁。

⁷ 内藤由直『国民文学のストラテジー—プロレタリア文学運動批判の理路と隘路』、双文社出版、2014年、89—106頁。

⁸ 米田利昭「竹内好『日本イデオロギイ』と『国民文学論』」『日本文学』第31巻第10号、1982年10月、19—27頁。

⁹ 岡山麻子『竹内好の文学精神』、論創社、2002年、187—257頁。

¹⁰ 鈴木将久「竹内好『国民文学論』と中国人民文学的問題」『河南大学学报』（社会科学版）2006年6期、2006年11月、22—24頁。

内の毛沢東研究の「論理に近い」と判断した¹¹。

そのほか、高橋和巳は、竹内好の『国民文学論』における「民族性」という言葉を「国民的態度」と解釈し、高く評価した。しかし、高橋は『国民文学論』における、竹内の「個人の態度と民族の態度すなわち民族性を直接結婚させようと」する観点を批判している¹²。尾西康充は、戦時中における竹内好が所属した部隊の行動を綿密に調べて分析し、『国民文学論』において、「自己の従軍体験を語らなかったことにもみられる竹内の本質的な問題」¹³を指摘した。

これまでの研究に用いられた資料を見ると、尾西康充の研究以外は、すべて竹内好の公刊した論文や文章を研究の材料としている。竹内の文学観を理解するためには、公刊されたものだけでなく、尾西のように当時、活字にならなかった資料をも含めて検討していく必要があると思われる。とはいえ、尾西康充が用いた材料である竹内好の従軍体験は戦時中のものである。戦後の竹内の文学に対する考えを明らかにするためには、敗戦後の生活における竹内の個人的体験と思考、特に浦和時代の生活における竹内の体験と思考を重視する必要があると筆者は考える。先行研究には、竹内の公刊した論文や文章に直接関連すると考えられる当時の竹内の生活面に対する考察が不足している。敗戦から『国民文学論』の刊行までの間、竹内好は浦和に住んでいたため、本章では浦和時代における失望と希望の入り混じった日本の文学に対する竹内の思考に着目しながら、竹内が日本文学に関わっていく姿を考察したい。

第一節：天皇制下の「日本国民」の文学についての思考

日本時間の1941年12月8日、アメリカのハワイ時間の12月7日に、日本はアメリカに対して真珠湾攻撃を開始した。日本時間の同日に、日本はアメリカとイギリスに宣戦布告をした。それは太平洋戦争の始まりであった。日本が太平洋戦争と真珠湾攻撃に突入した原因に関して、入江昭は次のように述べている。

日本は列強国に「包囲」されているというイメージが日本人の不安と危機感をつのらせる。この孤立から抜け出す唯一の道はワシントン会議体制に戻ることであったろうが、中国とソ連がこの体制の中に組み込まれている今となつては、これは不可能に近いと思われた。その結果、アジア・太平洋で新たな体制を樹立すること以外に列国の束縛から抜け出す道はないと考えて、日本は先制攻撃に出るのである。日本政府が宣言したように、それは新秩序と国家の存立を賭けた戦いであった¹⁴。

¹¹ 丸川哲史『竹内好 アジアとの出会い』、河出書房新社、2010年、引用部分は146頁。

¹² 高橋和巳「自律の精神—竹内好における魯迅精神」『逸脱の論理』、河出書房新社、1996年、83—84頁。（初出は高橋和巳『文学の責任』、河出書房新社、1963年）。

¹³ 尾西康充「竹内好と国民文学論争—従軍体験と百花斉放運動」『人文論叢』第30号、2013年3月、1—10頁。

¹⁴ 入江昭著、篠原初枝訳『太平洋戦争の起源』、東京大学出版会、1991年、279頁。オリジナルタイトルは『The Origins of the Second World War in Asia and the Pacific』, Longman, 1987.

入江の分析によると、欧米列強からの「包囲」に由来する、欧米に対する日本の不安と危機感は極めて重要であった。日本政府は危機感を抱き、日本国という国家の存立を守るため、アメリカ・イギリスに対して宣戦布告をしたのだ。

宣戦布告をした当時の「国家」は、政府が強大な権力を行使し、文学団体をも含めて一元的に統制していた天皇制国家である。そして、当時の国家システムの中で、全ての文学は、情報局による監督¹⁵や「新聞紙等掲載制限令」¹⁶によって、そのシステムの中で統制されていた。それに対する竹内好の態度は以下の通りである。

十二月八日、宣戦の大詔が下った日、日本国民の決意は一つに燃えた。爽やかな気持であった。これで安心と誰もが思い、口をむすんで歩き、親しげな眼なごしで同胞を眺めあった。口に出して云うことは何もなかった。建国の歴史が一瞬に去来し、それは説明を待つまでもない自明なことであった。

何びとが、事態のこのような展開を予期したろう。戦争はあくまで避くべしと、その直前まで信じていた。戦争はみじめであるとしか考えなかった。実は、その考え方のほうがみじめだったのである。卑屈、固陋、囚われていたのである。戦争は突如開始され、その刹那、われらは一切を了得した。一切が明らかとなった。天高く光清らに輝き、われら積年の鬱屈は吹き飛ばされた。ここに道があったかとはじめて大覚一番、顧れば昨日の鬱情は既に跡形もない。

(中略)

中国文学研究会一千の会員諸君、われらは今日の非常の事態に処して、諸君と共にこの困難なる建設の戦いを戦い取るため努力したいと思う。道は遠いが、希望は明るい。相携えて所信の貫徹につき進もうではないか。耳をすませば、夜空を掩って遠雷のような轟きの飴するのを聴かないか。間もなく夜は明けるであろう。やがて、われらの世界はわれらの手をもって眼前に築かれるのだ。諸君、今ぞわれらは新たな決意の下に戦おう。諸君、共にいざ戦おう¹⁷。

これまでの日中戦争に対する態度と違い、欧米、特にアメリカに対する戦いに関して、竹内好は肯定的な態度を示している。竹内が言及する「十二月八日、宣戦の大詔」は、戦時体制下の権力の中心にあった天皇の言葉である¹⁸。竹内は大詔を聞いて、「天高く光清らに輝き、われら積年の鬱屈は吹き飛ばされた」という爽やかな気持ちであった。その上で、竹内は中国文学研究会一千の会員に対して「諸君、共にいざ戦おう」と書き、自らの中国文学研究会が一丸となって戦争に参画するよう煽り立てた。

ここで、竹内好が触れた「宣戦の大詔」を受け取った「日本国民」と彼らの「文学」は、戦後の1950年代に竹内が語った『国民文学論』における国民文学とは違う。大詔は天皇によって発布されたものである。戦時中に日本政府に統制され、天皇が支配していた国家の

¹⁵ 「情報局分課規程」『官報』第4176号、1940年12月6日。

¹⁶ 『官報』第4202号、1941年1月11日。

¹⁷ 竹内好「大東亜戦争と吾等の決意（宣言）」『竹内好全集』第14巻、筑摩書房、1981年、294—295頁と297—298頁。（初出は『中国文学』第80号、1942年1月）。

¹⁸ 「詔書」『官報』号外、1941年12月8日。

国民は所謂臣民である。臣民は天皇に服従するのである。天皇制に対して、戦後の竹内は批判の言葉を向けている。たとえば、1959年に竹内は、「そのこと自体が、われわれがまだ天皇制下の臣民から抜け出していないことの証明である。解放が必要なのであって文学が必要なのではない、ということが腹の底でわかっていないからだ」¹⁹と述べている。ただし、戦争中、「大東亜戦争と吾等の決意」を書いていた当時の竹内が述べた「日本国民」の文学は、天皇の大詔を支持していた文学である。

しかし、天皇の宣戦大詔を支持していた「日本国民」の文学は、1945年の日本の敗戦によって終焉を迎えた。1945年8月15日に昭和天皇は敗戦を告げ、同年9月2日に日本は降伏文書に調印し、大東亜戦争は終わった。以後約七年に亘って、米軍をはじめとする連合国軍は日本を占領した。

竹内好は、『魯迅』を書き上げた直後に中国へ出征した。1945年に竹内は日本の敗戦を湖南省の岳州（現・岳陽）で迎え、その後1946年6月に復員し、東京に戻った²⁰。敗戦の時、竹内好は強い失望を感じた。その点は戦後に竹内好が書いた回想録である「屈辱の事件」を読むと分かる。そして「屈辱の事件」では、敗戦当時の竹内の失望について次のように述べている。

天皇の放送は、降伏か、それとも徹底抗戦の訴えか、どちらかであると思った。そして私は、後者の予想に傾いていた。ここに私なりの日本ファシズムへの過重評価があった。私は敗戦を予想していたが、あのような国内統一のままでの敗戦は予想しなかった。アメリカ軍の上陸作戦があり、主戦派と和平派に支配権力が割れ、革命運動が猛烈に全国をひたす形で事態が進行するという夢をえがいていた。国内の人口は半減するだろう。統帥が失われ、各地の派遣軍は孤立した単位になるだろう。パルチザン化したこの部隊内で私はどのような部署を受けもつことになるか、そのことだけはよく考えておかなければならないが、などと考えていた。ロマンチックであり、コスモポリタンであった。天皇の放送は、こうした私をガッカリさせた。何物かにたいして腹が立ってならなかった。解放のよろこびも、生き残ったことのよろこびも、はじめはあまり実感にならなかった。私は当時、相当に非人間的であったと、いま考える²¹。

竹内好は天皇が徹底的に米軍に抗戦することを呼びかけると予測したが、実際は天皇の降伏によって日本全国は一致して米軍など連合国軍に降伏した。その点に対して、竹内好は不満を抱き、敗戦の時、「解放」と「生き残ったこと」の喜びを感じることができなかった。竹内好は、8月15日の敗戦の時に天皇制の下での全国の臣民に対して、米軍に徹底的に抵抗しないことに落胆していたのである。

天皇の大詔によって日本全国が一致して抵抗を諦めたという状況がもたらした結果は、

¹⁹ 竹内好「天皇制文学」『竹内好全集』第7巻、筑摩書房、1981年、176頁。（初出は『文学』第27巻第1号、1959年1月）。

²⁰ 鶴見俊輔「竹内好略年譜」『竹内好 ある方法の伝記』、岩波書店、2010年、250頁。

²¹ 竹内好「屈辱の事件」『竹内好全集』第13巻、筑摩書房、1981年、82頁。（初出は『世界』第92号、1953年8月）。

日本が朝鮮や満州国など植民地を支配していた国から、米軍によって占領され、支配される国になったということである。米軍は日本に上陸し、日本を管理した。復員して、帰国したばかりの竹内が見たのは、米軍上陸後の混乱した日本の姿であった。その点に関して、竹内は 1946 年 6 月の日記の中で次のように記録している。

内地では食糧を持っている風を見せるのは危険。人前で大ぴらに飯など食うは禁物なり。一人で外出は危険。多勢行動を共にすること。大阪附近での実見談として、弁当の残飯を投げたのを子供らが争って拾った。今は誰でも如何にして闇取引をやるかばかり考えている。まじめに仕事をするものなし。実収入は二千円位あるが、それでも烟草に不自由するほどなり。内地へ上って最初に目につくのは、若い女が米兵と手を組んで歩いている姿であろう。米兵立入禁止区域もあるが、そういうところは好んで彼らが来て、タバコなどを出して遊んでいく²²。

本屋は知らぬ名前。概して値段は昔の十倍見当。(中略)物価は一般に十倍見当。食料品だけが十一百倍位になっているらしい。日用品の闇値は食品ほど公価との値開きがない由²³。

米軍の兵士は「米兵立入禁止区域」などのルールを守らなかった。当時、米軍が占領した日本では、物価も暴騰していた。日本人の生活は苦しかった。そのような現象を見ながら、元々解放する喜びの心情と、直ちに積極的に文学に従事する意欲を抱えていなかった竹内好はますます失望していった。こうした敗戦時の経験は、竹内の文学観に大きな変化をもたらしたと思われる。敗戦時の竹内の失望は、後の彼の『国民文学論』における「国民文学」の形成に対して、影響を及ぼしていると考えられるのである。

第二節：米軍の統治下の孤独

1946 年 6 月に帰国した竹内好は、武田泰淳の案内で、浦和に疎開していた家族と再会した²⁴。その時から 1954 年 12 月に東京の吉祥寺に転居するまでの約 8 年半を「浦和生活」と呼ぶことにする。浦和生活を始めた竹内好は、米軍が日本を占領していた様子を以下のように観察していた。

MacArthur 司令部では、雑誌組上ってから検閲する。悪いところは削除のあとが目立たぬように直さねばならぬ。文学は割に寛大だが政治論文はよくやられる。郵便の検閲は非常に多く、原稿はとくに甚だしいから郵便で送らずに取りに行った方が確実である。America 批評の不可は勿論だが、communism に対して神経が鋭い。今ではもう天皇制支持だ。最近、反動勢力の反攻が非常に強くなったのは彼らの自信のあらわれ

²² 竹内好「復員日記」1946 年 6 月 9 日の項（前掲）、397 頁。

²³ 竹内好「復員日記」1946 年 6 月 20 日の項（前掲）、400 頁。

²⁴ 竹内好「復員日記」1946 年 6 月 27 日の項（前掲）、402 頁。

だ。最近の読売争議の弾圧はその例²⁵。

MacArthur 司令は、米国陸軍の元帥ダグラス・マッカーサーであり、第二次世界大戦のポツダム宣言を執行するために、日本で占領政策を具体的に実施する連合軍機関である連合軍最高司令官総司令部の司令を務めていた。「今ではもう天皇制支持だ」という竹内好の表現を通して、マッカーサーが共産主義を強く警戒していたことが分かる。マッカーサーは読売新聞に圧力をかけるなど政治的統治の威勢を示していた。日本全国の全ての雑誌・新聞はマッカーサー司令部によって検閲されなければならなかった。その検閲に対して、竹内は「神経が鋭い」と述べている。竹内の不満の表明は、日本に対するマッカーサーの厳しい行政的管理に対してである。一方、そのような行政的管理の下での日本の新聞と雑誌の反応に関して、竹内は日記で次のように記している。

岡崎は『朝日』の出版の仕事をしている。実藤らも支那関係の雑誌を出している。平野義太郎のグループ（野原ら）も支那関係の研究会をやっている。『中国文学』は三月復刊号を出す（二号まで既刊）。生活社だが、鉄村が死んでからうまくいかぬ。同人連中は毎週一回顔をあわせる。雑誌も二冊見たが、復刊ということで番号も通しているし、一般の評判もいいらしい。意味のないことである。『改造』、『中央公論』なども復刊している。他には『展望』、『人間』（もとの『文学界』に近い）はじめ多くの雑誌が出ている。どれも興味なし。『近代文学』（？）というのが中野重治を引張出している。少し毛色がちがうだけ。『アカハタ』も見たが昔のまままで興ざめした²⁶。

マッカーサーが率いる米軍が厳しく日本を管理していた状況の下で、日本の新聞と雑誌は積極的に復刊に努力していた。竹内好の同人によって復刊された『中国文学』といった外国に関する雑誌のみならず、新聞『アカハタ』、『朝日新聞』や雑誌『改造』、『中央公論』、『展望』、『人間』、『近代文学』など、日本文学に関する雑誌も多く復刊された。そのような積極的な動きと逆に、竹内は自らの雑誌『中国文学』の復刊版にも、「一般の評判もいいらしい。意味のないことである」と述べた。他の雑誌に対して、竹内は「どれも興味なし」と書いた。つまり、竹内は積極的に言論の復活に従事していたほかの知識人と違い、積極的ではなかったのである。「『アカハタ』も見たが昔のまままで興ざめした」という一句は重要である。その重要性について、丸山真男は次のように分析している。

この「昔のまま」復刊したことへの幻滅と怒りというのが決定的に重要でしょうね。それに比べれば、復員時期の問題などは第二義的といってもいい。つまりここに竹内好がすでに戦時中に人格的な死と再生を経験したことが意味をもって来ると思うんです。いわば見るほどのものは見て帰って来た。それ以前の自我も、また心情的な左翼シンパの思想も洗い直されて日本へ帰ってみると、戦後の進歩勢力が昔のままの姿で

²⁵ 竹内好「復員日記」1946年7月4日の項（前掲）、405頁。

²⁶ 竹内好「復員日記」1946年6月27日の項（前掲）、403頁。

運動を再開している。社会主義者も自由主義者も、解体と再生の弁証法をまったくつかんでいないじゃないか——この苛だちがまっすぐにあの「日本共産党論」につながるんですね。ぼく自身、あの論文は感銘したが、日共はなぜダメなのか、それは日共が革命を主題にしていないからだ、というああいう批判理由には度胆を抜かれた。けれど、こんど日記を辿ってみて、あれがたんなる鬼面人をおどろかす逆説ではなく、好さんの内面から自然に湧き出たものだった、ということが前よりもよく納得できました²⁷。

『アカハタ』は戦後の進歩勢力日本共産党の中央機関紙である。『アカハタ』の復刊が「昔のまま」であるという竹内好の見方が象徴するように、戦後に復刊された『アカハタ』は、日本が敗戦して米軍が日本を占領する以前と同じであったということが分かる。つまり、戦争が終わった直後の進歩勢力日本共産党の中央機関紙でさえ、マッカーサー管理下の日本の行政システムに対する新しい抵抗が見えなかったのである。丸山は竹内について述べるときに、日本共産党がなぜ「ダメなのか」という問題について、「それは日共が革命を主題にしていない」と竹内の言葉を引用し、さらにその言葉に傍点を打った。当時の竹内の様子に関して、日記で次のように記されている。

魯迅を書こうとするが、考がまとまらぬ。その中、頭が猛烈に痛くなってくる。午后、浦和へ散歩してくる。夜も痛い。マラリヤのようである。早く寝る²⁸。

毎日霧のように雲が流れて夕立がある。今日は午後から一人で摺上川を遡る。天王寺穴原温泉を経てゆく。発電所。この辺の川原は巨岩が露出して美しい。はやの小さな群が見える。峠の茶屋、清水、二里ばかり往復する。川上の危い釣橋の畔でしばらく休む。孤独について考える。兵隊で支那にいたときの思い出など。軽く疲れて帰る。千人風呂に入る。帰って茶碗一杯の酒をのむ²⁹。

昨日、福島の本屋で菊版（多分原版）の『支那革命外史』を見る。買わず。一九二七年版のLarousseも見たが買わず。今日、二度目に孤独についての自覚あり。山から下りて例の釣橋へ来る路筋なり。釣橋の下では灼ける日を浴びて子供たちが水浴をしていた³⁰。

竹内好は自分の心持を「孤独」と何度も書いた。実は、「復員日記」を通して、彼は一人ではなかった事実が分かる。当時、彼は頻繁に武田泰淳と東京で出会い、他の友達にも多く会った。また、彼が彼の家族と一緒に生活していた記録も日記で記されている。したがって、ここの「孤独」は、そばに人がいないという意味ではなく、思うことを話して心を通い合わせる人が少ないということの意味している。竹内の内面は、戦後の解放的な雰囲気とは逆に、全く満たされていなかったのである。そのようにして孤独な竹内は、常に一人で遊び、酒を飲んで、寂しく過ごしていた。そして孤独に苛まれていた竹内好は、日々

²⁷ 丸山真男「竹内日記を読む」（前掲）、34頁。

²⁸ 竹内好「復員日記」1946年8月6日の項（前掲）、413頁。

²⁹ 竹内好「復員日記」1946年8月25日—26日の項（前掲）、418—419頁。

³⁰ 竹内好「復員日記」1946年8月28日の項（前掲）、420頁。

の生活を送る中で、彼の心を動かす「リンカーン」³¹に出会った。日記の中で次のように記されている³²。

夜、母と浦和劇場へ行く。「リンカーン」感激する。リンカーンが少しも英雄でない。市民的で、しかも大統領になるのをいやがっている。政治家はきらいでいて、自然に政治家にさせられてしまう。しかも、それに宿命的なものを感じている。立合演説の場で相手の男も決してデクノボーや悪玉に描かれていない。アメリカの理想、独立宣言の意味、世界平和、デモクラシー、それらが観念でなく描かれている。悪妻との関係も人間的温かさがある。見ながら、アメリカという国がうらやましくなる。こんなことは今までになかった。自分のおかれていた環境がみじめになって仕方ない。自由や正義や平等がいやらしさを伴わないで大ぴらに存在することが不思議に思えなくなった。少くも、ここに表れた限り軽薄なものや皮相なものやいやらしいものではたしかにないように思える³³。

竹内好は、マッカーサー司令部という米軍が強権を振るい統治する状況下で生きていた。したがって、彼は自分の周りの惨めな環境の中で、1946年10月25日まで、アメリカが宣伝した民主主義の内容である自由や正義や平等に対して否定的な態度を取っていた。しかし、10月25日の夜、竹内は母親と共に「リンカーン」を見た後、アメリカ本土が、日本に対する米軍の厳しい管理システムとは異なることが分かった。リンカーンはアメリカの第16代の大統領であり、アメリカの南北戦争で北軍を指導して勝利した。1863年にリンカーンは奴隷解放宣言を発表し、ゲティスバーグの演説で「人民の、人民による、人民のための政治」という民主主義の原理を示す言葉を話した³⁴。つまり、民主主義とは、人民が自らのために政治的統治を行うということである。「リンカーン」を見た竹内はそのことに感激し、アメリカが宣伝する民主主義の自由や正義や平等に対する態度を肯定的に捉えるように変化した。その変化については、彼自身も不思議に思っていたのである。

第三節：人民の文学についての思考

竹内好は「リンカーン」を鑑賞して、アメリカの本土と日本における米軍の支配との違いを理解した。竹内は自由や正義や平等など民主の概念に対して深く考え始めたのである。

³¹ 1940年、アメリカ合衆国の伝記映画「エイブ・リンカーン」が公開された。その後、日本では1946年4月に公開された。竹内好が1946年10月に浦和劇場で見た「リンカーン」は上記の映画「エイブ・リンカーン」である可能性が高い。しかし、「リンカーン」が演劇、あるいは他の映画作品であった可能性も完全的には否定できない。

³² 竹内好は「復員日記」1946年10月19日の項で、『世界』五月号の丸山真男の「超国家主義の論理と心理」を読んで、「面白かった。近來になく面白かった。帰還後よんだ中で随一のものである」と高く評価した。しかし、丸山の研究は文学とは関係がないので、本章では分析しない。稿を改めて分析する。

³³ 竹内好「復員日記」1946年10月25日の項（前掲）、439頁。

³⁴ 「人民の、人民による、人民のための政治」の英語の原文は「government of the people, by the people, for the people.」である。

その後間もなく、竹内は次のように再び彼の心を動かすものに出会った。

朝、駅で原田にあい、神田まで同行。帰還はじめて山本書店による。それから帝大に行く。倉石氏にあえず。文求により雑談。夕刻、帰る。翻訳なし。『日本評論』十月号、面白し。匿名の「時の動き」、羽仁五郎の「官僚主義批判」、共に感動的なり³⁵。

「時のうごき」は東北地方の旅日記である。作者は奥羽本線に乗っていた途中で、人々の顔から「敗戦後日本人得意の『虚脱』の表情が泛んで、『救かった』といふ溜息が、あちこちでフーツと吹き出される」ということを発見した。しかし、事實は救われなかった。秋田発上野行き四〇四列車が山形駅に着いた時、ピストルで武装し要所を固めた73名の警官が列車に入り、臨時検査を行った。「意外にも白米ならずタドンがごろごろ」のように、ルール違反だと判断された人々が捕まえられた。作者は「十人のうち九人は違反組、すきをみてリレー式に荷を窓から運び込むところを捕へられ大立廻りを演ずる者もみた」と述べている。つまり、多数の人が、警察に捕まえられたのである。病人用の燃料でも薄給で買った秋田米でも規定の数量を超えた部分は全て没収された。警官が臨時検査をしていた時、盗難も七件発生した。作者は「人民を泣かせる」、「人間蔑視の政治」と書いた³⁶。続けて作者は次のように記している。

鉄道省の役人、警察吏はいはずもがな、あらゆる行政の担当者が自らの対象が「人間」であり「人民」であることを悟らず、いつまでも名利や役得や上級者の機嫌や陛下の思召しを「相手」としてゐる限り、重荷を背負って右往左往する人民のいたいたしい姿の上には、泣くにも泣けず笑ふにも笑へぬ受難劇がいつまでも幕を閉ぢないであらう³⁷。

「時のうごき」の筆者は、人民という概念を最も重視している。「時のうごき」における人民は「行政の担当者」と逆の概念であり、政府と民間の対立の関係における概念であり、つまり政府によって管理されている一般の日本人である。したがって、「行政の担当者」が人民のために行政を行うか、名利や役得や上級者の機嫌や陛下のために行政を行うかという問題を提起しようとしているのである。

もう一つ、竹内好を感動させたのは羽仁五郎の「官僚主義批判」である。この文章は人民についてさらに考察し、「官僚主義」対人民という対立関係を理論的に分析した。それは、次のように書かれている。

人民を殺して、その責任をとらず、かえって、さらに人民に対する支配をつづけようとしているもの、それが日本の官僚である。（中略）

われわれ人民が租税を出してやとっている警察署長がわれわれ人民にむかっていば

³⁵ 竹内好「復員日記」1946年10月29日の項（前掲）、440頁。

³⁶ 匿名「時のうごき」、『日本評論』1946年10月号、1946年10月、5—6頁。

³⁷ 匿名「時のうごき」（前掲）、7頁。

りちらし、人民が租税をもってやしなっている君主を人民がありがたがっておらねばならない、とゆうところに、階級的支配の本質があり、したがって、そこに封建的な支配もあったのである³⁸。

ここで羽仁は、「階級」という概念で人民を分析している。人民は政府によって管理され、支配されて、租税を納める階級であり、官僚や警察署長など役人は人民を支配し、租税を徴収する階級である。租税を納める人民と租税を徴収する役人の階級面における対立が見られる。また、階級の対立のみならず、官僚は人民の租税を徴収するが、「人民を殺し」さえる。このように、官僚主義に対する批判は、階級の対立を元に考えられているのである。

「時のうごき」でも「官僚主義批判」でも、リンカーンの人民対政府の関係に重なっているとでもいいであろう。リンカーンが述べた人民による人民の統治という考え方を受け入れた延長線上で、竹内は「時のうごき」と「官僚主義批判」を読み、「感動した」と書いたのではないか。

その後、竹内好は引き続き、人民と政府の関係に関する文章を探し読み、感動を覚えるようになる。最も典型的な例は、中野重治の作品と宮本百合子の作品である。中野重治と宮本百合子はプロレタリア文学運動における著名な作家である。竹内は敗戦の時から中野と宮本の作品を継続して読んできた。しかし、敗戦直後の中野と宮本の作品に対する評価は「面白い」とだけ書くことが最も多く、具体的な内容についてほとんど日記に書き記すことはなかった。人民と政府の関係に興味を湧いた後の1946年12月以降、竹内はその二人の作品を読んで、以前の単なる「面白い」の評価を超え、強く心が動かされたことを記している。竹内は、次のように日記に書いている。

堀口大学訳のジード『架空会見記』と『日本評論』十一号を買う。この号、中野重治の「よもやま話」、例の調子だが一層沈痛である。「だ」止めの文章。この雑誌、天皇制廃止を標榜している。諸雑誌の中で尤も人民的なり。しかし他の論文はあまり面白くない³⁹。

夜、『展望』新年号の中野の小説「五勺の酒」をよむ。やはり中野的で感銘深し。まがりくねった、しかし鋭い思考、深淵へ引きずりこまれるようなり。相手を中学生に見立てて共産党の文化政策を批評している。高い道德感情の要求、ほんとうだと思う。彼自身の内心の問題（転向）にふれる疼きを伝えている。宮本と較べると表裏である。やはりどちらにもかなわぬという気はする⁴⁰。

『展望』の宮本百合子の「作家の経験」をよむ。感銘深し。Proletariat文学と新民主主義文学のこと、世界観のこと、これについて書いたものの中で、今までに一番

³⁸ 羽仁五郎「官僚主義批判」、『日本評論』1946年10月号、1946年10月、25頁、27頁。

³⁹ 竹内好「復員日記」1946年12月2日の項（前掲）、450—451頁。

⁴⁰ 竹内好「浦和日記（一）」1947年2月13日の項、『竹内好全集』第15巻、筑摩書房、1981年、471頁。

はっきりしている。この人だけで日本文学を支えている感じなり⁴¹。

『日本評論』五・六月号、宮本百合子の昨年十月新日本文学会での報告「一九四六年の文壇」、胸を打たれる。この人のものとしても秀れている。細かにしらべ感じていること驚くばかり。観念で割切らず、しかし溺れてもいない⁴²。

中野重治の「よもやまの話—愛国と売国」において、竹内好が重視していた観点は、日本の天皇制に対する批判なのではなかろうか。戦後の憲法によって、日本の国家制度は天皇制を廃止せず、維持したのである。中野の文章中の天皇制批判について、例えば、中野は次のように述べている。

彼らによれば国民は天皇をふくむものとしての日本国民だ。つまり、だから天皇もまた日本国民だ。しかし、それならば、財産税はおさめるが勤労所得税はおさめぬといふ国民はどんな国民だ。天皇を愛し天皇にあこがれることで彼らのあこがれてゐるのは、勤労所得税をおさめない、勤労しない、働かずに食つてゐる国民のうちのひと塊り、その天皇としての特殊化だ。といふことは自然の理だ。なぜ、それならば、彼らは、そのことを、その通りにいはぬのだ⁴³。

一般の勤労日本人は全員、所得税を払わなければならないが、天皇は勤労所得税を払わないため、中野は天皇を「勤労しない」特殊な国民だと述べている。勤労所得税に由来する「特殊化」、つまり換言すれば、平等や正義という民主の概念がここでは重視されているのである。

竹内好が中野の「よもやまの話」から読み取ったであろう人民も、その前に読んだ「官僚主義批判」における人民の概念と同じ、人民が政府に租税を納める関係の下での概念である。ただし、中野の「よもやまの話」に接する時までに竹内好が読んだ文章には、明確な天皇制批判があまり見られないため、以前の文章が平等や正義の観念を喚起する程度は「よもやまの話」と比べて弱いように思われる。

日本政府が統治していた人民と違い、天皇という特殊な日本人が存在している。中野はその特別な人間を作る天皇制を廃止するべきだと考えていたではないか。政府の統治下の日本の人民は皆、天皇も含めて平等であるべきだと主張しているのである。

竹内好が読んで「感銘深い」と書いた「五勺の酒」は、中野重治の小説である。戦争中に中学校の校長をしていた主人公は、戦後、共産党員と想定される友人に会いに行ったが、会うことができなかった。彼はわずかな酒を呑み、会えなかった友人に手紙を書き、多くの教え子や部下を戦地に送らなければならなかった自分の過去や共産党の問題や天皇制の問題などを綴った⁴⁴。したがって、「五勺の酒」は共産党の問題を述べる同時に、「よもやまの話」と同じように、天皇制批判という民主主義の内容が含まれている。

⁴¹ 竹内好「浦和日記（一）」1947年2月14日の項（前掲）、471頁。

⁴² 竹内好「浦和日記（一）」1947年6月5日の項（前掲）、490—491頁。

⁴³ 中野重治「よもやまの話—愛国と売国」『日本評論』第21巻11月号、1946年11月、63頁。

⁴⁴ 中野重治「五勺の酒」『展望』1947年1月号、1947年1月、134—160頁。

宮本百合子の「作家の経験」の中でも、民主主義について書かれている。文章中で、戦争中の文学に対する強制的な政治的統治に対して、宮本は不満を表した。戦後、日本は民主的国家の建設に向っている。ゆえに、宮本は「民主的な文学」の形成を求める。宮本は次のように述べている。

日本の細いながら雄々しい民主的文学の伝統は、この時期に後進国らしい飛躍をして、先進世界のプロレタリア文学理論をうけ入れ、影響され、それに導かれて動き出したのであった。(中略)

今日、日本の民主主義文学は、暗い旧い世界へたたかひを挑んだヨーロッパの十九世紀末の精神から、現実に進展してある社会主義社会への展望までをその領域にふくむものである。(中略)

歴史の前進の主軸が、現世紀においては勤労階級であり、従ってけふの努力は来るべきプロレタリア文化・文学への展開であることを不自然とすることもいらないのである。新しい民主主義の理解は、文化と文学におけるいらざるセクショナリズムからわたしたちを自由にするであらう⁴⁵。

宮本は日本の「民主的文学」は以前に世界から落後したが、敗戦後の現在は「先進世界のプロレタリア文学理論」を受け入れて日本の「民主的文学」が「飛躍」したとする。したがって、宮本の追求していた「民主的文学」とは、日本の先進的なプロレタリア文学のことである。その中で、最も重視されているのが勤労階級である。中野と同じように、宮本は階級の概念をくり返し使い、階級の問題に重点を置いた。勤労階級は中野の作品における「租税を納める」人民の階級と同じであろう。

竹内好が読んで「胸が打たれた」と評価した新日本文学会における宮本百合子の報告「一九四六年の文壇」の中でも、プロレタリア文学に由来する階級の概念が見られる。宮本は次のように述べている。

ブルジョア文学と民主的な文学の本質に立ったプロレタリア文学とは決して同質の文学の両面ではなくて、プロレタリア階級が資本主義社会から発生して来た歴史的に新しいそして質の全くちがった一階級であるのと同じに、プロレタリア文学運動は、ブルジョア文学と本質をことにした新しい文学の発展者として、出現したものです。

(中略) 民主主義文学というものにして、日本の民主主義の本質が示しているとおりに、そのひろい幅のうちに進歩的インテリゲンツィア小市民の文学をつつみながら、その最も推進的な部分は勤労階級の文学によって代表されなければならないのです。『黄蜂』の「暗い絵」も「町工場」も今日の民主主義的文学の幅のなかにこめられて前進するのですが、質において、もっともどっさりの「町工場」のような作品が出てくるようにつとめなければならないわけです⁴⁶。

⁴⁵ 宮本百合子「作家の経験」『展望』1947年1月号、1947年1月、100頁、103頁、104—105頁。

⁴⁶ 宮本百合子「一九四六年の文壇—新日本文学会における一般報告」『日本評論』1947年5月6月合併号、1947年5月—6月、94頁。

宮本はブルジョア文学が民主的文学であることを否定していない。しかし、ブルジョア文学とプロレタリア文学両者は宮本の文学観において、等しく重要なものではない。プロレタリア文学が「民主的文学」において最も本質的なものであると宮本は認識している。そして、宮本はプロレタリア文学とは「勤労階級の文学」だと述べた。支配者の階級と勤労階級の対立が宮本の「一九四六年の文壇」の中で見られる。

総じて、この時期の竹内好が考えていた人民とは、政府と一般の日本人（リンカーンの言う people）という管理側と管理される側の関係に由来し、その後、プロレタリア文学における階級概念をも含むようになった。つまり、勤労階級が人民を構成する主要な内容となったのである。

第四節：中野重治からもたらされた着想

第一項：中野重治をさらに読む

1947年10月以前の浦和生活において、竹内好は新時代の日本の知識人が前景化した勤労階級という概念の下で、人民の文学とはどうあるべきかを考えていた。1947年10月に入って、竹内は中野重治の作品をさらに読み込み、文学に対する思考を一層、深めていった。竹内は1947年10月の日記で次のように述べている。

『展望』八月号の中野の「鷗外論」、『新日本文学』九号のやはり中野の「批評の人間性」のつづき、どちらも感動する。彼の底光りのする文体の異様さ、彼が追求しているのが自分で何も作り出さずに人を批評すること——つまり行動的な場でなく観想的な場でものをいうこと、それを打ち破る努力だと思う。「批評の人間性」という言葉がだんだんはっきりしてきた。それは自分がいま考えている官僚主義とおなじものらしい。自分の魯迅論の thema も、したがってだんだんはっきりしてきた。これは無からの創造、自律性、ヨオロッパの影響として近代の成立を考えるのではなく、旧時代そのものの発展としての新精神成立の法則を探ることになると思う⁴⁷。

竹内好は中野重治の「鷗外論」と「批評の人間性」を読んで、「どちらも感動する」と述べた。感動した竹内は、中野の「鷗外論」と「批評の人間性」を読むことによって、「自分の魯迅論の thema も、したがってだんだんはっきりしてきた」と述べた。竹内好の『魯迅』は戦時中に出版した竹内の代表作であり、戦時中の竹内の文学観を体現するものである。その中では、魯迅の文学に関する根源的な「無」が重視され、「無用」や「無用の用」や「無力」など「無」に関する言葉が頻繁に出てくる⁴⁸。「無」の概念は『魯迅』における竹内の文学観の一つの中心的概念と言ってもいいであろう。しかし、ここで竹内は、中野の「鷗外論」と「批評の人間性」を読んで、自分の『魯迅』における重要な要素である

⁴⁷ 竹内好「浦和日記（一）」1947年10月17日—10月21日の項（前掲）、522頁。

⁴⁸ 竹内好『魯迅』、日本評論社、1944年、12頁、145—175頁。

「無」を脇に置いて、改めて「無」とは直接関係ない、「旧時代そのものの発展としての新精神成立の法則を探ること」という新しい魯迅論のテーマを書きたいと考えたのだと筆者は考える。

なぜ、竹内好が「鷗外論」と「批評の人間性」を読むことによって、「旧時代そのものの発展」としての魯迅論を書きたいと考えるようになったのか。「鷗外論」と「批評の人間性」の中で、日本の旧時代に対する批判を踏まえて進むという考えが展開され、そして、中野のその考えを読んだ竹内がそれを受入れたという可能性がある。本節では「鷗外論」と「批評の人間性」と竹内との関係を具体的に考察していきたい。

なお、中野の「鷗外論」と「批評の人間性」は文章のタイトルではない。森鷗外を論じる文章が竹内によって「鷗外論」と呼称されたのである。中野の文章のタイトルは「解説の解説—鷗外位置づけのための雑文」と「『珍説』とクルコフスキ将軍—『批評の人間性』のうち」である。本節では、竹内好の表現である「鷗外論」と「批評の人間性」をそのまま用いる。

「鷗外論」のテーマは、森鷗外という人物をめぐる雑文である。森鷗外は、明治・大正期の小説家、評論家、翻訳家、陸軍軍医、官僚である。彼はかつて当時の先進的な国ドイツに留学した。しかし、中野は近代に入り、先進文明を学ぶ鷗外像を書いていない。中野は次のように書いている。

鷗外で目だつことの一つは、つまり明治、大正の文学者たちに比べて際立って目立つことの一つは、鷗外がその家族から非常に愛せられて来た、愛せられているということだと思います。孫としても、子としても、夫としても、父としても、また兄弟としても、鷗外は全く愛せられています。それも、ガサツに愛せられていたのではなくてこまかく愛せられています。（中略）鷗外の伝記、鷗外についての思い出のうち、肉親によって書かれたものだけで一つの花輪が編まれているとっていいと私は思います。

しかしそこに、古いものに対する鷗外の屈服、あるいは妥協ということも私はあったと思います。必ずしも家族制度と限る必要はありません。家庭生活、官吏生活、それから政治生活、すべてを貫いて結局のところ鷗外は古いものに屈服しています。従順にそれに従っています。生涯をつらぬいて、鷗外は、古いものを守ろうとする立場を守っています⁴⁹。

中野は森鷗外の身の周りのことを詳細に調べた後で、自分の新しい観点を出した。中野の分析によれば、家庭生活、官吏生活と政治生活のそれぞれの側面における森鷗外の活動は一つのテーマ、つまり「古いもの」に対する感情を証明している事が分かる。新しいものを導入し、古いものを捨てるという更新的な進歩の観念の反面、鷗外は「古いものを守ろうとする立場」を持っている。そのような鷗外の生活に由来する鷗外像は日本近代文学の文学者という、鷗外の文学作品に対する一般的な鷗外評価と異なる。鷗外は進歩していない、

⁴⁹ 中野重治「解説の解説—鷗外位置づけのための雑文」『展望』1947年8月号、1947年8月、21頁。

保守的な人間であると描かれている。続けて、中野は次のように述べている。

そこで、鷗外で目立つ第二の問題ですが、それは、古い権威を維持するため彼がいかに奮闘しているということだと思います。(中略)やはり必ずしも、皇室とか天皇とかいうものには限りませんが、徳川時代から引きつづいて来た日本の封建的なもの、明治になって再編成された封建的専制的なもの、これを維持しようため、鷗外がいかに奮闘したか、いかに五人前も八人前も働いたかという問題であります。

(中略)民主主義革命への日本内部の動きと活力、それをおさえるには、上からの力をふだんに強め、不断に新しくせねばなりません。この上からの力を、粗末なものから精密なものに、低級なものから高級なものに改めて行かねばなりません、この支配する力を思想的哲学的に裏づけつつ高めること、ここに鷗外の五人前も八人前も力が発揮されたということ、これが第二の問題、また非常に大事な問題だと私は考えます⁵⁰。

中野は、民主主義を抑える鷗外を「上からの力」の中に属させる。「上からの力」における「上」は当時の政治的統治であろう。中野は明治以来の日本の官僚による政治的統治を先進的な文明と見なしていない。その「上」は古い権威であり、つまり日本の封建的専制である。いわゆる民主主義はその「上からの力」と逆に、下層の一般の日本人の自由や平等を尊重するものであろう。したがって、民主主義は「上からの力」である古い日本の封建的専制という権威意識と戦い、古い日本の封建的専制という権威意識を守ろうとする鷗外にも抵抗しなければならない。

どのように日本の封建的専制に由来する古い権威意識を守ろうとする保守勢力に抵抗するのか、あるいは、その反面で重視すべき人間性は何かという問題は、中野の「批評の人間性」の中で見られる。「批評の人間性」は理想と現実の差異を重視している。中野は現実の立場に立って、理想的なユートピアを批判した。「批評の人間性」では、次のように述べられている。

「高邁」で「純粋」な人間尊重主義者は無数にいた。彼らは批評専門家、傍観専門家として、あるいは「人間蔑視」組織のイデオロギー的親衛隊として必ず百パーセントの純粋をかかげる。しかし自分で苦労しては一パーセントの純粋も実現させようとはしなかった。そうして五パーセントか八パーセントでも実現させようとするものがあればそれが百パーセントに足りぬといって笑って蹴とばして破壊しようとした。たくさんの人が、「出るところへ出ていえばいいじゃないか。」といって「出るところへ出ていう」ことを支持する役人の手で留置場へぶちこまれた⁵¹。

中野の言う「純粋な人間尊重主義者」は、「高邁」で「純粋」な人間性を求めていた。

⁵⁰ 中野重治「解説の解説—鷗外位置づけのための雑文」(前掲)、22—23頁。

⁵¹ なかのしげはる「『珍説』とクルコフスキ将軍—『批評の人間性』のうち」『新日本文学』1947年第9号、1947年9月、18頁。

しかし、そのような百パーセント高尚な理想的人間は、世間には極めて少ない、あるいは、存在しない。したがって、「純粋な人間尊重主義者」は百パーセント高尚な理想的な人間を空想するのみであった。そのみならず、彼らは彼らの極めて高い要求で、行動していた者たちの不足を笑って、他人の行動を破壊した。中野はそのような「純粋な人間尊重主義者」における理想的な人間像という要求を批判している。続けて、中野は自らの人間像を次のように述べている。

平野は（中略）杉本が「困難」な道でなく「安易さをえらんでしまった」ことを残念に思うのだというような顔をしている。わたしは杉本がこういう図式主義、他人には図式をあてるが自分には決してまた永久にあてがわぬ図式主義、観念的英雄主義、純粋主義、苦業主義、裏がえしにされた挑撥にのらなかったのを実行者として人間的だったと思う。（中略）平野は杉本に一そうの苦痛を與えようとしている。私は杉本に一そうらかな道を與えたかった。わたしは、平野の出した假定ではあるが、杉本のえらんだ道が困難な道の一つであったとかたく信じる⁵²。

したがって、上記の「純粋な人間尊重主義者」は平野謙のことを、彼らに蹴とばされる人々は杉本良吉のことを念頭においていたものと思われる。

平野謙は1946年に「ひとつの反措定」を発表し、杉本良吉を批判した⁵³。中野重治は平野の文章を読み、平野が他者の立場から、努力し続けていた杉本良吉に極めて高い人格的要求をし、一人の英雄像を作ろうとしたことを批判した。それに反して、中野は現実の杉本良吉自身の選択を尊重している。中野は、「困難」な道に行くか「安易さ」に満ちた道に行くかという判断の図式や強制的な道徳的要求を、杉本に求めない。杉本が現実を選んだ道は杉本自身にとって困難な道であったと中野は信じている。つまり、中野は他人の目に映る道徳的で高尚な杉本像より、むしろ平凡人としての真実の杉本像を主張しているのである。中野が提唱する真実の杉本像は、百パーセント正しい行動をしないことによって、杉本より一歩進んだ人の目から見ると、ある種の落後さを伴っているかもしれないが、杉本は杉本自身の決断によって行動し、努力している。中野と平野の対比は、中野が杉本に外から道徳的な権威になることを押しつけないというところにある。それも「鷗外論」における封建的専制批判に由来する反権威の意識と繋がっているのではないか。

竹内好は日本文学において、以上のように、古い権威意識と戦い、同時に一般の日本人である自分の歩みによって堅実に前進するということを重視する中野の思考を読んで、感動したのであろう。1948年に入って、竹内はさらに中野の『第一章』を読んで、次のように書いた。

⁵² なかのしげはる「『珍説』とクルコフスキ将軍—『批評の人間性』のうち」（前掲）、19頁。

⁵³ 平野謙「ひとつの反措定」『平野謙全集』第1巻、新潮社、1975年、182—185頁。（初出は『新生活』、1946年4月5月合併号、1946年4月5月）。「ひとつの反措定」では、平野謙は杉本良吉が女優の岡田嘉子とともに樺太国境を超えてソ連に亡命した越境事件を批判した。

池袋で中野重治の『第一章』を買う。小説六篇（「空想家とシナリオ」を含む）。夜、『第一章』をよむ。いろいろの感想がうかぶ。入浴⁵⁴。

中野重治について、いろいろ感想がある。やっぱりえらいところがある。人間的に、また作品として、文学的にも問題がある⁵⁵。

中野重治は、1931年に日本共産党に入党した。同年11月に日本無産者芸術団体協議会（ナップ）が解散し、日本プロレタリア文化聯盟（コップ）が成立した。中野はコップの中央協議員に選ばれた。中野がコップの中央協議員を務めている時、日本政府は1932年に中野を逮捕した。1934年に中野は、「東京控訴院法廷で日本共産党員であったことを認め、共産主義運動から身を退くことを約束し、求刑四年、懲役二年執行猶予五年の判決を受けて即日出所」した⁵⁶。つまり、中野は当時の日本政府の圧迫を受け、共産主義者から転向者になった。その転向の後、中野は1935年に「第一章」などの作品を発表し、1939年に『空想家とシナリオ』（改造社、1939年）を出版した。転向期における中野の作品は最も進歩的なものを追求する作家の作品ではなく、作家である中野が一步退いて、執筆の道を模索する過程を表したものである⁵⁷。共産主義者から一步退いて道を模索している時期の中野に対しても、竹内はそれを否定することなく、「中野重治について、いろいろ感想がある。やっぱりえらいところがある」と評価した。竹内が転向期の中野の姿を高く評価することは、中野の「鷗外論」と「批評の人間性」の読解に由来する、真実の自己を以て戦うという竹内の理解の延長線上にあるからであろう。

中野の「第一章」の中では、主人公田原は日本共産党と関わる革命的な作家として描かれている。田原は『文学新聞』の仕事をしている。『文学新聞』の性質に関して、「第一章」の中で次のように述べられている。

戦争の帝国主義的性質と農業恐慌の本質とが一般的に明るみに出かけていた。こういう事情をその特殊性をとおして正確に反映させ、そこからの逃れ路を示すことが染谷たちの編集している『文学新聞』の仕事だった。

（中略）彼らはすべてをしようとした。去年の春から問題になってきた作家とプロレタリアートとの新しい革命的な結びつき——そのことの一つの現われが『文学新聞』の創刊だった。——のためにすべてを学ぼうとしていた⁵⁸。

『文学新聞』という革命的な仕事に従事しているために、田原と仲間たちは身の危険を

⁵⁴ 竹内好「浦和日記（二）」1948年2月22日の項、『竹内好全集』第16巻、筑摩書房、1981年、12頁。

⁵⁵ 竹内好「浦和日記（二）」1948年2月24日の項（前掲）、12—13頁。

⁵⁶ 松下裕「中野重治略年譜」『評伝中野重治』、平凡社、2011年、591頁。

⁵⁷ 吳婷、王雯「日本転向文学和戦時文学的考察」『文学教育（上）』2014年第2期、2014年2月、42頁。

⁵⁸ 中野重治「第一章」『中野重治全集』第2巻、筑摩書房、1959年、5頁。（初出は『中央公論』、1935年1月。）

伴って生活している。したがって、仲間の島崎は仙台へ逃れ、戻らなかった。仲間の大山、中川、山口、大久保たちは逮捕された。そして、田原も所轄署の刑事宮川によって留置所へ導かれ、逮捕された。田原は拷問に対して、党グループの他のメンバーとは異なる姿勢を取っていた。

髯の濃い大久保の顔は一週間でまっ黒になっていた。そして拷問を食った上に風邪を引いたので少しやつれていた。まだ腰が立たないので許可されて一日じゅう寝ていた。便所へは部屋のもので担ぎあげて往復していた。田原は四人でやった責任者会議の内容を話した。大久保はこの一週間のうちにここで得た報告からして、彼の属している科学者組織内の党グループは全滅したと見ねばならぬといった。

(中略)

「止せ、なめるな。」と原田⁵⁹はいった。田原は黙っていた。「そんなことを聞くためにおれや出てきやせんよ……(彼は文句ごとに切って田原への視線で句読を打って行った。田原は黙っていた。)……文化団体党内党活動を聞いてみんだ……作家組織内日本共産党フラク及びフラクメンバーとしての活動を訊いてるんだ……君たちの党生活、つまり政治生活だ……(「政治生活」に彼は力を入れた。その言葉が彼ら自身最近強く問題にしてきたものだっただけに田原はぐっとくるものを感じた。)……」

「そういうことは私にはわかりません。」と田原は、なるべく反撥しないようにゆるい調子で答えた。

(中略)

「裏の会合へ出なかったというんじゃないんです。」田原はできるだけ静かに、文章を書いて行くように答えた、「裏の会合は知らないというんです。裏の会合があってそこへ出なかったというんじゃないくて、裏の会合というものがあつたかどうか知らぬ、つまりそういうものはなかったと、私としては思っているのです。」⁶⁰

中野が描いた田原は、拷問に向かって死ぬことも恐れず戦う英雄像ではない。田原は役人になるべく反発しない、否定しない態度を取っている。中野は、田原の外部に道徳的な権威を樹立しない。田原は役人によって拷問されている時、役人の拷問の不合理を批判していない。そのような自然的で弱い人間像は、竹内に強い影響を与えた。前述のように、竹内は「第一章」を読んで、「人間的」と「えらいところがある」との評価を下したのである。以上の場面のみならず、ほかにも、真実の人間を考える描写が見られる。例えば、仲間の水木たちの演劇を見た後の場面について、次のように述べられている。

組織の編成替えのため問題を出しにくい位置にいたが、彼は、水木の押手を逆にして、水木流の機械主義、一般に人間を見ずに事件と形とを見ようとする傾向と徹底的に戦おうと思い始めていた。

彼はそのことで、水木たちの演劇組織にいるれんを教えようと思った。れんは田原

⁵⁹ 原田は「第一章」における登場人物であり、田原を拷問する人物である。

⁶⁰ 中野重治「第一章」(前掲)、34頁、38頁、40頁。

の眼では水木に心服していなかった。水木と一しょに働いている大森に対してはしたたかな反感を持っていた⁶¹。

第二項：新しい魯迅論を書く

中野の作品を読み、道徳上の権威によって要求された人間像ではなく、真実の人間像に心を動かされた竹内好は、魯迅の作品を改めて深く読み込み、魯迅に関する文章を書いた。『竹内好著作ノート』を調べると、1947年以後、中野の作品と関連するテーマで新しい魯迅像を描いた最初の文章は、1948年2月に発表した「絶望と古さ—魯迅文学の一時期」である⁶²。竹内は次のように述べている。

古いものとの戦いは、そのまま新しいものとの戦いでもある。自分の古さで古いものを破壊することは、同時に、その古さを拭うことにもなる。それが、新時代の挑戦に応じる彼の回答であった⁶³。

ここで魯迅は、新時代における最も進歩的で完璧な人間像としては描かれていない。魯迅は「自分の古さ」つまり、自分の欠点を以て戦っているのである。素朴な自分を以て、古いものと戦い、そして、外の古いものを破壊する過程において、自分の古いものも解体するという姿であろう。続けて、1948年6月に発表された「魯迅と日本文学」の中で、竹内好は次のように述べている。

また、外国文学（たとえソヴェートであろうと）を権威にして新しさを主張するものとは、いつも対立して戦った。ヴァレリイやロマン・ロオランやルナチャルスキイを権威にするものと戦い、その仮面をはがした。

（中略）

日本文学にとって、新しいものはいつも、流派として外からくる。プロレタリア文学もそうだ。そしてそれは、それを待っているものによって、権威にされてしまう。プロレタリア文学もそうだ。権威に反抗しろということが権威になる。権威が現実にくっついて価値を失うと、べつの権威をさがす。魯迅が、権威としてのプロレタリア文学を否定することによって「左連」へつきぬけたような運動は、日本ではおこらない。（中略）

日本文学にとって、魯迅は必要だと私は思う。しかしそれは、魯迅さえも不要にするために必要なもので、そうでなければ魯迅をよむ意味はない。私がおそれるのは、そのような魯迅を日本文学が権威にしてしまうことである。魯迅のような民衆詩人が官僚文化の偶像にされることである。その危険は十分ある。げんに私にしても「魯迅型」

⁶¹ 中野重治「第一章」（前掲）、22—23頁。

⁶² 立間祥介『竹内好著作ノート』、図書新聞社、1965年、22—110頁。

⁶³ 竹内好「絶望と古さ—魯迅文学の一時期」『竹内好著作ノート』、図書新聞社、1965年、47頁。（初出は『国土』1948年2月号、1948年2月）。

というような形でしか魯迅を扱っていないではないか⁶⁴。

権威意識とは竹内が中野重治を読みながら思考していた、古い封建的専制に由来する「古い」ものであろう。竹内が書いた魯迅像は、外国文学を新しい権威として主張するという、古い封建的専制に由来する権威意識を持ちながら新時代に入る見方と対立して、旧時代からの権威意識に従っていた日本文学の姿とは逆のものである。魯迅は反権威的であり、権威としてのプロレタリア文学をも批判したのである。さらに、竹内が憂慮していたのは、反権威の魯迅自身が日本文学における外来の権威になるという危険性である。日本文学における新しい外来の権威は実は、権威の形式の新しさを指している。中身としての権威意識そのものは、古い封建的専制に由来するものである。したがって、権威を否定する竹内の魯迅像は実はその古い権威意識を批判する竹内の以前の考え（第四章の第四節の第一項の内容）の延長線上に立っているのである。

総じて、竹内好は中野重治と魯迅をさらに読むことを通して、素朴な自分を以て、古い権威意識と戦う反権威の姿を理解したのであろう。竹内は魯迅のみを読むだけでなく、魯迅を読むと同時に、日本文学において魯迅の性格の一つの側面に近い中野重治の文学を発見し、中野文学を発見した後で、魯迅の性格のその側面を鮮明にした。そして、中野と魯迅における反権威の真実の人間像を読んだ後の竹内は、1950年代初期に入って、日本文学学界において国民文学論争を惹起することになるのである。

第三項：『国民文学論』における中野重治に対する理解

前述の本多秋五が指摘するように、竹内好の「近代主義と民族の問題」は、当時の日本文学界において、国民文学論争の「口火を切る」役割を果たした。「近代主義と民族の問題」は最初に1951年9月に発行した『文学』に掲載されている。一方、竹内は自分で選んだ文章を東京大学出版会の石井和夫に渡し、1954年に東京大学出版会を通して『国民文学論』を刊行した⁶⁵。竹内の『国民文学論』における文章を時間順に並べると、最初に発表された文章が「教養主義について」であるということが分かる。「教養主義について」は1949年10月に発行した『人間』に掲載されている。

したがって、「教養主義について」は1950年代初期の日本文学界における国民文学論争の中に入っていない。『国民文学論』に関するこれまでの竹内好研究は主に国民文学論争時代の竹内好の文章に注目して、「教養主義について」を研究していない。それにしても、「教養主義について」が中野重治文学に対する浦和時代における竹内の理解を説明しており、前述の1946年から1948年にかけて中野重治文学に対する竹内の思考の延長線上に立っているため、重要であると筆者は考える。「教養主義について」では、中野文学の根本精神に関して、竹内は次のように述べている。

⁶⁴ 竹内好「魯迅と日本文学」『世界評論』1948年6月号、1948年6月、28頁、30頁、31頁。

⁶⁵ 竹内好「まえがき」『国民文学論』、東京大学出版会、1954年、2頁。

中野文学の根本精神は、一口にいえば、ブルジョア的（日本的）俗悪さとの戦いに貫かれていると私は思う。かれが芥川の影響を受け、それから抜け出ていった経路、かれの抱いている日本文学史書きかえの構想、近代主義への根強い反撥、それらが一貫した基調に立っていることは否定されない。「ぞっとする」という表現は、かれがブルジョア的俗悪さ（日本的教養主義）にたいして投げつける常套語だと見ていい。そして教養主義の本山のひとつがフランス文学ギルドであることはたしかだから、中野のフランス文学批判は、それをつきつめていくとギルドそのものの解体にまで至らなければおさまらぬはずだ。私の見るところでは、文学者としての中野は、改良主義を信じていない⁶⁶。

ここで、竹内好は中野重治を「文学者」と呼び、日本文学の「俗悪さ」と戦う革命者として描いている。中野の一貫した基調は「芥川の影響から抜け出ることや、「日本文学史書きかえ」や「近代主義への根強い反撥」など、つまり、日本文学における文壇文学に対する反逆の基調である。日本文学の文壇文学は日本の優秀な知識人によって構成されているので、竹内によって「ギルド」や「教養主義の本山」と呼ばれている。ギルドは最初に中世ヨーロッパの都市で形成した、発達した商工業者の独占的な同業者の組合である。ギルドは独占的な組織であるので、ギルド以外の人、とりわけ貧乏な人に対して、排他的な権威を持っている。改良主義を信じない中野は、日本文学の文壇文学におけるギルドのような閉塞の状態、つまり優秀なエリートの団体の権威性を徹底的に打ち破ることに努力している。なぜ、日本文学の文壇文学がギルドのような権威的閉塞性を持っているのか。その点に関して、竹内は「教養主義について」の中で主に、日本文学におけるフランス文学の受容をめぐる以前自分の文章を以下のように引用し、説明している。

いったい、日本の外国文学の研究史上、ギルドが形成されて以来、もっとも多く、すぐれた職人をうんだのは、フランス文学のそれである。そして、その反対は、中国文学である。これには、社会的な理由のあることだが、その理由の分析は、私の任でない。ともかく、フランス文学は、日本では、頂点に立っており、そこには、おのずから、秀才が集まり、その秀才たちは、そのなかで、秀才的に形成され、日本文化の代表選手としての自覚をもって、そこから出てくるように、構造されている。だから、そこから、加藤のような優秀なイデオログがうまれるのは、必然であって、他の文学、ことに中国文学からは、絶対に、かれのような優秀分子は、うまれない。（中略）これは、おそらく外国文学研究における、今日、もっとも尖鋭な、方法論であって、したがって、それは、日本文化の最高水準を示すものであるが、このような高い知性は、まったく、秀才的思考方法の産物、私のコトバにいいかえるならば、ドレイ根性の産物（私の『中国の近代と日本の近代』を参照）であることを疑うことはできない。かつ、当然に、それは、日本文化の伝統に、深く根ざしている。だから、もし私が、

⁶⁶ 竹内好「教養主義について」『国民文学論』、東京大学出版会、1954年、39頁。（初出は『人間』、1949年10月）。

自分のフランス文学にたいする関心を、根拠づけようと思うなら、やはり、加藤と同意見を述べなければならないのだが、私の場合は、秀才でなくて鈍才だから、その最後に、次の一句をつけ加えることが必要だ。^{ママ}『と最優秀分子である加藤によって認識された事実による⁶⁷。

当時の日本文学はフランス文学を受容する場合、学びの仕方、つまり外国の教養を日本の文学者の身につけるということを極めて重視していた。竹内好は「秀才が集まり、その秀才たちは、そのなかで、秀才的に形成され、日本文化の代表選手としての自覚をもって、そこから出てくるように、構造されている」と述べている。秀才は勉強を通して非常にすぐれた学問的才能を持た知識人を指している。そのような優等生の学習の文化は竹内によって「日本文化の最高水準」と呼ばれている。したがって、秀才のグループは日本の外国文学の研究におけるギルドとなり、権威性を持っている。一方、竹内自身は優等生と逆であり、竹内は「鈍才」つまり、劣等生と自称している。

そのような優等生文化と劣等生の対照は、日本文学におけるフランス文学の受容の中のみで存在するわけではない。「教養主義について」の中でフランス文学と日本文学の関係について、竹内は次のように述べている。

日本でフランス文学が、一般の外国文学研究のなかで、ある頂点に立っていること、好むと好まぬとにかかわらず、善悪二様の意味でもっとも進歩していること、外国文学の代表であることは、認めなければならない。フランス文学は日本文学に根を張っている。フランス文学、あるいはフランス文学研究、というものを除外しては今日の日本文学は成り立たない。それほどフランス文学は、日本文学に貢献している⁶⁸。

日本的教養主義は、フランス文学をヒエラルヒイの頂点とする日本文学の構造そのものに骨がらみになっているのであるから、その構造的なものを破壊する仕事をギルド内部の優秀分子に求めることは無理ではないだろうか。むろん、啓蒙家としての中野重治は、無理を承知でそれを求めるだろう⁶⁹。

竹内好は日本的教養主義、即ち優等生文化を「日本文学の構造そのものに骨がらみになっている」ものと見なしている。つまり、竹内の理解では、優等生文化が日本文学全体の構造の中で存在している。優等生文化に反して、中野重治は竹内によって「啓蒙家」と呼ばれて、教養主義や優等生文化を破壊しようとする反権威の姿である。しかし、竹内が書いた中野は百パーセント完璧な人間ではない。たとえば、中野の欠点について、竹内は次のように述べている。

⁶⁷ 竹内好「ある挑戦」『国民文学論』、東京大学出版会、1954年、43—44頁。（初出は「ある挑戦」『思潮』1949年5月号、1949年5月）

⁶⁸ 竹内好「教養主義について」（前掲）、35頁、36頁。

⁶⁹ 竹内好「教養主義について」（前掲）、40頁。

私の見るところでは、文学者としての中野は、改良主義を信じていない。それにもかかわらず、なぜかれは「願望」などを持ち出すのであろうか。もっとも、こういう乖離はいろいろ先例があるので、おそらく中野文学における根本矛盾のひとつであるかもしれない。私の中野論の結論からいえば、それは中野におけるブルジョア的なものへの抵抗の特殊な強さ（同時に弱さ）をあらわしている。そしてそれは「古い百姓のイデオロギー」（嘘とまことと半々に）ということと関係するのではないかと私は想像する⁷⁰。

進歩的なものを勉強する優等生によって構造された日本文学における文壇文学のギルドに抵抗する中野は全部の「古い百姓のイデオロギー」を備えていない。つまり、中野の抵抗の姿には問題がある。それにしても、中野が日本文学における文壇文学のギルドに抵抗する方向を、竹内は支持している。中野は日本文学における文壇文学を完全に離れることができなかったが、中野の抵抗の姿勢は竹内に深く影響を与えた。そして、竹内が「私の中野論」と述べたのである。

第五節：国民文学論争における竹内好の姿勢についての試論

1950年代初期の日本の国民文学論争は、日本とアメリカがサンフランシスコ講和条約と日米安全保障条約を調印しようとする政治的情勢の下で発生した。その点に関して、小田切秀雄は当時の1950年代初期に次のように述べている。

国民文学論の直接の端緒は、サンフランシスコ条約で日本の運命がアメリカの従属国、軍事基地として「合法化」された前後の泡立った社会的空気とそれによる日本文学の微妙な身じろぎにある⁷¹。

1951年9月8日にサンフランシスコ講和条約は全権委員によって署名された。同日、日本とアメリカとの間の安全保障条約も署名された。その時から、アメリカが日本を軍事的に占領することは小田切秀雄の言い方によれば、「合法化」になった。つまり、当時の吉田茂首相ら吉田内閣の政権担当者たちは日本国内における米軍の駐留を正式に認めたのである。日本の政府が米軍の占領を正式に認めた状況下で、多くの当時の文学者は、米軍が吉田の官僚政府と協力することによって日本民族の存亡の危機となることを懸念していた。たとえば、国民文学論争に参加した野間宏は当時、次のように述べている。

もちろん私たちの創造しようとする国民文学は日本民族がサンフランシスコ条約以来、全く奪われてしまった自分の国を取り返し解放して行くというたたかいのなかで生みだされてくるものであるということ、このことはいつもはっきり考えられてい

⁷⁰ 竹内好「教養主義について」（前掲）、39頁。

⁷¹ 小田切秀雄「国民文学論の意味するもの—現代文学のイデーとプログラム」『法政』1953年5月号、通巻12号、1953年5月、20頁。

なければならないことである。国民解放、それはナチス占領軍からフランス民族を解放し、また日本帝国主義から中国民族を解放した国民解放と同じように、アメリカ軍から日本民族を解放するたたかいである。それ故に私たちの国民文学はこれらの国民解放文学がレジスタンス文学とよばれるように、あくまでもレジスタンス文学抵抗文学なのであり、このことを置いて国民文学を考えようとするとき、また私たちは全く道を失うことになるだろう⁷²。

1951年10月に日本共産党は「日本共産党第五回全国協議会決定」を発表した。日本共産党は日本の民族の危機に直面して勤労階級のみを以てアメリカ占領軍を倒し日本全国を解放する任務を達成しがたいと考えた。そして、日本共産党は民族解放の内容を、以前の階級の概念における人民の概念の中に組み込んで、新しい国民の概念を提唱した。当時、日本共産党は次のように宣伝していた。

この新綱領草案の討議のなかで、いろいろの疑問が提出され、それに対してまた、いろいろの解釈がおこなわれているが、とくに、そのうちの主な疑点について、まず、明らかにしておく必要がある。

第一、国民と人民の相違について

この問題は、民族解放民主革命と人民民主主義革命、民族解放民主統一戦線と民主民族戦線、民族解放民主政府と人民政府の関係についての疑問に根をおいている。

これまで、人民という言葉で表現してきた革命の力を、国民という言葉に改めたのは、もちろん、単に、言葉の使い方を改めた、というだけの修辞上の問題以上のものを含んでいる。それは、この新綱領草案によって規定された、当面の革命の性質から必然みちびきだされる、革命の力に対する正しい表現として、改められているのである⁷³。

「日本共産党第五回全国協議会決定」の影響を受け、日本のプロレタリア文学は1950年代に国民の文学に積極的な姿勢を示した。

日本民族の危機に臨んでいた竹内好も、プロレタリア文学における人民の概念に最も関心を寄せた以前の姿勢と異なり、当時、日本民族が存亡の危機にある状況に対して深い思考を進めていた。竹内は国民文学論争に積極的に関与し、国民文学論争において、国民という言葉で提唱した。竹内は日本文学におけるナショナリズムについて、次のように考えている。

中国の近代文学が、国民的統一の願望に貫かれていることは、「アジアの典型的ナショナリズム」の国柄として当然のことである。中国人のもつナショナリズムの心情

⁷² 野間宏「国民文学について」『人民文学』1952年9月号、通巻22号、1952年9月、35頁。

⁷³ 「日本共産党第五回全国協議会決定」、日本共産党中央委員会五〇年問題文献資料編集委員会編『日本共産党五〇年問題資料集』第3巻、新日本出版社、1957年、195—196頁。「日本共産党第五回全国協議会決定」が初めに発表されたのは1951年10月16日である。

は、文学においてじつによくあらわれている。それは一種の悲哀感として、また諦念として、あるいは絶望として、また憤怒として、様々な現れ方をしているが、帰するところは国家的独立と国民的統一への祈念である。（中略）

しかし、日本にも個々には、「よき」ナショナリズムの型が生れたように、中国人の心情に似たものが日本文学にまったくなかったわけではない。むしろ、明治時代にはそれが多分にあった。漱石にも、荷風にも、鷗外にすらあった。なかんずく、透谷、独歩、啄木の流れにはそれが強くあらわれている。この色彩が消えてしまったのは、自然主義末期、あるいは白樺以後であろう。それにともなって、文学史的評価が固定したので、隠顕する形であった明治人の東洋的ナショナリズムの心情は、もはや文学の要素としては認められなくなり、埋もれてしまったのだろう。そしてそれを発掘する試みは、私の見る範囲では、中野重治氏を除けばまだだれもやっていない。

（中略）

たとえば独歩の「愛弟通信」では、戦勝国民の喜びと同時に、戦争に負けた中国人への、同情というよりもむしろ、おなじ東洋人であるという親愛感が、ヨーロッパへの敵愾心を介して、はっきりあらわされている。ここにおけるナショナリズムの心情は、素朴であり、単純である。日本と中国とが、もしナショナリズムにおいて結びつきえたとしたら、これはその唯一の時期であった⁷⁴。

「よき」ナショナリズムは「国家的独立と国民的統一への祈念」と言えるかも知れない。つまり、国が存亡の危機にある状況下で民族独立を要求するものであろう。「よき」ナショナリズムは中国文学で見られるが、竹内は漱石文学や荷風文学など過去に遡って初期の日本近代文学の中からも「よき」ナショナリズムを発見した。その一つの例は、独歩の『愛弟通信』における「ヨーロッパへの敵愾心」に由来する「おなじ東洋人である」という感情である。『愛弟通信』は日本が中国に勝った日清戦争を描く記録文学である。しかし、日清戦争の終わりを描いたところでは、独歩は、東洋人同士の戦いを鑑賞していた白人に対する義憤を表した⁷⁵。『愛弟通信』の中で、次のように述べられている。

康済將に出でんとす、満船悉く支那人なり、うちに欧人あり、船尾に立ちて平然として四顧す、可憐なる支那人に引き換へて余は何となく彼等を打ち殺したく思へり。彼等は欧人の恥辱にして支那の為には「かたり」なり。戦血に餓腸を肥す鬼の同類なり⁷⁶。

竹内好がそのような白人に対する抵抗のナショナリズムを提唱していたのは、日本の吉田政府が米軍の占領を正式に認めたことに対する不満があったからではないか。当時の米

⁷⁴ 竹内好「ナショナリズムと社会革命」『国民文学論』、東京大学出版会、1954年、53—55頁。（初出は『人間』1951年7月号、1951年7月）。

⁷⁵ 張杭萍「国木田独歩『愛弟通信』与歴史的隱秘脈絡」『日本問題研究』第28巻総第174期、2014年9月、70頁。

⁷⁶ 国木田独歩『愛弟通信』、岩波書店、1940年、178頁。（初出は『国民新聞』1894年10月21日—1895年3月12日）。

軍占領下の政治的情勢の中で、竹内の見る範囲の中の当時の日本文学界の文壇には、以上のような「よき」ナショナリズムを発見する試みは、中野重治の努力以外、「まだだれもやっていない」。竹内は中野を高く評価したのである。「よき」ナショナリズムの色彩が消えた時期に関して、竹内は自然主義文学末期、あるいは『白樺』以後と指摘している。その後、「近代主義と民族の問題」の文章の中で、竹内は自然主義文学末期、あるいは『白樺』以後の日本文学がなぜ「よき」ナショナリズムの色彩を失ったのかという問題について、以下のように論及した。

近代主義とは、いいかえれば、民族を思考の通路に含まぬ、あるいは排除する、ということだ。しかし、この傾向は、日本に近代文学が発生したときに生じたのではない。二葉亭にはあきらかに、二つの要素の相剋が見られる。この相剋はある時期まで続いた。それがなくなって、一方の傾向だけが支配的になったのは、だいたい「白樺」による抽象的自由人の設定の可能が開けて以後だろうと思う。文学史上、近代文学の確立とよばれる歴史的事実をそれは指している。この場合、近代文学の確立とは、二つの要素の相剋の止揚を意味しているのではなく、一方の要素の切り捨てによって行われていることに注意しなければならない。民族は不当に卑められ、抑圧されてしまった⁷⁷。

「よき」ナショナリズムの色彩が自然主義文学末期と『白樺』の時から失われた理由は、『白樺』文学が日本の民族を「思考の通路に含まぬ」というところにある。竹内の分析によると、『白樺』文学は「抽象的自由人の設定」を可能にさせた。いわゆる「抽象的自由人」は文壇作家の個人的考えであり、日本人全体の現実と離れている。竹内が提唱したのは、日本人全体の現実を重視する民族の概念を含む日本文学であろう。その点に基づいて、竹内は以前に関心を向けていた日本のプロレタリア文学における「階級」について、次のように批判している。

プロレタリア文学もこの例外ではない。「白樺」の延長から出てきた日本のプロレタリア文学は、階級という新しい要素を輸入することには成功したが、抑圧された民族を救い出すことは念頭になかった。むしろ、民族を抑圧するために階級を利用し、階級を万能化した。抽象的自由人から出発し、それに階級闘争説をあてはめれば、当然そうならざるを得ない。（中略）

人間を抽象的自由人なり階級人なりと規定することは、それ自体は、段階的に必要な操作であるが、それが具体的な完き人間像との関連を絶たれて、あたかもそれだけで完全な人間であるかのように自己主張をやり出す性急さから、日本の近代文学のあらゆる流派と共にプロレタリア文学も免れていなかった⁷⁸。

⁷⁷ 竹内好「近代主義と民族の問題」『国民文学論』、東京大学出版会、1954年、68—69頁。（初出は『文学』第19巻第9号、1951年9月）。

⁷⁸ 竹内好「近代主義と民族の問題」（前掲）、69—70頁。

第三節で述べたように、1947年に竹内好は日本のプロレタリア文学における進歩的階級という概念下の人民の見方を学び、感動した。しかし、そのような日本のプロレタリア文学における「階級人」という言い方は「抑圧された民族を救い出すことは念頭になかった」。その点に関して、竹内は「民族を抑圧するために階級を利用し、階級を万能化した」というように批判した。つまり、「階級人」は抽象化された純粋な人間像であり、現実の人間像と距離を置いている。竹内が注目している民族独立を含む文学は現実の中の日本人の総体的な感情を表すものである。竹内は現実の日本人の真実を描写する文学に対する期待について、次のように述べている。

見捨てられた暗い片隅から、全き人間性の回復を求める苦痛の叫び声が出るのは当然といわなければならない。

民族は、この暗い片隅に根ざしている。民族の問題は、それが無視されたときに問題となる性質のものである。民族の意識は抑圧によっておこる。たとい、のちにそれが民族主義にまで前進するためには別の力作用が加わるにしても、その発生においては、人間性の回復の要求と無関係ではない⁷⁹。

竹内好が重視しているのは完全な人間性の回復である。国全体の現実、真実としての日本の民族を文学に対する考えの中に組み入れた後、竹内は以下のように国民文学の定義を下すことができた。

国民文学は、特定の文学様式やジャンルを指すのではなく、国の全体としての文学の存在形態を指す。しかも歴史的範疇である⁸⁰。

ここでの「国民文学は（中略）歴史的範疇である」という概念は以上の民族独立の内容を含むのみならず、もう一つの国民的解放の内容をも含むと考えられる。日本政府が米軍の占領を受けた亡国の危機の状況下で、竹内好のみならず、国民文学論争に参加していた当時の日本の知識人のほぼ全ての人も民族独立を思考していた。しかし、竹内の思考は当時の国民文学論争における彼の何人かの盟友と比べて、さらに、国民的解放の内容まで進んでいる。その点に関して、竹内は次のように述べている。

だが、私はまだいくらか野間氏に不安をもっている。それは、民族の独立と国民的解放とが、結合した形で野間氏にとらえられていない点である。民族の独立だけが優先しているように見える。それが、政治のプログラムをそのまま文学に適用したという印象を私に与えるのである。「私たちが竹内氏に私たちが手段としての国民文学を考えていると少しでも思わせた」のは、そのせいであって、その疑いはまだ私から消えない。民族の独立という高度の政治目標は、けっして民衆の生活から直接に引き出

⁷⁹ 竹内好「近代主義と民族の問題」（前掲）、70頁。

⁸⁰ 竹内好「国民文学の問題点」『国民文学論』、東京大学出版会、1954年、86頁。（初出は『改造』第33巻第11号、1952年8月）。

されるものではない。「日本民族全体の魂を解放する」ことによって、結果として結集されるべき願望である。少くとも文学的にはそうである。「魂の教師」は押しつけ教育をやってはならない。その押しつけの気味が感じられる⁸¹。

野間宏は国民文学論争において、反アメリカの民族独立を提唱していた代表者である。竹内好は野間に賛成していたが、「押しつけの気味が感じられる」という「不安」を持っている。「押しつけ教育」は「魂の教師」と対比されている。「押しつけ教育」は上から下へ、強制的に要求することであるので、権威を樹立する危険性を伴っている。竹内は反アメリカ占領と同時に、民族独立ということが知識人による民衆への強制になるのか、民衆の自然的な行動になるのかという問題を懸念しているのではないか。竹内が支持している、「押しつけ教育」の反対側の「魂の教師」とは何か。その問題に関して、竹内は、臼井吉見が『山びこ学校』の少年たちの作文から受けた感動について書いた「亡国の歌」の文章において、次のように述べている。

臼井氏は、広さと狭さということで問題を出している。『山びこ学校』の中学生たちは、かれら自身の生活について考えているが、「その広さにおいて、日本の国民生活の広さに相応してゐるといへるし、その複雑さにおいても同様といつてよい」。(中略)ところが、いわゆる文壇文学は、「本格小説も、私小説も、風俗小説も、中間小説も、そのほかあらゆるレットルの小説をひつくるめて明らかなことは、日本の現代小説の特殊な狭さといふことだ。美女あり、野獣あり、酔っぱらひあり、殺人あり、姦通あり……何でも無いものはないやうな観があるが、実に狭いといふ感じである。現在の日本の国民生活の広さと深さと複雑さにくらべて、実に狭くて、浅くて、単純で」ある。

引用が長くなったが、重要な発言だと思うのでそうした⁸²。

竹内好は臼井吉見の見方を支持している。本格小説、私小説、風俗小説、中間小説といった文壇小説は文壇の中のみのものであるので狭い。それに対して、知識人と違い、社会における一般の民衆が民衆自身の生活を書いている。その典型的なものは『山びこ学校』という中学生たちの作文である。『山びこ学校』という文学は社会の民衆の生活と直接に繋がっており、権威意識が入っていない民衆自身の文学こそ、国民文学の道である。続けて竹内は次のように述べている。

時代の文学的表現に責任を負うものは文学者以外にないはずだ。(中略)

一般に道徳の荒廃が支配しているとき、文学だけがそれから自由であるはずがない。むしろ、文学はそれを忠実に反映することによって文学の機能を果すことができる、という説がある。私はこの説を認める。たしかに、文学だけが自由であるはずがない。

⁸¹ 竹内好「文学の自律性など—国民文学の本質論の中」『国民文学論』、東京大学出版会、1954年、106—107頁。(初出は『群像』第7巻第11号、1952年11月)。

⁸² 竹内好「亡国の歌」『国民文学論』、東京大学出版会、1954年、16—17頁。(初出は『世界』第66号、1951年6月)。

文学は修身科ではなく、文学者は説教師ではない。かれはただ、民衆とともにうたえばいいのだ。かれは道徳者である必要はない。むしろ転換の時代には、古い価値をほろぼすために進んで反道徳者となってい。表現を解放するためにそれが必要ならば、それはかれにとって崇高な義務である。その場合、新しい価値をうむために古い価値をほろぼすのであるから、新しい価値への確信がなければならぬ。どこかでその確信が鳴っていなければならぬ。かれは反道徳ではあるが、文学精神は健康である⁸³。

竹内好はここで、文学者を説教師と区別した。道徳が荒廃している時代に、説教師は最も正しい道徳を民衆に教える。その教えの過程において、説教師は荒廃している時代における権威になる恐れがある。それに反して、「魂の教師」としての文学者は反権威の姿である。竹内の言葉によると、文学者が「民衆とともにうたえばいいのだ」ということである。文学はただ、その時代を文学的に表現する責任を持ち、時代を忠実に反映し、つまり、時代における民衆そのものを自然に描くことである。当然、新しい価値の出現を文学者も期待し、確信するが、文学者は民衆に新しい道徳上の価値を与えない。したがって、竹内は「文学は修身科ではなく」や「かれは反道徳ではあるが、文学精神は健康である」と書いた。以上の反権威と民衆の思考に基づいて、国民文学論争における盟友たちの多くが反アメリカ、民族独立を唱えていた時代に、竹内は「亡国の歌」を書いたのである。

自身は民衆より多く知識を学んだ知識人であるが、民衆と自身とを区別する権威を持っていないのである。その点は、前述した、竹内が1948年に中野の作品「批判の人間性」において、純粋で百パーセント高尚な人間性を批判することを発見したということと関連するのではないか。知識人が民衆より聡明にはならない反権威に対する思考が、竹内が考える国民文学なのであろう。竹内が期待していたのは、民族独立以外に、道徳的に正しい知識人からの押しつけ教育が存在しない、民衆が自発的に行動する国民的解放である。以上のような、国民文学論争において、多数の人が考える民族独立と違う、反権威の内容が、竹内の議論における意義の一つではないかと筆者は考える。知識人が指導者となる民族独立とは異なり、自分が一步退いて、民衆が自発的に行動する民族独立を待っていた竹内は、反アメリカを標榜する他の文学者たちと比べて、やや後衛的な姿勢を取っていたのである。

おわりに

以上、本章では、日本の国民文学に対する竹内好の思考の流れを考察した。竹内は戦時中において、日本国民の文学を提唱していたが、それは天皇制下の日本国民の文学である。その時に、竹内が思考していた「日本国民」は天皇によって支配され、日本政府によって統合された国家システムの下での臣民である。第二次大戦後における日本の敗戦によって、そのような日本の国民文学の考えが竹内の思考の中で崩壊した。浦和において、竹内は孤独に陥り、苦悶し、次第に人民について考えていった。人民に対する竹内の思考は政府と人民の対立に由来し、後に日本のプロレタリア文学における進歩的な「階級」の概念の下で理解されるようになった。しかし、中野重治と魯迅に出会った竹内は、中野文学におい

⁸³ 竹内好「亡国の歌」（前掲）、23—24頁。

て、先進的な「階級人」とは違い、素朴で完璧でない真実な人間像、及び反権威の意識を発見した。反権威の意識は他者の権威に反対するのみならず、自分が新しい他者の権威になることをも拒絶する。単純に階級概念下の人民に対する思考と異なり、1950年代に日本民族の危機に臨んで、一部の文学者は反アメリカの民族解放の内容を念頭に国民文学論争において盛んに議論を展開した。中野と魯迅を学んだ竹内は後の国民文学論争において、多くの人々が民族独立を提唱していた状況下で、「国がほろびるときは、文学者はただ亡国の歌をうたえばいい」と述べた。竹内は知識人の自分が民族独立を語る時、民衆の外の新しい権威となることを懸念し、それを拒絶していたのではないか。

日本の国民文学に対する以上の竹内の思考の過程において、中野重治に対する思考が極めて重要な位置を占めていると本章では考えた。魯迅の中でも中野と似ている思想を竹内は発見した。しかし、魯迅が日本文学の外来の新しい権威として日本文学を指導する危険性を竹内好は避けている。中野文学を読んだ後、竹内は新しい魯迅論を書いたのである。『国民文学論』の最後の巻尾の部分で、竹内は次のように書いた。

語りかけよ。所在に、隣人に向って語りかけよ。そして隣人から語りかけられることを期待せよ。それによって思想表現の自由を所在に拡大せよ。これがマス・コミュニケーションに対抗して、思想上の国民統一を作り出す唯一の道である⁸⁴。

マス・コミュニケーションが民衆に宣伝することに対抗し、国民文学は民衆自身の文学であり、隣人と隣人が自然に形成した言葉の表現である。その点が竹内好の同時代の『山びこ学校』や竹内の以後の時代の日本文学界でどのように体現されているのか、また、それが今日の日本にどのようなヒントに与えたのかは終章の部分でさらに展開する。

⁸⁴ 竹内好「人と人との間」『国民文学論』、東京大学出版会、1954年、231頁。

終章

第一節：日本文学と中国の間

竹内好と日本文学の関係は、彼の学生時代から戦後まで、生涯を通して続いた。竹内は学生時代に日本文学を勉強し、自らの体験に基づいて文学作品を書いた。『竹内好全集』第17巻には、彼の早期の文学作品が収録されている。また、竹内は日本文学における私小説を高く評価する姿勢で、卒業論文「郁達夫研究」を完成した。戦後にも、竹内は1947年論説「中国文学と日本文学」を発表し、その後、日本文学研究に関する文章を多く書き続けていた。中には、「指導者意識について—魯迅と日本文学の中」（1948年）や「中国の近代と日本の近代—魯迅を手がかりとして」（1948年）、そして『国民文学論』（1954年）など、今なお影響力を持っているものもある。

しかし、多くの同時代の日本文学の作家や研究者と比べて、竹内好は日本文学に関わると同時に、中国との関係を保つという特徴を持っていた。中国と関わる特徴は、竹内自身の中国体験と竹内の中国研究に由来する。その中で、決定的な意義を持っているのは彼の北京留学の体験と『魯迅』の執筆である。これまでの研究は、竹内における、日本文学と中国の関係を十分に考察していない。本論文は岡山麻子以外の先行研究で言及されていない竹内の日記を重視し、竹内の日記と竹内の文章を検討することで、竹内の特異な体験と彼の文学に対する認識の変化の関係を明らかにしようと試みた。

まず、第一章では、竹内好の文学観の由来を考察するため、竹内の個人的体験による彼の文学観の形成を重視し、竹内の北京留学を研究した。彼が文学に従事し、文学を放棄し、最終的にまた文学へ戻る思考の過程を検討したのである。竹内の留学前の文学観は日本の私小説における一部の特徴に由来し、社会から乖離する「文壇」作家のもつエリート意識を重んじる。留学中、半植民地状態の北京の中で、日本の文壇文学の特徴を持っている文学を発見できなかった竹内の心情は、期待から絶望へと変わった。しかし、竹内は個人的な恋愛体験を経て、エリート意識による自分の優越感を捨て、北京の社会において辛酸をなめる一般の民衆の生活を発見し、それを愛することができるようになった。その苦悩を経た竹内は成長し、文学と社会における民衆の生活との結合を重視したのである。

竹内好一人の体験と彼の文学観の形成を研究する第一章と違い、続く第二章、第三章及び第四章では、竹内と彼の知人たちとの関連性を研究した。竹内の知人には、日本文学者であると同時に、中国に対して深い関心を寄せた者として、小田嶽夫と武田泰淳、中野重治の三人がいた。小田嶽夫は日本文学界の作家であり、竹内が作った『中国文学月報』と『中国文学』の同人である。第二章では、小田嶽夫と中国の関係を紹介し、竹内の同時代に小田によって書かれた『魯迅伝』を研究した。武田泰淳は竹内が東京帝国大学で共に学んだ作家であるが、四十年に亘って竹内との交友を持っている。第三章では、中国と関わる武田泰淳の『司馬遷』における司馬遷像と竹内好の魯迅像の共通性を考察した。中野重治は日本のプロレタリア文学運動で活躍した作家であるが、竹内に深く影響を与えた。その点に関しては、第四章で紹介した。また、中野重治は中国にも深く関心を寄せている。土佐圭司は「中野重治が魯迅について言及した文章は、『中野重治全集第二十巻』にて収

録されており、全部で十四ある」¹と述べている。本論文では、中国と関わる以上の三人の日本文学の作家と竹内好の関係を考察した。

第二章では、竹内好の『魯迅』における文学者魯迅像と小田嶽夫の『魯迅伝』における愛国者魯迅像の相違を比較した。第一に、魯迅のテキストに対する小田の解読方法と竹内の解読方法が異なるということを描いた。小田は魯迅の一部の作品（『藤野先生』など）を真実として信じるが、竹内は小田の解読方法を批判した。第二に、二人が描いた魯迅像にも相違が見られる。具体的には、文学観の相違、文学の「愛」の相違、「改革者」の相違という側面から二人の魯迅像の差異を分析した。第三に、小田と竹内の魯迅像の相違は、両者の日本批判の差異やそれぞれの人格の相違と関わっていることを明らかにした。小田の魯迅像は中国の社会改革の象徴であり、魯迅の文学は社会改良の重要な手段であったため、そこから社会改革を指導する功利的な小田の立場が見られる。一方、竹内の魯迅像は、自己を掘り下げ、深い自己認識を基礎として自己確立を試みるものであり、そこから、文学を手段として見なさない非功利的な立場が見られる。竹内は文学を功利的な手段としては認めないが、そのことは文学者が弱者との共通の体験に基づき、弱者に伴い、共に成長する立場に立っているのではないかと筆者は考える。その意義から言えば、文学が社会から乖離しないという点は竹内と小田の共通点であるが、弱い魯迅を描く竹内の『魯迅』は英雄の魯迅を描く小田の『魯迅伝』と比べて、弱い民衆の生活に近づいているのであろう。竹内好の『魯迅』の形成過程において、小田の『魯迅伝』は重要であった。

第三章では、日本の戦争という状況下での竹内好と武田泰淳の交流を研究した。1930年代、武田泰淳と竹内好が共有した中国における体験に由来する心情について、自分が弱者であるという朱琳の研究を踏まえて、1940年代における武田と竹内の関係の内実を詳細に考察した。竹内と武田は同じ時期に、『魯迅』と『司馬遷』を通して、文学者と記録者が他者を迫害し、殺害する為政者に会って、不遇になるということを書いた。文学者と記録者は為政者からの圧迫を受けることによって、持続する絶望的な心持ちを持たざるを得ない。社会全体も進歩することができず、混乱状態に陥る状況の下で、文学者と記録者は、自分の絶望と社会の停滞、混乱、落後を描くことができるようになる。一方、戦中に、弱い中国人を描く武田と竹内の行為は、中国のためという好意のみならず、日本の文化のためでもあった。武田と竹内は当時、対中戦争において優勢を保っていた日本人がどうあるべきかを考えていたので、戦争動員の国家の支配者の側、あるいは中国人を害する日本軍側の絶対的な強者の立場には立っていない。

第四章では、竹内好の浦和時代における日本の文学に対する思考の流れを考察し、竹内の日本文学の再発見を研究した。竹内は戦時中において、日本国民の文学を構想していたが、それは天皇と日本政府によって支配された国家システムの下での臣民の文学である。第二次大戦の日本の敗戦によって、そのような国民文学の考えが竹内の思考の中で崩壊した。浦和において、竹内は孤独の中で苦悶し、次第に政府と人民について考えていくようになり、後に日本のプロレタリア文学における進歩的な「勤労階級」の概念の下で人民を理解するようになった。しかし、中野重治の文学、特に転向期中野文学と魯迅に出会っ

¹ 土佐圭司「中野重治と魯迅についての試論—竹内好と武田泰淳を介して」『城西国際大学日本研究センター紀要』第2号、2008年1月、87頁。

た竹内は、中野文学において、進歩的な「勤労階級」とは違い、素朴な人間像、及び反権威の意識を発見した。反権威の意識は他人の権威に反対するのみならず、自分が道徳的な権威を他人に押し付けることをも拒絶する。それを学んだ竹内は後の国民文学論争において、多くの人々が民族独立を提唱していた状況下で、知識人の自分が民族独立を語る時、民衆の外の新しい権威になることを拒絶したのではないか。

以上、竹内好が日本文学における私小説を高く評価する文学観から出発し、文学を離れ、文学に戻り、最後に日本文学において、国民文学論を提唱する過程を見て取ることができた。その過程の中で、文壇作家を中心に考える文学観から、社会における民衆の日常生活を基礎とする文学観への変化が見られる。つまり、社会における民衆の日常生活に近づく姿勢は、竹内にとって重要であったと考えられる。その点に関して、竹内の北京留学における峯子や車夫との出会い、魯迅文学との出会い、小田嶽夫との格闘、武田泰淳との交友及び中野重治に対する理解などが竹内に深い影響を与えたのであろう。

さらに重要なのは、日本文学と中国文学に対する竹内好の態度の変化である。竹内は当初、社会から乖離する文壇文学を高く評価する文学観を抱いて北京に入った。竹内の期待した文壇文学と当時の北京の文学との間に大きな差異が存在していたために、竹内は絶望し、文学を放棄しようとした。一方、峯子との恋愛体験や車夫との出会いを通して、文学者竹内は次第に民衆の生活に近づいた。魯迅文学に対する思考を通して、竹内は民衆の生活と関わる魯迅文学を高く評価した。つまり、民衆の日常生活を描く文学を高く評価する竹内の文学観は、ここで形成されたと考えられる。しかし、戦時中の天皇制の下で統制された日本の国民文学や、戦後の日本のプロレタリア文学における「勤労階級」の文学などに直面していた竹内は文学を放棄しようとしなかった。それどころか、竹内は現実の日本文学の発展を期待していた。そして、竹内は日本文学の発展を見て感動し、心を動かされた。日本文学の現状が魯迅文学に合わなかった時代において、魯迅文学を高く評価する竹内は魯迅が日本文学の外来の新しい権威として日本文学を指導する危険性を努めて避けていた。日本文学において魯迅の反権威の側面と重なる中野文学を読んだ後、竹内は新しい魯迅論を書いたのである。以上の竹内の思考の過程において、竹内の成長が見られるであろう。

日本の国民文学に対する竹内の提唱にとって、浦和時代の中野重治に対する思考が極めて重要な位置を占めていると考えられる。実は、『魯迅』の本を書く前に、竹内好は中野重治の文学作品を既に読んでいた。ただし、戦時中、竹内が中野文学を読んだ時、戦後の浦和時代における中野に対する理解と比べて焦点が異なる。竹内は戦時中に、主に中野文学から「無力感」を見出した。その点は、岡山麻子の研究の中で既に考察されている²。1942年に竹内は次のように書いたのである。

『斎藤茂吉ノート』を読んでから二、三日は、世界と自分とが変ったように、ぼんやりしてしまって、ただ一つのことだけが頭にこびりつき、何も考えられなくなった。この二、三年、これほど感動を受けた書物は、他になかったような気がした。道を歩いていても、そのことだけが気になって、大地が足許から崩れるような、目まいのよ

² 岡山麻子『竹内好の文学精神』、論創社、2002年、72—83頁。

うな感覚がして、無力感は決定的になった。そのような無力感は、実は中野重治の無力感からの影響なので、僕自身の影響を受けやすい性質を計算に入れても、僕にそのような影響を与える中野重治の無力感というものは、実に恐るべきものなのである³。

第二節：国民文学論争のその後

では、日本文学に戻った竹内好は、国民文学論争の中で日本文学に対して最終的にどのような期待を抱いたのか。あるいは、彼の心の中の本格的な日本文学とは何か。その問題について、内藤由直の先行研究の中で既に以下のように究明されている。

戦後国民文学論が提起されたそもそもの動機は何であったのか。議論の提唱者である竹内の国民文学論における最大の眼目は、文壇の解体であった。国民文学論が生起する伏線としてあった『山びこ学校』（無着成恭編 青銅社 一九五一年）は、文壇文学の狭隘さを批判し、その特権的な閉鎖空間を指弾するための恰好の証左となっていた。（中略）

竹内は、「日本の文壇とよばれるものは、特殊なギルド的社会であって、一定の資格を公認されなければ参加できず、参加することによって身分的特権を取得する方式になっていた」（「社会と文学」『文学』一九五四年三月）と述べるように、文壇をギルドと捉えていた。しかし、このギルドは職能集団ではなく閉鎖的なヒエラルキーを構成する集団であった。竹内は「インテリと民衆の結びつき」（『国民講座Ⅰ 日本の思想』河出書房 一九五一年）の中で、「それぞれのギルド内部には親分子分の階層的秩序が支配していて、独特のヤクザのモラルをもち、仲間だけしかわからぬフチョウの用語が通用している。ギルドのオキテに従って、外とのコミュニケーションは堅く禁ぜられている」と述べている。こうした特権的・閉鎖的ギルドの存在によって、「インテリと民衆とは、職能的にでなく、身分的にへだてられている」（同前）と竹内は考える。「インテリは、全体社会の頭脳作用を機能的に代表するものでなければならない」（同前）と竹内は述べ、民衆とインテリの有機的結合を何よりも強く主張する。それは、文学という表現の場において、民衆の生活とその表現が直結することを意味していた⁴。

竹内の国民文学論の最も基底にある戦略は、このように文学の生産と消費の現場を広範囲に開くということにある。文壇を解体し普遍的言語を用いて民族・国民という大枠に文学生産・文学消費の現場を開くこと、竹内は文学表現が文壇に占有され、またそこからのみ文学表現が紡ぎ出される円環構造を批判しているのだ。マルクスが商品—貨幣—商品の関係が貨幣—商品—貨幣の円環に転倒していく過程を批判したのと同様、それは文学表現—文壇—文学表現の関係が、文壇—文学表現—文壇の関係に倒

³ 竹内好「旅日記抄」『竹内好全集』第14巻、筑摩書房、1981年、424—425頁。（初出は『中国文学』第89号、1942年11月）。

⁴ 内藤由直『国民文学のストラテジー—プロレタリア文学運動批判の理路と隘路』、双文社出版、2014年、90頁、91頁。

錯し閉鎖空間を再生産していった文学の現場をもう一度原初の状態に戻し、自閉空間を切り開く可能性を常に保持しながら、再び新たな文学表現を生産していこうとするものであった⁵。

以上のように、文壇の閉鎖的性質を打開しようとする観点は、竹内好の言葉で言うと、次のような『国民文学論』の巻尾の部分の言葉になるであろう。

語りかけよ。所在に、隣人に向けて語りかけよ。そして隣人から語りかけられることを期待せよ。それによって思想表現の自由を所在に拡大せよ。これがマス・コミュニケーションに対抗して、思想上の国民統一を作り出す唯一の道である⁶。

つまり、竹内好が心に期待している日本文学とは、文壇文学から徹底的に離れ、社会における民衆の生活と直接に結合する文学であろう。竹内は「隣人」と「隣人」の間の生活の中で自然に形成した言葉こそが文学であると書いている。それを象徴するのは、『山びこ学校』であろう。

戦時中から敗戦直後にかけて、日本の民衆の生活は苦しかった。その点に関して、尾崎秀樹と山田宗睦は次のように述べている。

荒廃した焦土に生活が戻ってくる。どこまでも青い空の下で、私たちは生活のよろこびをかみしめた。既成の権威は失墜し、秩序は混乱した。民主化の諸方策が相次いで天下ってくる。しかし戦争を放棄した平和憲法もパンを保障してはくれなかった。私たちは食うために働いた。いや食うことだけがすべてだったといってもいい。そして生きることの確証を、よみがえったヨルのなかに発見した⁷。

『山びこ学校』は深刻な食糧危機に臨んでいた生徒たちが自ら自分の苦しい生活を書いた作品であり、民衆の生活の苦しさをそのまま、ありのままに表現したものである。たとえば、『山びこ学校』における、江口江一が書いた「母の死とその後」の冒頭は「僕の家は貧乏で、山元村の中でもいちばんぐらい貧乏です」⁸であり、石井敏雄が書いた「すみ山」の冒頭は「私はまいにち学校にもゆかず、すみ山にゆきました。私は『みんなのように学校にゆけたらな』とおもっているときがたびたびあるのです」⁹であり、調査報告の「学校はどのくらい金がかかるものか」の冒頭は「今、私たちの家では金がなくて困っています」¹⁰である。つまり、一部の生徒が冒頭部分で直接に社会生活における自分の生活の苦しさを

⁵ 内藤由直『国民文学のストラテジー プロレタリア文学運動批判の理路と隘路』（前掲）、92—93頁。

⁶ 竹内好「人と人との間」『国民文学論』、東京大学出版会、1954年、231頁。

⁷ 尾崎秀樹、山田宗睦『戦後生活文化史 私たちの生きた道』、弘文堂、1966年、8頁。

⁸ 江口江一「母の死とその後」、無着成恭編『山びこ学校』、岩波書店、1995年、22頁。

⁹ 石井敏雄「すみ山」、無着成恭編『山びこ学校』、岩波書店、1995年、42頁。

¹⁰ 佐藤藤三郎など「学校はどのくらい金がかかるものか」、無着成恭編『山びこ学校』、岩波書店、1995年、160頁。

を述べているのである。

とりわけ、文部大臣賞を獲得した江口江一の文章「母の死とその後」は有名になった。江口は次のように書いている。

それで、葬式をすまして、金を全部整理してみたら、「正味七千円のこった。おまえのおやじが死んだときよりも残った。」とばんちゃんがいったので、僕も、「ほんとにのこったのかなあ。」と思ったほどでした。しかし借金を返したら、やはりあとには四千五百円の借金がのこっただけでした。だからやはり父が死んだときの方がよかったです¹¹。

両親を失った際、江口の家に残ったのは借金のみであった。江口は自分の生活のありのままを書くことを通して、当時の社会における貧しい階層の真実の状況を描いた。さらに現実的な描写は以下である。

この七千円の借金というのは、昭和二十三年度に出した借金で、三月から一カ月平均千三百円ずつ十カ月一万三千円の扶助料をもらったほかに出しているものです。

それは二十三年度の生活を考えるとすぐわかるのです。五人家族で食ってゆくだけ、それも配給米をもらうだけで、一斗五百円（今年は六百二十円）としても、五人で一カ月三斗七升五合ですから、金に見積れば、千八百七十五円です。この金が一カ月にぜひ必要な金だったのです。それが十二カ月では二万二千五百円になるわけです。それから去年（二十三年度）の扶助料一万三千円を引いてみたところで、米代だけで九千五百円の借金です。それは、二十二年度の葉煙草の収入から出たとしても、二十二年度の借金を引いたのこりであろうし、わずかなものでしたでしょう。だから去年の借金が、米代だけでも九千五百円にもなるのに、それを七千円でくいとめたところにお母さんの努力がわかるのです¹²。

日本の文壇文学が作家の個人的な心理を描写する点を重視することと異なり、江口は専門的な文学的表現の技術を使わず、素朴に数学的に計算した結果を描いている。生活において、江口はそのように素朴に計算していたのである。美しい文学的修辭で飾らず、低い階層としての自身の素朴さを直接に表現する真の感情が、読者の心を動かしたのである。

文壇文学の心理的描写と異なり、『山びこ学校』の中には隣人と隣人の対話と最小限の説明のみが直接に文章を構成する例も多い。たとえば、川合義憲の「からめやき（かるめ焼き）」の冒頭では、次のように書いている。

「伝さん、伝さんのうつつあ（家に）、あべ（行こう）は」

「なして（なぜ）や」

「こだごどしったておもしろくなえどれず（こんなことしていても、おもしろくな

¹¹ 江口江一「母の死とその後」（前掲）、28頁。

¹² 江口江一「母の死とその後」（前掲）、32頁。

いじゃないか)。」

「ンだな。」

そういつて、マンガを読んでいた伝さんがコタツからひょいと立ってきて、

「ん(行きましょう)じゃさ。」

と云った。

戸をあけて見ると雪がぞくぞく降っていた¹³。

以上の隣人と隣人の対話は極めて現実的である。もし注釈がないと、「うつつあ」が「家に」を意味し、「あべ」が「行こう」を表すこと、さらに「なして」が「なぜ」の意味であることなどが理解できないであろう。注釈を多く使いながら、現実の対話をそのまま語ることが『山びこ学校』における表現の中で頻繁に見られる。以上のような、演劇の台詞にも似た口語表現を多用する素朴な描写には、当時の日本の文壇文学に由来する文学的表現のテクニックの影響は見られない。

では、竹内好が『山びこ学校』を通して、見出した文学観の現実的意味はどこにあるのか。その点に関して、鶴見和子の次の言葉が参考になるであろう。

第三は、『山びこ学校』によって啓発された生活記録運動のその後の展開である。四日市の東亜紡織で働いていた娘たちの多くは伊那谷に帰って、嫁ぎ、現在ではそれぞれ農家の大黒柱となっている。沢井余志郎さんは、生活記録運動を推進したために、表向きは「就業規則違反」の理由で、解雇された。沢井さんは会社を相手どって解雇無効の訴えをおこし、長く苦しい裁判闘争の末勝訴したが、会社に戻ることは断念した。それ以来、四日市の地区労働組合で働いている。組合の仕事の「余暇」に、四日市公害反対運動の「助っ人」となり、公害被害者の聞き書きをして、『くさい魚とぜんそくの証文——公害四日市の記録文集』をまとめた(はる書房、一九八四年)。この間、沢井さんは一貫して伊那谷に帰った娘たちと文通し、文集を出しつづけた。

一九五二年、劇団三期会(現在は東京演劇アンサンブルと改称)は、『母の歴史』や『仲間の中の恋愛』にもとづいて、「明日を紡ぐ娘たち」(脚本・広渡常敏)の芝居を、「生活を記録する会」と集団創作し、上演した。一九九四年には、ふたたびおなじテーマを、こんどは歴史的展望のもとに追求した。高井有一氏の小説『真実の学校』(新潮社、一九八〇年)にもとづいて、戦前の国分一太郎さん達の「北方教育」(東北地方の生活綴方運動)を描き、それを『母の歴史』につなげ、そしてさらに、伊那谷の農家の大黒柱になったかつての娘たちの現在の暮らしぶりに結びつけたのである。これは高井氏の小説の題名をとって、「真実の学校」として公演された。

「真実の学校」の意味は、制度としての学校に限らない。職場でも、村でも、町でも小さな仲間をつくり、持続して体験をくらべあい、話しあいながら書くことで、人間は成長するというより広い意味での「学校」を示唆しているのだろう。

こうして、『山びこ学校』の反響は、戦前一敗戦後一戦後五十年の現在をつなぐ、

¹³ 川合義憲の「からめやき(かるめ焼き)」、無着成恭編『山びこ学校』、岩波書店、1995年、63頁。下線は原文にはなく、()の部分は、原文はルビである。

暮らしの変化と人間の成長とを展望する民衆史のこころみにまで及んでいるということが出来る¹⁴。

以上のように竹内好の文学観において高く評価された『山びこ学校』は、戦後日本の社会教育の発展に大きな寄与をしたのである。そうしたことから、竹内の文学観の価値が窺われるであろう。竹内の文学観の価値が今後、さらに発見され、日本の社会に寄与すると筆者は期待している。

¹⁴ 鶴見和子「『山びこ学校』は歴史を創る」、無着成恭編『山びこ学校』、岩波書店、1995年、366—367頁。

初出一覧：

第一章：竹内好の文学観の形成—北京留学を契機として（『立命館文学』第 662 号、立命館大学人文学会、2019 年 3 月）

第二章：竹内好による「文学者」魯迅像の生成—小田嶽夫の「愛国者」魯迅像への懐疑（『立命館文学』第 655 号、立命館大学人文学会、2018 年 1 月）

既発表論文を本博士論文へ収録するにあたって、いずれも加筆・修正を施した。

附録：筆者の修士論文における中国の竹内好研究に対する考察部分の抜粋

まず、総合的な研究が注目されている。竹内好に総合的に接近する勢いは実は中国の学者が竹内好という人物に触れたときから始まる。早期の研究者は戈宝権を例として、世界諸国の魯迅研究と魯迅翻訳を研究するときに竹内の名著『魯迅』も論じた。

20世紀80年代になると、竹内好の『魯迅』の中国語版が出版され、竹内を研究する風潮が強まった。李心峰が竹内の『魯迅』を翻訳し、「日本学者竹内好論魯迅的作品」という論文を完成し、直接、『魯迅』を理解しようとする。李氏は竹内の思想を考察だけでなく、魯迅の作品に対する竹内の見方をも研究し、竹内が常に簡単な言葉で魯迅の作品の最も根本的な特徴を説明できると主張している。¹

次に、主題の研究も多くなされている。

第一、歴史の立場からの研究においては、孫歌の『竹内好という問い』を始めとする一連の研究は歴史上の竹内好が世界を認識する方式を解読しようという試みであり、強い影響力を持っている。孫歌は竹内を掛け橋として現在の中日両国の知識人の対話を展開しようとする。特に日本の学者溝口雄三とともに「知識共同体」を構築する彼女の努力は目立っている。

また、張双昊、靳叢林の「「竹内魯迅」的「回心」与「掙扎」」を例として、多くの中国の研究者は歴史上の竹内好を研究するとき、無視できない「回心」という理論を究明したい。張氏と靳氏のこの文章には、「回心」と「掙扎」という言葉は竹内好の名作『魯迅』における肝心の言葉と判断された。「竹内魯迅」を究明するとき、「回心」という理論は非常に難しいと言えよう。今までも「回心」は竹内研究界と魯迅研究界によく再解釈されているものである。

第二、文学の立場からの研究においては、たとえば、郜元宝の「竹内好的魯迅論」は竹内好の思想の核心、あるいは根本的なものを探究しようと試みた。郜氏の研究によると、「竹内魯迅」の核心は啓蒙者魯迅と文学者魯迅の間に存在する内在的な緊張関係である。啓蒙者魯迅より、文学者魯迅が「竹内魯迅」の根本的なものであると彼は主張している。

第三、思想の立場からの研究においては、たとえば、劉偉の「李長之『魯迅批判』対竹内好『魯迅』的影響」には、竹内好と李長之との関係も究明しようとする。劉氏の研究によると、竹内は李長之からの影響を深く受け、李長之の思想を改造し、自分の理論を完成させた。

また、現在、竹内好の思想の源を探究する研究は新しい方向も見える。たとえば、劉偉の「「竹内魯迅」与「西田哲学」」という論文には、竹内と西田幾多郎の関係も発見され、研究をなされている。劉氏の研究によると、竹内が魯迅を論じるとき、提示された「無」や「掙扎」などの問題点は西田幾多郎の「純粹經驗」や「矛盾的自我同一」などの理論と繋がりがあがる。つまり、劉氏の説には、竹内が西田幾多郎の理論を利用して魯迅を解釈し、

¹ 李心峰「日本学者竹内好論魯迅的作品」『安徽大学学报』（哲学社会科学版）1986年第4期、1986年10月、47—51頁。

独特な「竹内魯迅」を完成したということが見える。²

そのほか、その他の領域における中国学者の竹内研究は、一、日本の学者の発想を踏まえ、新しい史料の解説を通して竹内と魯迅を改めて認識しようとしている。たとえば、高遠東の「「仙台経験」与「棄医従文」」がそれである。二、『魯迅与竹内好』（薛毅、孫曉忠）、『周氏兄弟与日本』（趙京華）などは、研究著作の編纂を通じて、竹内を代表とする日本の学者が魯迅を研究したり、中国を研究したりする方法、あるいは問題を整理している。とりわけ竹内好の思想を解説し、他の日本の魯迅研究者の思想と比較させるという研究は目立っている。たとえば、吳曉東の「竹内好与伊藤虎丸对魯迅「狂人日記」的解説」には、「狂人日記」を例として、竹内と伊藤虎丸の考察を対照的に分析した。三、靳叢林の『竹内好的魯迅研究』などは直接、竹内の魯迅のイメージを研究し、それによって竹内の魯迅研究の「現代性」を述べている。総じて、中国の学者の竹内好研究は各方面に渡っており、視野が広く、立場は多様で、自分の問題意識と比較してその考えを展開している。

² 劉偉「『竹内魯迅』与『西田哲学』」『大連理工大学学報』（社会科学版）2013年第3期、2013年7月、125—129頁。

参考文献一覧

竹内好主要著作

『竹内好全集』全17巻、筑摩書房、1980年—1982年。

『魯迅』、日本評論社、1944年。

『魯迅雑記』、世界評論社、1949年。

『現代中国論』、河出書房、1951年。

『日本イデオロギイ』、筑摩書房、1952年。

『国民文学論』、東京大学出版会、1954年。

『魯迅』、未来社、1961年。

『状況的 竹内好対談集』、合同出版、1970年。

「北京日記」『竹内好全集』第15巻、筑摩書房、1981年。

「復員日記」『竹内好全集』第15巻、筑摩書房、1981年。

「浦和日記（一）」『竹内好全集』第15巻、筑摩書房、1981年。

「浦和日記（二）」『竹内好全集』第16巻、筑摩書房、1981年。

竹内好研究書籍

立間祥介『竹内好著作ノート』、図書新聞社、1965年。

本多秋五『物語戦後文学史』、新潮社、1965年。

松本健一『竹内好論 革命と沈黙』、第三文明社、1975年。

菅孝行『竹内好論—亜細亜への反歌』、三一書房、1976年。

魯迅友の会竹内好追悼号編集委員会編『追悼 竹内好』、魯迅友の会、1978年。

中川幾郎『竹内好の文学と思想』、オリジン出版センター、1985年。

鶴見俊輔『竹内好 ある方法の伝記』、リプロポート、1995年。

ローレンス・オルソン著、黒川創、北沢恒彦、中尾ハジメ訳『アンビヴァレント・モダーンズ』、新宿書房、1997年。（オリジナルタイトルは『The Ambivalent Moderns: Portraits in Japanese Cultural Identity』, Rowman & Littlefield Pub Inc, 1992.）

松本健一『竹内好「日本のアジア主義」精読』、岩波書店、2000年。

岡山麻子『竹内好の文学精神』、論創社、2002年。

孫歌『竹内好という問い』、岩波書店、2005年。

孫歌『竹内好悖論』、北京大学出版社、2005年。

松本健一『竹内好論』、岩波書店、2005年。

加々美光行『鏡の中の日本と中国 中国学ゴロ・ビヘイビオリズムの視座』、日本評論社、2007年。

渡辺一民『武田泰淳と竹内好 近代日本にとっての中国』、みすず書房、2010年。
丸川哲史『竹内好 アジアとの出会い』、河出ブックス、2010年。
藤井省三『魯迅—東アジアを生きる文学』、岩波書店、2011年。
靳叢林『竹内好の魯迅研究』、北京大学出版社、2012年。
内藤由直『国民文学のストラテジー プロレタリア文学運動批判の理路と隘路』、双文社出版、2014年。
藤井省三『魯迅と日本文学 漱石・鷗外から清張・春樹まで』、東京大学出版会、2015年。
黒川みどり、山田智編『竹内好とその時代 歴史学からの対話』、有志舎、2018年。
佐藤泉『一九五〇年代、批評の政治学』、中央公論新社、2018年。

竹内好研究論文

菅孝行「検証 竹内好」『情況』第2期第5巻第11号、1944年12月。
佐々木基一「竹内好『魯迅』」『国土』第3号、1947年7月。
幼方直吉「魯迅を生かす道—竹内好氏の中国観について」『中国研究』第10号、1949年10月。
猪木正道「毛沢東と中国革命—竹内好『毛沢東評伝』を読む」『日本の方向』創文社、1953年。
中里竜彦「魯迅精神と実存主義—竹内好氏の思想方法について」『思想』第257号、1954年10月。
高橋和巳「竹内好—その魯迅精神」『思想の科学』第29号第30号、1961年5月、6月。
村上一郎「竹内好私抄—人間の勁さとめでたさの交錯について」『新日本文学』第170号、1961年9月。
和泉あき「竹内好論」『文学的立場』1966年7月8月合併号、1966年7月、8月。
吉本隆明「実践的矛盾について—竹内好をめぐる」『文芸』第5巻第8号、1966年8月。
いいだもも「竹内好論—方法としてのアジアが直面している歴史」『思想の科学』第54号、1966年9月。
三枝康孝「方法としての近代主義批判—竹内好についての覚書」『日本文学』第15巻第10号、1966年10月、11月。
今村与志雄「竹内好論—中国と魯迅に関連して」『大阪市大新聞』第294号、1966年11月10日。
加藤周一「竹内好の批評装置」『展望』第95号、1966年11月。
竹内成明「竹内好論—『抵抗の哲学』」『思想の科学』第57号、1966年12月。
檜山久雄「竹内好におけるアジア主義とナショナリズムの展開」『新日本文学』第235号、1967年2月。
高橋和巳「<反対の墓場>から—竹内好」『高橋和巳作品集』第8巻、河出書房新社、1970年。
飛鳥井雅道「魯迅把握と日本の文学—竹内好を中心に」『新日本文学』第280号、1970年11月。
紅野敏郎「竹内好」『国文学解釈と鑑賞』第36巻第7号、1971年6月。

尾崎秀樹「武田泰淳と竹内好」『国文学解釈と鑑賞』第37巻第8号、1972年7月。
松本健一「日本浪漫派の自己否定」『辺境』第9号、1972年11月。
川本三郎「『絶望』の超克—竹内好論」『辺境』第9号、1972年。
内田弘「竹内好論」『危機の文明と日本マルクス主義』、田畑書店、1974年。
上野昂志「竹内好とその時代」『思想の科学』第36号、1974年9月。
菅孝行「戦後批判の思想的文脈」『思想の科学』第36号、1974年9月。
磯田光一「仮構の救世済民—竹内好論」『群像』第30巻第1号、1975年1月。
幼方直吉「一つのエピソード—大八車を引く竹内好」『文学』第45巻第5号、1977年5月。
内村剛介「魯迅に屈する竹内好」『日中経済協会会報』、1977年6月。
市井三郎「竹内好と明治維新」『思想の科学』第91号、1978年5月。
井出孫六「『竹内好と臼田町』覚え書」『思想の科学』第91号、1978年5月。
幼方直吉「北京・上海における竹内好の生活とその意味」『思想の科学』第91号、1978年5月。
大野力「竹内さんと思想の科学」『思想の科学』第91号、1978年5月。
鈴木正「竹内好の方法原理」『思想の科学』第91号、1978年5月。
高島通敏「竹内好と安保闘争」『思想の科学』第91号、1978年5月。
津村喬「反同時代人としての竹内好」『思想の科学』第91号、1978年5月。
鶴見和子「竹内さんに中国語を学ぶ」『思想の科学』第91号、1978年5月。
鶴見俊輔「竹内好の文体」『思想の科学』第91号、1978年5月。
橋川文三「竹内好の魯迅新訳について」『思想の科学』第91号、1978年5月。
前田愛「国民文学論の行方」『思想の科学』第91号、1978年5月。
安田武「竹内好のその好き嫌い」『思想の科学』第91号、1978年5月。
しまねきよし「竹内好批判論文 解題」『思想の科学』第91号第98号、1978年5月、11月。
米田利昭「竹内好『日本イデオロギイ』と『国民文学論』」『日本文学』第31巻第10号、1982年10月。
李心峰「日本学者竹内好論魯迅的作品」『安徽大学学报』（哲学社会科学版）1986年第4期、1986年10月。
丸山昇「日本における魯迅」、伊藤虎丸・祖父江昭二・丸山昇『近代文学における中国と日本』、汲古書院、1986年。
桶谷秀昭「竹内好」『正論』第232号、1991年12月。
今井駿「竹内好の中国論について」『人文論集』第46巻第1号、1995年。
鵜飼哲「歴史を書き換えるということ—竹内好を読み直すために」『レヴィジョン [再審]』第1輯、1998年6月。
三宅芳夫「留保なき否定性—二つの京都学派批判」『批評空間』第2期第19号、1998年10月。
岡山麻子「竹内好の文学精神—存在と文学」『年報日本史叢』1999年号、1999年12月。
李京錫「竹内好のアジア主義論の構造および諸問題」『早稲田政治公法研究』第64号、2000年8月。

リチャード・カリチマン「竹内好における抵抗の問題」『現代思想』第29巻第8号、2001年7月。

伊藤虎丸「『魯迅と終末論』再説—「竹内魯迅」と一九三〇年代思想の今日的意義」『東京女子大学比較文化研究所紀要』62号、2001年。

大原祐治「羅漢と仏像—雑誌『中国文学』における竹内好・武田泰淳」『昭和文学研究』第45号、2002年9月。

大原祐治「北京の輩と兵隊—『中国文学月報』における竹内好・武田泰淳」『学習院大学人文科学論集』第11号、2002年10月。

藤井省三「太宰治の『惜別』と竹内好の『魯迅』」『国文学 解釈と教材の研究』第47巻第14号、2002年12月。

岡山麻子「竹内好の「北京日記」—文学の解体と再生」『社会文化史学』第44号、2003年1月。

島村輝「浮沈する『国民』と『文学』——『国民文学論争』という問題系」『文学』第5巻第6号、2004年11月—12月。

内藤由直「竹内好論—国民文学論争における政治と文学」『論究日本文学』第82号、2005年5月。

鈴木将久「竹内好『国民文学論』与中国人民文学的問題」『河南大学学报』（社会科学版）2006年6期、2006年11月。

伊藤徳也「竹内好の周作人論」『周作人研究通信』第5号、2007年1月。

王俊文「一九三八年の北京に於ける竹内好と「鬼」の発見—ある「惨として歡を尽くさず」の集まりを中心として」、『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第10号、2007年11月。

内藤由直「野間宏の抵抗と革命—戦後国民文学論の同時代性」『社会文学』第33号、2011年2月。

劉偉「『竹内魯迅』与『西田哲学』」『大連理工大学学报』（社会科学版）2013年第3期、2013年7月。

朱琳「二人の『弱者』の交錯—1930年代における竹内好・武田泰淳の中国体験を中心に」『国際文化研究』第21号、2015年3月。

李明輝「百年日本魯迅研究的生機与偏至」『文学評論』2016年第5期、2016年9月。